浮き雲に成り代わった者

白炉丸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〔第１転生〕完結済

孤高の浮き雲こと、雲雀恭弥に成り代わった俺。原作時は縛りが多いみたいだけど気にしない　気にしたら負けだ。あとには自由が待っている…はず

原作崩壊全くなし、原作通りにしか進みません。

誤字報告ありがとうございます

番外編は気が向いたら載せていくことにします。

←次作「初代雲の兄弟　霧雲の守護者になった者」

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２０００８９／

原作知らないと　わかりにくいです。第１作目の小説です。

その場のノリ、その場で考えながら　書きました

よろしくおねがいします。

目次

始まった雲生活
浮雲1 ―― 1
浮雲2 ―― 3
浮雲3 ―― 6
浮雲4 ―― 9
浮雲5 ―― 11
浮雲6 ―― 13
浮雲7 ―― 16
浮雲8 ―― 18
浮雲9 ―― 20
浮雲10 ―― 22
浮雲11 ―― 24
原作雲雀のプロフィール、草壁の語りを添えて ―― 26
原作開始　日常編
浮雲12 ―― 29
浮雲13 ―― 31
浮雲14 ―― 35
浮雲15 ―― 38
浮雲16 ―― 42
浮雲17 ―― 45
浮雲18 ―― 48
浮雲19 ―― 51
浮雲20 ―― 55
浮雲21 ―― 60

浮雲22 63
浮雲23 65
浮雲24 67
黒曜編
浮雲25 69
浮雲26 72
浮雲27 75
浮雲28 78
浮雲29 82
VSヴァリアー編
浮雲30 84
浮雲31 87
浮雲32 90
浮雲33 94
浮雲34 97
浮雲35 100
浮雲36 106
浮雲37 109
浮雲38 114
未来編？
浮雲39 119
浮雲40 123
番外 雲と大空 126
未来編
浮雲41 130

浮雲42 …… 133
浮雲43 …… 138
浮雲44 …… 142
浮雲45 …… 145
浮雲46 …… 149
浮雲47 …… 152
浮雲48 …… 156
浮雲49 …… 159
浮雲50 …… 163
浮雲51 …… 166
浮雲52 …… 169
浮雲53 …… 172
浮雲54 …… 176
浮雲55 …… 183
浮雲56 …… 191
10年前雲雀来る！
浮雲57 …… 195
浮雲58 …… 200
浮雲59 …… 204
浮雲60 …… 207
浮雲61 …… 211
浮雲62 …… 214
浮雲63 …… 217
終わる世界
浮雲64 …… 225
番外編

（１０年後　大人雲雀）

始まった雲生活
浮雲　1

目を覚ましたら俺は、見たことがない神社の前に立っていた。

え、なんで？

目の前にはそれほど大きくはない神社があって、俺が立っているとこの左右には、
俺の背の2倍くらいの大きさの石灯籠（いしとうろう）が置いてある。
いや！灯籠でかいな。
俺の身長、灯籠の半分とちょっとくらいしかないし…
いや…　周りがデカいんじゃない、俺が小さくなってるのか！
手を見てみるとそれは、モミジのおてて（そんなに小さくはないか）と呼ばれるぐらいの大きさのものに変わっており、体も自分のものではなくなっていた。
（だって生まれた時からあったほくろがなくなってるし…）〔どこで判断してんだよ〕

辺りを見渡してみると　多くの木が生えていて、石階段が下の方に続いている。
ここはどこかの神社だということは、わかる。

俺は、自分が何故ここにいるかは　わからないが、
今のこの状況に読み覚えがある。
そう…今の俺はてんｓ「成り代わりじゃ」

・・・・え？「今のおぬしの状況は―転生成り代わり―をし、今前の記憶が戻った。という状況、状態じゃな。」
可愛い声が聞こえて、神社の方を見てみると、賽銭箱の上に　金髪

ツインテールのロリっ子が座っていた。
「可愛いもロリっ子も大歓迎じゃ、
　だが、いえすろりーた、のーたっち　じゃぞ」
…で？　　今の俺は転生成り代わりで記憶が戻ったばかり　と、それはわかった。
　それでいったい、誰に成り変わったんだ？
「ななんと!!　かてきょーヒットマン　　孤高の浮き雲　雲雀恭弥じゃ！」
　あぁ、知ってるマンガのキャラだ…　え、雲雀さん☒　メンド（面倒くさい）。
　孤高？俺そんなキャラじゃないし…　原作崩壊　確実だな。
「そこのところは大丈夫じゃ。あぁ、この世界はちゃんと、カテキョーの世界じゃぞ。
　でじゃ、おぬしの中には原作雲雀の心が入っているからのぉ、群(むれ)が嫌いなのも、咬み殺したくなるのも、雲雀恭弥の物事の考え方も、おぬしの考え方として、一応理解できるようになっとる。
　つまり、おぬしは原作雲雀としても行動ができる、、というか、原作が終わるまでおぬしは、原作雲雀として物事を進めないといかん。世界がおぬしを縛るのじゃ。これはワシでも変えられん。
　まぁ、おぬしには転生特典が何かしら付いたはずじゃし、おぬしの記憶と考え方は残る様にしといたから、近くでキャラクター達を見れるということで勘弁してほしいのじゃ」

　まぁ、元の世界に未練は、マンガの続きが見れないとゆうことしかないから、べつにいいし。
　あー、じゃあここは並盛神社か？　　地理とか自分の情報とかがわからないからな。
「そういえばそうじゃの、じゃあ今のおぬしの情報、プロフィールを教えるぞ」

浮雲　２

プロフィール

名前…雲雀恭弥
性別…男
年齢…秘密
誕生日…５月５日（牡牛座）
血液型…秘密
身長…１１０ｃｍ
好きな食べ物…和食、ハンバーグ
好きな言葉…「咬み殺す」「ワオ」
武器…トンファー
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
わいてくる感情や考え方は原作雲雀とほぼ同じ
誰も見ていない、聞いていないない場所では、意識すれば、自分の言葉で話すことができる。
だが、録音などはできない。
世界の力が働いていている影響で、幾ら鍛えても、その力を誰かが見ている状況で発揮することができない。
（原作時間の間は　原作通りの力しか出せない）

原作知識持ち

特典など
最初の記憶、考え方を忘れることがない。
超直感に及ぶ程の勘の良さ。
完全記憶能力　（一度見たものは忘れない）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝

「と、いう感じじゃな。」
へぇ～結構強いじゃんか、いいよ　いいよ。
年齢と血液型が秘密ってゆぅのは気になるけど、原作雲雀も　そこは「不明」だったしな。
「後は…そうじゃな。　おぬしに前の記憶が戻る前の雲雀の記憶を思い出せるようにしてっと」
お、わぁ　、放任主義者　親の顔わからん。　家デケェ　日本屋敷じゃん。へぇ、トンファーもう使えるのか。
え、、草壁哲矢って「じゃ、もういいかの?」
「ワシは戻るとするわい。おぬしは　おぬしの出来る範囲で好きに生きるんじゃぞ。
原作が終わるまでは、多分絶対　死なないしの」
あぁ、わかった。　感謝する。
「気にせんでよい（どうせ、また会うことになるしのぉ）じゃあな、言葉はちゃんと口に出すんじゃぞ」
そう言って、ロリっ子は一瞬でその場から姿を消した。
話している間に時間が経過し、太陽は沈みかけ、あたりは少し暗くなってきた。

ハァ…　初めてロリっ子に会ったな。　いや、そこじゃない。
色々初めてな事がおこったしなぁ。
まあ今は、日が落ちる前に家に帰ろう。
そう考え、＜雲雀恭弥＞は、家に帰って行った。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ここは雲雀家、恭弥の部屋

帰って来て家を軽く見て回ったけど、まぁー広い
広いんだけど人が居ないな。　　記憶によると、親が帰ってくるのは不定期だし、帰ってきたとしても夜中みたいだ。親から用事がある時はメモを置いておくみたいだし、お手伝いさんが来て、家事をしてくれてるみたいだけど、あまりその人には会わないみたいだな。

自分の部屋は、ここと、隣に和室の寝室があった。
少し見てみたけど、物は無くて、押入れに布団が入っていたのを確認した。
この部屋も和室で床は畳だ。　　机はコタツ机、
大きな本棚がありそこには小さい子が読みそうな絵本から動植物図鑑、小説、あとは、医療や心理学、果ては料理の本まである。
いろんな本を詰め込んだみたいな感じがする。
他には、服が入っているタンスなど一通りの家具はあった。

これからどうしようか、　　まあまずは晩ご飯か、　　食べてこよっと。

浮雲　3

ご飯　美味しかったです。
（ハンバーグが凄く美味しい、味覚も変わってるみたい）
ご飯は時間通りに行けば、すぐに食べれるようになってるみたいだ。
なにこれすごい、気配も感じないし物音もしない、お手伝いさん有能
お手伝いさん最強説　　実はお手伝いさんが裏ボスだったり……
さっき、お手伝いさんとはあまり会わないとか言った（考えた）けど、ホントは一回も会ったことないみたいなんだよね。

まあ、それは置いといて、今考えても仕方ないし。
これからどうするか、なんだよ。
記憶が戻る前にしてた事をそのまま続けててもいい感じなんだよね。
起床→朝食食べる→トンファー持って並盛町の見回り（群（むれ）が居たら咬み殺す）→家に帰って昼食→読書や勉強をする→おやつを食べる→トンファー持って並盛町の見回り（群が居たら咬み殺す）→家に帰って晩ご飯→お風呂入る→読書や勉強をする→就寝
と、いう感じ　　まず言いたい、保育園（幼稚園）それか小学校は？　　行ってない、行ったことがないみたいだけど…

ま！いいか、行けと言われれば行く事にしよう、世界の力、原作力（げんさくりょく）が働いてるから、中学には絶対行く事になると思うし、　　それまでは　できる範囲で好きに動こう。

成り代わり、　いいぜ、かかって来い世界！
俺は雲雀恭弥として、この世界を生きてやる‼？

その後　原作終了後！キャラクター達にイタズラしてやる‼？

（注意、この成り代わり主　　Ｓっ気がありますっ）（それを上手く出せるかはわかりません）

そうと決まれば　イタズラしても仕返しで死なないように鍛えないとな、　原作中は幾ら鍛えても、それを表に出せないみたいだが、原作終了後は違うみてぇだしな。　鍛えれば　原作雲雀より強くなれるみたいだしな。

後は、、原作に出てきた場所でも巡ってみようか、　守護者の家とかも見てみようかな。

（大空、雨、晴　ぐらいか今居るのは）

それと、原作前にイタリア語とかを勉強しておこう、メモ置いて親かお手伝いさんに教材を頼めばいいか…。

じゃ、　今日はもういいかな？　眠いし　風呂入って寝ることにしよう。

メモは書いて食卓にでも置いておこう。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

お風呂　大きかったです。

（金持ちすげー　　ひのき風呂でした）

ってことでね、今、布団ひこうと思って　寝室に行ったのよ。

　　そしたらね、　もうね、　布団がしいてありました。

・・・お手伝いさんは　凄い　これにつきる。

じゃ、おやすみ〜

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「おーい、戻ったのじゃ」

「あ！　　おかえりなさい　　　おば様」

「これ！　おば　　と呼ぶなといつも言っとるじゃろ！」
「あぁ～　　ごめんなさい　おば様」　「おい」
「で、どうでしたか？　　あの転生者は？」
「そうじゃの、精神的にも魂的にも問題はなかったのじゃ。　特典（神のおくりもの）も魂にしっかりとなじんでいたしのぉ。　　記憶も問題なく、ちゃんと思い出していたのじゃ。」
「そうでしたか、それは　良かったです。　　一時はどうなるかと思いました。」
「まったくじゃ、まさかアレの結果がこうなってしまうとは、　魂が無事じゃったのが幸いじゃったな。」
「そうですね。アレがあぁなるのは想像がつかなかったです。」
「ワシもじゃ。まぁ　できる限り　あやつに都合の良いことになるように　隠れ特典として　運が良くなるものも付加しておいたしのぉ
　　ま、ほぼ原作通りになるじゃろうな。」
（頑張るんじゃぞ。ワシも煎餅片手にたまに見守ってやるからのぉ）

浮雲　４

おはっようございますっと
とくに夢も見ずに目が覚めました。
（こういう　転生とかって夢に神とかが出てくるのが多いけど、何もでてこなかったな。　昨日　ロリっ子に会ったけどさ）
今日の予定は　そうだなぁ～　　まずは　朝食食べるだろ、その後は、並盛の見回りと称して　観光でもしようかね。守護者の家は今日は置いといて、商店街（ラ・ナミモリーヌ）と並盛中学校にでも行ってみようかな。
じゃあ　　そろそろ朝食でも食べてこようかな。
てことで、カット‼？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ハイ‼？ということで、朝食食べて　　自室に戻ってきました。
（朝食は　焼き鮭と、なめこの味噌汁だった。　寝床にはもう布団が敷いてなかった。やっぱり　うちのお手伝いさんは有能　）
じゃあそろそろ、トンファーを持って　並盛の見回りにでも行こうか。
（雲雀さんってこの頃からトンファー持って見回りしてたんだね…さすヒバ（流石です雲雀さん）だな。）
てことで、出発‼？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

着きました　　並盛商店街‼？［沢田母が人騙し三兄弟（名称忘れた）に騙される回に　リボーン達に護衛されながら買い物にきた場所（多分）ｂｙ作者　］
ここに来るまでに　不良系の奴を２１、その他を１２　咬み殺した。　　不良系、というかヤクザだな。そいつらは全て　向こうから

仕掛けてきたんだよね。
俺が周りの人に避(さ)けられながら道を歩いていた時に、

「お前がキョウヤだな！　」
って、俺の前に一人、そいつと俺を囲むようにして２０人　で、俺の前に居るやつがそう言ってきたんだ。
それで俺が、「そうだよ。僕が恭弥、それで君たち　なに群れてるの？　咬み殺すよ？」と言って、そしたら向こうが、
「俺らはお前に潰された『夜桜組(よざくらぐみ)』のものだ！　俺らはその場に居なかったんで、お前のようなガキが組を潰したってのは　俄(にわか)には信じられんが、俺の舎弟はお前にやられたと、大怪我しながら俺に報告してきたんだ！　　アイツは俺に嘘などつかんしな、よって!!
俺らはお前に制裁をあたえる！　たとえガキでも容赦はせんぞ!!」
だってさ、だからまぁ「　弱いやつには興味がないんだ。」って言って咬み殺しておいた。
（雲雀さんは小さくても強かった。）

そんなこんなしているうちに　着きました、ラ・ナミモリーヌ
・・・入りづらい、、そうだよなぁ　、　雲雀さんが洋菓子食べてるのは考えつかないしな～（偏見です）
特に甘いもの食べたいとは思わないし　今日はいいや
じゃあ次は並盛中学校中にでも行こうかな。

浮雲　5

ハイ！　着きました　並盛中学校、　　着く前に　コンビニで群れていた不良共を咬み殺した。
（体が勝手に反応するんじゃ～）
門が閉まってるから入れないな。
まぁ　今の体（年齢）でここに入ることは少し面倒な事をしないといけないからあまりやりたくないし…
入るとしても１０年いかない位　あとになるかな。
（原作の雲雀さんも　今の雲雀成り代わりな俺も、年齢が不明だけど、草壁哲矢より　年上らしいし、その草壁は笹川了平と同じく中３だし…
だがたとえ、雲雀さんでも国の法律を無視はできな…　　いや、できるっていうか　もうやってるか？　　そうだな
法理って言えば守護者全員破ってる。それにって！　　以下略！
以下略！　言ってたらきりがない！）　〈追加情報＝雲雀さんは笹川了平が入学した時には風紀委員長を勤めていたらしい〉
まあ、今　並中に入るつもりもないし本能（雲雀の心）も特に反応してないから並盛中学校（こ）はひとまずおいてこう。

じゃあ、そろそろ昼になるから　一旦家に帰ろうか。

カット!!？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ハイ！　ということで、特に何事もなく（ヤクザと不良を計１３人（匹）咬み殺した）家に着き、昼ご飯食べてきて　　今は自室に居ます。
（昼ご飯は冷たいそばでした。）
今の時間は読書＆ａｍｐ；勉強の時間になるね。
何をしようか？　　というより、今　なにが必要か、だよね。
絵本は置いておくとして、医療系か　図鑑でも記憶するか

前世の記憶のお陰で、勉強は高校までなら確実にできるし（それに教科書丸暗記すればいいよね‼？　）　人体の構造でも見て　どこを攻撃したら1番痛いとか　拷問術でも覚えようかな？

いや…　そうだな、それも良いが、　トンファーを改造する為にそういう物作り系の本でも読もうか、そして　早めにトンファーを改造しよう。

爆発物系は別にいいや　ま、仕込みはしないけど、調合方法くらいは覚えておこう、なにかあるかもしれないし。（何があるんだよ）

後は・・・イタリア語でも勉強しておこうか、それと　中国語とかも一応やっておこうかな？　イーピンとかも居るし、役にはたつだろう。

まあ、完全記憶能力だっけか？　特典貰ってるから　本という本を読み漁って見ようとは考えてる。

あぁ、今は国語辞典を読んでるよ。凄いね　この能力、思い出そうとすると、パッ　って思い出したいものが出てくる。

だけど、前世の記憶には適応しないみたいだ。パッとは出てこない、少し考えないといけないな。

まぁ、あのロリっ子は、『忘れることはない』と言ってただけだしな。

忘れないって事も便利だし、使えるから、これでいいとしようか。

じゃあ、この時間にすることは決まったし、午後の見回りまでカットしよう。

それでは！　おやつを食べて、見回り開始まで　カット！

浮雲　6

ではでは、午後の見回りを開始する！
（おやつは　ラ・ナミモリーヌのケーキでした。　　え、ここまでくると怖いんだけど…。）
今回は、並盛山に行ってみよう。（沢田綱吉を鍛えるのに使った場所で、崖登りや　バジルと組み手した所…のはず。）

＋＋＋＋＋＋＋

着きましたっと。　　そういえば、並盛山って綱吉がディーノと行った所だったかな？
ディーノのペットのスッポン　エンツィオ　が巨大化して綱吉が潰されて、綱吉の足だったかが折れたシーンのさ。
まあいいや、今居るのは　綱吉が登った崖の下で、俺も試しにここを登ってみようと思う。
と、言うことで、まずは距離稼ぎ　　ジャンプでどこまでいけるか、
《ｌｅｆｔ》ググッ、、、《／ｌｅｆｔ》　　ヒザを曲げ、力を溜め
「ッホ　！」力強く飛び上がる
ダンッ!!　ビュ～ゥ!!?　勢いよく上に上がっていく
もう一度！　崖を足場にして！　ダンッ！　ビュウ！
「よっと」ガシッ！　岩壁を掴む
フゥ～　結構跳んだな。　片手だけで岩壁を掴み下を見てみる。
そうだなぁ、ここはだいたい、学校の三階ぐらいの高さだな。
ヤバイな、身体能力が高い　　流石雲雀さんの体だな、それともこの身体能力は転生特典なのか？
まぁ、使えるものは使うだけだしな。　　それより、さっさとこの崖を登りきるか。
～～～～～～～～～～～～～

よっ‼︎？　　フゥ～　　　あんがい簡単に登れたな
　太陽の傾き具合を見るに、それほど時間が経ってないみ
たいだし。
特にすることないし、帰ろ…

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ただいまっと！（帰る途中に原作で雲雀が桜クラ病をかけられた公
園？に行ってみた。不良がたむろしていたから咬み殺しといた。）
じゃあ、晩ご飯食べて、風呂入ってくるさ、　　カット！

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ハイ、という事で　、今　自室に居ます。
（食べた物をいちいち報告するのメンドイ↑じゃあやるな。　っ
て事で、もう言わないっス　　お手伝いさんが作る料理は全て
美味しいって事で　終わり）
じゃ、まぁ　　寝る前に　昼と同じ勉強？読書？をしてから寝
よう。
これからは　このループで生活していくつもりだから、何かあるま
で　カット　と、いう事で…

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

パリッ　モグモグ　ゴクン　バキッ　ボリボ
リ　ゴクン　ズズズ～　コクン　コトッ
「お、まだ始まったばかりじゃというのに生活が安定してきてるみた
いじゃのぉ
じゃが、イマイチ見ていても面白くないんじゃよな～
原作力のせいで、原作キャラクターに関われないしのぉ～」

「仕方ないじゃないんですか？　　それほどまでに、その世界の原作力というものは強いものですし。　」
「それは　わかってるんじゃがなぁ～　」
「読者がこの小説を読んでいても　ツマラナイと　感じるじゃろ
　ただでさえ中身がなくて、読みづらくて、意味がわかりづらいのじゃから」
「読者ってなんですか？」　　「理解できんのならそのままでよいのじゃ」

浮雲　7

ハイ!!!　『何か』ありましたよ。
その前に報告、あれから半年ほど経ったんだけど、勉強の方はイタリア語はだいぶ出来るようになった。今は中国語に手を出し始めたばかりで、トンファーは改造済み　、原作で山本武の刀を抑えた仕込み鉤（かぎ）と、ディーノの鞭を見て雲雀さんがトンファーに仕込んだ鎖とかを付けておいた。トンファーの総重量がヤバイことになってるけど、重さは特に感じない、何故だ。
（だけど、原作突入時にそれらを使用出来るかは　わからないが…）

それでだけど、今居る場所は　沢田綱吉の家の近く、そこで群れを見つけて咬み殺していたんだ。
そしたら、見つけてしまったんだ！　原作キャラを！
だが残念、綱吉ではないんだけどね。
まあ、チラッと見ただけというか、目が合った気がするというか目はバッチリ合ったんだけども。
あれだよね…　目が合った相手がね…ちょっとねぇ…

あぁ！いいよ！いいよーだ！　どうせ起こったことは変わらないし！
そうですよ！勘のいい人は気づいてるかもしれないけど、俺と目が合ったのは、
『その決断は神の采配と謳われる、ボンゴレⅠX世（ノーノ）Ｔｉｍｏｔｅｏ（ティモッテオ）』だよ！　丁度、車に乗る所だったんだよ！
それと、後ろ姿だったけど、車の扉を開けていたのは　綱吉の父親『ボンゴレファミリーの門外顧問（もんがいこもん）、ボンゴレの若獅子、沢田家光（さわだいえみつ）』だよなあれ！
あれか？綱吉の強すぎるブラッド・オブ・ボンゴレ（超直感）を封じた後か？（そのシーンは　アニメ版だけのもの）
まあ、俺的には封印やらはどうでもいいんだけどさ、俺はノーノも

家光も好きではないかなぁ～

ノーノは作中でもあったと思うけど、優しすぎる、それもダメな方の優しさだしな。

だからＸＡＮＸＵＳがあんなんになったんだ。保護した後、息子という立ち位置にしなければよかったんだ、あまいとも言うな、

家光の方は家に帰ってないし（雲雀家も同じか…）　沢田家は、綱吉はおいておくとして、沢田奈々　がそのことを気にしてないみたいだしな。（内心何を思ってるか、考えているかは　知らないけど…）

それよりも、ノーノに目をつけられてないといいな。雲雀の感覚的には何かを感じ取ったみたいで、体が『ピクッ』っと、反応したんだけど、ノーノはすぐに車に乗り込んだから　俺は特に行動はとってないんだけどねー。

１番最初に出会う（見かける）のが、９代目（と家光）だったのは少しアレだったけど、

まあ　初　原作キャラクターとの邂逅でした。

浮雲　8

９代目（プラス家光）と邂逅したのはいいんだよ、だけどな、俺的にはそいつらに会うくらいなら
綱吉とか、沢田奈々に会いたいんだよな。　まあ、原作力が働いてるから、記憶に残る出会い方はムリなんだろうけど（会話した後に殴ったりして記憶をとばせばいいのか？）
それと、９代目→ボンゴレファミリー　と　きて、リングのことを思い出したんだけど、雲と霧属性のリングが欲しいと思うんだよな～

雲のリングは　原作始まって少しした後の『ヴァリアー編』の『リング争奪戦』で獲得できるだろうけど、霧のリングはな～　『未来編』の１０年後雲雀も持っていなかったはずだし、手に入れられるとしても原作が終わった後かな？　六道骸が嫌いな雲雀恭弥が霧のリングを持つことはないだろうし、１０年後雲雀さんが幻騎士戦で術士は嫌いって言っていたしな…　霧のリングが入手できてそのリングを使えるかは諦め半分でいようと思う。

じゃあついでに　山本武の父親（山本剛）がやっている寿司屋でも見てから帰ろうと思う。カット！

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ハイ！　ということで、ノーノ（＋家光）との邂逅から１年経ちましたー、転生成り代わりをしてから約１年と半年経ったということになりますな。
今までに咬み殺した人数は５００人はこえたと思う。いや、一度咬み殺したやつが仕返しに来たこともあるからそれよりは少ないか…
勉強の方は　イタリア語の読み書きはひとまず完了、中国語も訛りとかがなければ大丈夫で　、今はロシア語を勉強中、それが終わっ

たら別の言語、それも終わったらまた別の言語と、続けていくつもりだ。　あと、自室にある本はある程度は読み終わったんだよね。
応急処置の方法とか昔ながらの薬の調合方法とかも知れたんだけど、薬の調合って使うことあるかな？　使うことがあるのか系で言えば帆船の操作方法とか、様々な物の仕組みが書かれている本を読んだりもした。

　そういえば、この1年間で便利な伝（つて）を手に入れたんだ。
それはある日、見回りをしていたの時だった…
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

　俺は商店街を歩いていた。

「ひ、雲雀さん！」　「え！ぁ！」　「「お、おはようございます！」」

　最近は　咬み殺したことのある不良も、咬み殺したことがない不良も　俺に挨拶してくるようになった。（まあ、群れて（3人以上でいたら）いたら咬み殺してるけどな）
　それで、不良系に会うたびに挨拶されてだんだんイラついてきた時だった、裏路地の方から声が聞こえてきたんだ。
「おぃ〜おっさん！　ほらほら財布出してもらおうかぁ〜」《ｌｅｆｔ》ドカッ《／ｌｅｆｔ》　「《ｌｅｆｔ》グッ！《／ｌｅｆｔ》や、やめてくれ‼？」
「アァ〜ン？　ンなこと言ってないでさっさと財布出せや！」ゲシッ！　「う！」
「あ〜　もういい　ボコってから金目の物　いただいてやるよ。　お前ら、ヤレ」　「「はい」」　「てことで　おっさん！　大人しくしてろよぉ」　「ヒッ」
　みたいなことをやっていたから、風紀を実行するためにそいつらに近づいたんだ。

浮雲　9

「　ねぇ、そこで何してるの？」
「あぁ？　なんだ　　ガキ」
　不良達が見たものは、小学校の低学年か中学年くらいの子供で、その手にはトンファーを持っており、服装は白いシャツを着ており、その肩には学ランを羽織っているという凄く珍しい格好をしていた。
（学ランの左腕には金色で風紀と書かれた、赤色の布地に金色の装飾がされてある腕章が付いている。）
「あ！この子供は！」「なんだ？お前知ってるのか？」「研（けん）さん！最近もの凄く強いって噂のガキがいたでしょ、そのガキがこのヒバリってやつですよ！」「はぁ⁉？　こんなガキがか？」
「　ねぇ　　君たち、僕の並盛で騒ぎは許さないよ。君たちは風紀を乱した。よって、チャキ！　　ここで君たちを咬み殺す。」
「はぁ⁉？　何言ってるんだよガキが!!」
　「「研さん⁉」」
　そう言って、研と　呼ばれる男は恭弥に蹴りかかった。　　だか、恭弥は下がるどころか　逆に男に近づき　男の顎（あご）にトンファーを叩きつけた。　　トンファーを顎に叩きつけられた男は脳が揺れ、気を失い　前のめりに倒れこんだ。
　バタッ　　「「研さん!!　」」
　「　さぁ、次は君たちの番だよ。」
　「「ヒッ！」」
　「　僕の前で群れるやつは、咬み殺す。」　　「「うわぁ!!」」
　～～～～～～～
「　風紀を乱すものは　誰であろうと咬み殺す。」
〔ドーン！〕
「あ、ありがとうございます！」「？」
　そこには　先程不良どもに囲まれていたおっさんがいた。
「先程は助けていただき感謝します！　　お礼と言うにはあれです

が、これを」
そう言っておっさんが差し出してきた物は名刺だった。
「なんのつもり?これ」
「私は並盛中央病院の院長をやらさせていただいています。ですので、何かありましたら　ご用命下さい　全てお応えさせていただきます。」
「ふうん…(何これ怖)　いいよ、必要になったら連絡する。」「はい!」
「じゃあね　」
そう言い雲雀は見回りに戻って行った。
残った院長は・・・
(あの子が雲雀家の御子息、ますます　ご当主にソックリになって…)
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
という事があって俺は病院の院長という伝を手に入れたんだ(着実に原作雲雀に近づいていってるな)
連絡先貰ってもな、携帯電話はまだ持っていないし、公衆電話をいちいち探すのも面倒だからまだ電話したことはないんだけどね。
必要とも思ってないし、今　咬み殺してるやつらは見せしめの意味があって　咬み殺した後は放置してるしさ
まあ、必要になったら使うから今は置いておくことにするよ。

家は相も変わらず　お手伝いさんが姿も見せず、気配も無く家事をしている。
それと両親の事だけど今まで一度も会ったことが無いんだ、お手伝いさんに聞いたら　しばらく家に帰ってないそうだ。本当に何をしてるんだろうな?　親という役割りをみたせてない、親ってなんだっけ状態だよ。
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

浮雲　１０

やあやあやあ、伝を入手したと報告してから４年の月日が経ったよ（いきなり飛びすぎだよね）

転生成り代わりをしてから５年と半年が経ったことになるね。（お手伝いさんも両親にもまだ会えていないよ。両親に関してはもう死んでるんじゃないかと考えるけど、俺の超直感に及ぶほどの勘が、死んではいないと告げてくるから、まだ死んでないんだろうけど）

この４年間、最初の２年間は知識を頭に入れることを重点に行い、後の２年間は並盛町の統治に力を入れた。

不良どもを咬み殺し、咬み殺して、咬み殺しまくっただけだけどね。

それとそれと！　会えたよ！会話できたよ！原作キャラクターに！（病院の院長は別）

それは最近の出来事で、俺が見回りをしている最中だった、、

～～～～～～～～～～～～～～～

その時は人気（ひとけ）のないビル群の中を歩いている時だった、尾行をされているのに気づいた俺は　振り向いて尾行をしてくるやつに向かって声をかけた。

「ねぇ、そこにいる君、僕を尾行（つけ）してなにがしたいの？」

その時は理由がわからなかったけど、不思議と尾行されていた事にムカつきを感じなかった。

「　早く出てきなよ。じゃないと、　」

チャキ！　　「　咬み殺すよ　」

ダッ！ダダダダダ‼？　ザザザッ　　バッ！

「すみませんでした!!」

走って近づいてきたそいつは、そう叫びながら、俺の前で膝を着き頭を下げた（土下座ではない）

「　なに？君、誰？」

「はい！　私は！雲雀家の分家にあたる草壁家の長男、草壁哲矢（くさかべてつや）と申します！」

そいつはそう名乗った、、草壁哲矢、それは原作に登場する人物、老

け顔の並盛中学校風紀委員会副委員長。髪型をリーゼントにし、草を口に咥えており、雲雀恭弥の影となり、サポート役に徹する者。
その名を俺の前にいるそいつが名乗った。
　これは雲雀が　初めて原作キャラクターと会話をした瞬間だった
（院長は除く）
　目の前のそいつ…草壁哲矢の髪型はリーゼントではあるが原作より少し短かった、口にはちゃんと、ちゃんと？草を咥えている。　肌も少し色黒、身長は　今膝を付いている状態だからわからないが、多分　俺よりも大きいのだろう。
　俺は草壁哲矢という人物のことを転生時に与えられた前世を思い出す前の記憶にて知っていた。
「あなたのご噂は聞き及んでいます。私は草壁家代々の使命に従い、今より、雲雀家次期当主、雲雀恭弥さまの影となります。どうぞ、御命令を」
「　……（原作草壁が雲雀の影になってる理由ってそういうことだったの⁉？　俺が与えられた記憶には、草壁家は雲雀家の分家って事だけだったんだけど…驚き桃の木山椒の木だね。まぁ、それよりも今は、）　それって君の意志なの？」
「え？」
「その影になるとかは　君がなりたくてなるのって聞いてるんだよ」
「…　ニコッ　はい！私、いぇ　…俺の意志です。　俺がヒバリさんに仕えたいと考えているのです！」
　とても強い意志を感じた、俺の勘も今此処で草壁を部下にした方が良いと囁いてきた。

浮雲　１１

「へぇ・・・僕は群れるのが嫌いだ。」
「…はい、聞き及んでいます。」
「　僕の今の目的は、この並盛町の風紀を正すこと、それを成す為に
僕が並盛の秩序になることだよ。　　　だけど、、とても気にくわな
いけど、、それを行うには　僕だけじゃ難しい事も理解してる。
今　僕に必要なのは人材だ、僕の命令に忠実な、、それを君に集めて
もらおう。　そしてその人材を使い、風紀委員会を立ち上げる。風紀
委員会を設置する場所は並盛町の中心、並盛中学校。　僕はもう少し
したら並盛中学校に入学するつもりだから、まずは並中を支配する。
君には風紀委員会の副委員長を務めてもらうよ。
・・・それと、僕の風紀委員会の副委員長が弱いのは許さないから
」
「…‼？　　は！　私、草壁哲矢、風紀委員会副委員長の名に恥じぬよ
うーー「そういうのはいらない。」ーえ、、」
「君にはそんな風にへりくだってほしくない。　　言っておくけど、副
委員長、たとえ君でも　　僕の意に反するなら　　　咬み殺すよ」
「！　はい！わかりました、委員長！」

～～～～～～～～～～～～

って事があったんだよ、いやぁ～　驚きの連続だったよ。
（まだ子供っていう感じがしたよね。喋り方とか…　）
今、草壁副委員長は次期風紀委員会のメンバーを集めたり　自分自
身を鍛えたりしてるみたいだ。
そういば、草壁副委員長と会った次の日の朝、食卓に使って下さい
と書いてあるメモとともに２つの携帯電話が置いてあったんだよね。
だから、１つは自分で使って、もう1つは草壁副委員長に渡しておい
た。
あれだね、食卓に置いてあったメモと携帯電話を見た時、ゾク！っ

てきたね、まあ、それは内心だけで、表には1ミリたりとも出なかったけど。

そうだ、この間　身長を測ったんだ、今の俺の身長は１５０cmだった。それで、平均身長を調べたら小6が１４５．２cm、中1が１５２．７cmだったのよ。で、原作雲雀の身長が１６９cm、　だからどうしたという事なんだけど、俺的にはそろっと　並盛中学校に入学しようと考えてるんさ　　この間、草壁哲矢に学年を聞いたら小学5年生って言ってたし、草壁と、笹川了平は同じ学年だから　そこから計算すると、原作開始まであと、約2年と半年しかない事になる。

笹川兄が並中に入学した時にはもう　ヒバリが並中の風紀委員長だったと　原作で言っていたから、時期的にも丁度良いと思うし…

じゃ、来年に並盛中学校に入学するって事で決定！

並中の校長という伝はこの5年と半年でもうゲットしたしな。（この小説はその場のノリで書いています。ｂｙ作者）

という事で、まだ早いけど　入学の手続きの準備でもしておこうか（どうせ、お手伝いさんが書類とかを準備してくれるんだろうけど、ほんと、誰なんだろうな　あの人って）

原作雲雀のプロフィール、草壁の語りを添えて

原作突入前にヒバリのプロフィールを書いておきます。（プロフィールに関しては原作と同じで、ネタバレ?にもなります。）

プロフィール，原作時
名前・雲雀恭弥（ひばりきょうや）
性別・男
年齢・不明
誕生日・５月５日（牡牛座）
血液型・不明
身長・１６９㎝、体重・５８ｋｇ
好きな食べ物・和食、ハンバーグ
好きな言葉（口癖）・「咬み殺す」「ワオ」（今まで一度もワオって言ってないな）
武器・トンファー（中に色々と仕込まれている。スペアがいくつもある。）
死ぬ気の炎の属性・雲、霧（雲が強く、霧が弱い）
匣兵器（ボックスへいき）・雲ハリネズミ（ポルコスピーノ・ヌーヴォラ）名前…ロール
並中指定のブレザーではなく、旧服の学ラン（風紀委員会の制服）を着ており、左腕には風紀と書かれた腕章を付けている。（季節が夏だと、学ランの上着を脱いでいる。）

転生成り代わりだが、原作雲雀の感情がわかる。
体や口が勝手に動く時がある。
並盛愛は本物（僕の恋人は並盛さ）
少し面倒くさがりな性格をしているが　戦いが好きで強い者と戦っている時、表情が出ていれば　瞳孔が開いて口角が上がる。（強者と戦ってる夜兎みたく）〔だが、それが表に出ることはないだろう〕
世界の力が働いている影響で、幾ら鍛えても、その力を誰かが見ている状況で発揮することができない。

（原作時間の間は　原作通りの力しか出せない）
死ぬ気の炎の量が原作雲雀より多い。だが、その描写が　この作品で出る事はない。
（比べる対象がこの世界には存在しないため。）
前世の記憶に関係する事は、超直感や読心術（読唇術）でも読み取る事が出来ず、白蘭にも他のパラレルワールドがどうのと言われることもない
（これも、世界の影響か…）
様々な国の言葉を使える。本で知った様々な知識がある。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ここから下は読まなくても良いです。パッとそういうのもあるかなと思いついたものを適当に書いただけです。読みづらく、意味がわからない文になっています。
やめるなら今のうちですよ？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

草壁哲矢　ｓｉｄｅ

雲雀家の当主になる者が並盛町に君臨（くんりん）する事を目的として行動するのは本能みたいなものだと、父から教えられた時は半信半疑だったけど、強ち（あながち）、間違いではなかったみたいだな……
雲雀家の当主になる為の条件は１つしかない、その条件は並盛中学校を卒業する事、並盛中学校を卒業すれば当主の座は譲られる。
並盛中学校以外の中学校に行ってしまったら当主にはなれない、当主になる者が居なくなってしまったら　雲雀家は滅ぶ、雲雀家とはそういう宿命を背負った家系だと教えられた。
だけど、その宿命を知る事ができる者、宿命に関して教えられる者

は、雲雀家の当主になった者と、草壁家の人間の雲雀家の者に仕える者だけ、つまり、次期当主という立場の者には教えられない、教えてはいけないと言われた。
　そして、雲雀家当主は次期当主が一定の年齢になったら並盛町から出て行く、それも本能で、自身の意思で並盛町の外に出る
〔この事を知っているのは草壁家の者だけ〕
　そのため、雲雀家の次期当主のほとんどが親の顔を覚えていない。
　あとは、雲雀家に生まれた者で本能が強い者は打撃系の武器を好んで使い、群れることが嫌いで、生まれながらに他者より強い、、
　そういう　生まれながらにして本能が強い者が雲雀家の当主になる者と聞いた。
　俺が俺自身が　時期当主に仕えたいと思っているんだ。ヒバリの名に恥じないように精一杯頑張ろう。

原作開始　日常編

浮雲　１２

来たよ来たよ！　原作が開始したよ！

今日の夕方に風紀委員から報告を受けたんだ、学校の放課後にパンイチで町を走っていた不審者がいたとね。

その報告を聞いた時に、　あぁ、原作開始か…　って思ったね。

原作開始したから、明日は綱吉と剣道部主将の持田との笹川京子を賞品とした勝負になるはず、見には行かないけどね。

俺が並盛中学校に入学してからの事を簡単に説明すると、まず、入学したその日に風紀委員会を立ち上げた（生徒会しか無かったからね）それから　不良共や群れている者を咬み殺して夏休みが終わる前にほぼ逆らう者がいなくなった。（３年生がグダグダ言ってきたけど）　夏休みにはショバ代を回収し始めたし、携帯電話の着うたを並中校歌にしておいた。　それから　いろいろと手回しをして、咬み殺してボロボロになった者は救急車を呼ぶようにした。

そんでもって　新年度が始まって、草壁哲矢と　笹川了平が入学してた。　草壁をすぐに風紀委員会副委員長にしたら周囲が草壁のことを尊敬し始めたんだよね（それで　リーゼントにする者が増えていった）入ってきた情報によると、入学してすぐにあのヒバリが、風紀副委員長にした者はなんだ、誰だ、スゲー　という感じだった。（入ってきた情報→スキル：聞き耳によって入手した情報。）

あとは、バイクを買って　私有地でだけだけど乗りまわした。流石にねぇ、。原作雲雀が乗っていたから買ったんだけど、遠出することもないし（買ったバイクは　スズキ・カタナ　オートバイ）

そのくらいかな？（並盛山で『ひとりぼっちの運命（さだめ）』や『孤高のプライド』を歌ったりもしたけど…）

そしてまた新年度が始まった。　今度は　沢田綱吉、山本武、笹川京子、黒川花が入学してきた　ということだね。

いや～　原作の記憶を忘れないっていいよね。

じゃ、明日から俺が登場するまでをパパッといきますか（これから並盛が荒らされると思うとムカついてくる。）
俺はさっさとディーノにいたずらをしたい、良い反応をしてくれそうだしね。スペルビ・スクアーロもよさそうだけど、アイツにちょっかいを出すのはＸＡＮＸＵＳとか山本武だから…
〔ちょっかいって…〕

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

夏休みもあけて季節は秋　今日は全委員会参加の会議がある。
ここは並中　会議室
「プリントにあるように、これが２学期の委員会の部屋割りです。」

「えーっ何これ⁉？　応接室使う委員会がある　ずるい！どこよ！」
ある女子生徒がそう叫んだ
その女子生徒に隣に座っていた男子生徒がこっそりと注意した

ヒソッ「風紀委員だぞ！」「ハッ」
「何か問題でもある？」
窓辺に座っている男子生徒が声をかけてた。
「いえ！ありません！　す、すいませんヒバリさん!!」
「じゃ、続けてよ」

浮雲　13

というのが雲雀恭弥の初登場シーンだね。
あぁ　カットしたけど、緑化委員会が仲良し委員会してたから風紀委員にボコられてた。
（まあ、命じたのは俺なんだけどね）
そのあと　あくびをしてたら、俺の勘が誰かに見られていると告げてきてさ、十中八九　リボーンだろうけど。
昼休み中に綱吉たちがファミリーのアジトを作るために（本当は平和ボケしないためのトレーニングと、俺ことヒバリとの顔合わせのために）応接室に来るから、俺も応接室に向かおうと思うんだけど…
イヤだな～　W・Cって書かれたスリッパで叩かれるのは、レオンの変身だから汚くはないだろうけど、、

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ボンゴレｓｉｄｅ

ガチャ「へ～　こんないい部屋があるとはねー！」
「君　誰？」
誰も居ないと思っていた応接室には1人の男が居た。
（「こいつは…風紀委員長でありながら　不良の頂点に君臨する　ヒバリこと雲雀恭弥…‼?!」）
「なんだあいつ？」「獄寺　待て…」
「　風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？　　ま、どちらにせよただでは帰さないけど　」
!!　　んだとてめー！」　獄寺がヒバリに近づく
「　消せ　」　ビュッ
一瞬だった、　何かが振るわれ　獄寺が咥えていたタバコが真っ二つにされた
バッ！　「なんだこいつ‼?」

獄寺は危険を感じて後ろにさがった。
（「聞いたことがある…　ヒバリは気に入らねー奴がいると、相手が誰だろうと　　仕込みトンファーでめった打ちにするって…」）
「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ　　視界に入ると　、　咬み殺したくなる」
その獣のような瞳に獄寺と山本は軽い恐怖をおぼえる。
ゾクッ（「こいつ…」）　　（「やっかいなのにつかまったぞ…」）
そして、その場に何も知らない綱吉が入ってきた。
「へー　はじめて入るよ応接室なんて　」
山本が叫ぶ　「まて　ツナ!!」　　「え？」
ガッ!!「1匹　」
そう言いながら　ヒバリは　綱吉の左頬にトンファーを叩きつける。
ドザァッ　　トンファーを叩きつけられた綱吉は部屋の窓ぎわまで飛んでいく
「のやろぉ‼?」　バッ　「ぶっ殺す!!」
獄寺は攻撃をしかけようとする
が、ダイナマイトに火を着ける前にヒバリに攻撃される
ガッ!!　　「2匹　」
「てめぇ…‼?!」　友達がやられて山本は怒る
チャキ…ン　　ヒバリは2本目のトンファーを装備し　山本に攻撃する
ビュ　　ビュビュ　　ビュ　　バッ　　山本はそれを避けるが
「ケガでもしたのかい？　　右手をかばってるな　」
「！」
「当たり」ドッ!!　　ドザッ！　　「3匹　」
山本は蹴りをくらい、壁に頭を打ちつけ気を失った。
「あー　いっつっ……」綱吉が目を覚ました
「！　　ごっ…獄寺君‼?　　山本‼?　　なっなんで‼??」

「起きないよ　　２人にはそういう攻撃をしたからね」　「え⊠っ‼?」
（「それって…つまり…　　この人１人で２人を倒しちゃったってことー!!?」）
「ゆっくりしていきなよ　　救急車は呼んであげるから」
「ちょっ　　それって！　」
（「え⊠ーーーっ　　メチャクチャピンチー！⁉?　」）
（「そんなーっ　　なんでこんなことになってんのー　　ただみんなで応接室にきただけなのにー‼?!　」）
「！」「んなー‼??」　そこに窓の外からリボーンが銃を構えながらやってきた。
「死ね」　ズガン！　リボーンが綱吉に死ぬ気弾を撃ち込んだ。
　モコッ　　バカッ　！「うおぉぉぉっ!!　　死ぬ気でおまえを倒す!!!!　」
　死ぬ気タイムになり　額に橙色(だいだいいろ)の炎が灯(とも)り　白目、パンツ１枚の姿になった綱吉がヒバリに殴りかかる。
　ビュッ！　　だが　その攻撃は避けられ、カウンターで顎(あご)に攻撃をくらう
「　何それ？　　ギャグ？」
　ガッ!!　　ドッ　綱吉は倒れてしまう
「　アゴ割れちゃったかな。　　さーて　　あの２人も救急車にのせてもらえるぐらい　グチャグチャにしなくちゃね。」
ぐぐ…　　「　ん？」　　「　まだまだぁ!!!」
ゴッ!!　　綱吉は起き上がりヒバリに殴りかかった
ピョーン　パシッ　　レオンが綱吉の手元に飛んでいき　むにょ～スリッパに変身する
「タワケが!!!」　パカァン!!!　　スリッパで思いっきりヒバリの頭を叩く
フラ　　フラ…「……」
「　ねえ・・・・・・殺していい？」　　ヒバリから不穏な気配を感じたとき、

「そこまでだ」リボーンが声をかけた
「やっぱつえーな　おまえ」
「　君が何者かは知らないけど、　　僕、今　イラついてるんだ。」
「　横になってまってててくれる。」
ヒバリがリボーンに攻撃する。
　だが…　　キィンッ！
その攻撃は　リボーンの持つ十手（じって）に防がれる
「　ワオ　　すばらしいね君　」
リボーンはサングラスをかけ　爆弾を取り出し
「おひらきだぞ」ヂヂヂヂ「‼？　」
ドガァン!!!!　爆弾は爆発し、応接室からは黒煙が上がる。
綱吉たちはその隙に応接室から脱出した。

浮雲　１４

ヒバリｓｉｄｅ

応接室にあるソファーの背凭れに腰をおろしていると足音が聞こえ、扉が開けられた。

ガチャ　「へ～　　こんないい部屋があるとはねーー！」

（「来たか…　」）「　君　誰？」

「なんだあいつ？」「獄寺　待て…」

（「　警戒してるな。この状況　少し楽しい　」）

「　風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？　　ま、どちらにせよだだでは帰さないけど　」

「!!　　んだとてめー！」　獄寺がヒバリに近づく

「消せ」　ビュッ

トンファーを振るい、獄寺が咥えていたタバコを真っ二つにする

バッ！　「なんだこいつ‼？」

獄寺は危険を感じたのか後ろにさがった。

（「反応するのも　さがるのも遅いな…」）

「　僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ　　視界に入ると　、　咬み殺したくなる。」

２人に向けて軽く殺気を放つ

（「これだけでビビるんだからな…　」）

その場に何も知らない沢田綱吉が入ってきた。

「へー　はじめて入るよ応接室なんて　」

山本武が叫ぶ　「まて　ツナ!!」　　「え？」

（「飛んで火に入る夏の虫　」）

ガッ!!「１匹　」　そう言いながら　綱吉の左頬にトンファーを叩きつける。

ドザァッ　トンファーを叩きつけられた沢田綱吉は部屋の窓ぎわまで飛んでいった。

「のやろぉ‼？」　バッ　「ぶっ殺す!!」

獄寺隼人は攻撃をしかけようとしてきた。

ダイナマイトに火を着けられる前に攻撃する
ガッ!!　「2匹(ひき)」
「てめぇ…!!?!」山本武が怒る
チャキ…ン　2本目のトンファーを装備し、山本武に攻撃する。
ビュ　ビュビュ　ビュ　バッ　山本はそれらを避けるが
「ケガでもしたのかい？　右手をかばってるな」
「！」
「当たり　（右足の蹴り!!?　）」ドッ!!　ドザッ！　「3匹(びき)」山本武は蹴りをくらい吹き飛び、壁に頭を打ちつけ気を失った。
「あー　いつつつ……」沢田綱吉が目を覚ました
「！　ごっ…獄寺君!!?　山本!!?　なっなんで!!??」
「起きないよ　2人にはそういう攻撃をしたからね」「え☒☒つ!!?」
「ゆっくりしていきなよ　救急車は呼んであげるから」
「ちょっ　それって！」
するとそこに、窓の外からリボーンが銃を構えながら現れた。
「！」「んなー！!?」（「流石最強の赤ん坊　気配に気がつけなかった。）」
「死ね」ズガン！　リボーンが沢田綱吉に死ぬ気弾を撃ち込んだ
モコッ　バカッ！「うおぉぉぉっ!!　死ぬ気でおまえを倒す!!!!」
死ぬ気タイムになり　額に橙色(だいだいいろ)の炎が灯(とも)り　白目、パンツ1枚の姿になった沢田綱吉が殴りかかってきた。
ビュッ！　その攻撃を避け　カウンターで顎(あご)に攻撃をする。
「何それ？　ギャグ？」
ガッ!!　ドッ　沢田綱吉は倒れる。
「アゴ割れちゃったかな。　さーて　あの2人も救急車にのせてもらえるぐらい　グチャグチャにしなくちゃね。」

ぐぐ…　　「ん？」　　「まだまだぁ!!!」　ゴッ!!　　沢田綱吉は起き上がり殴りかかってきた。
ピョーン　パシッ　　レオンが沢田綱吉の手元に飛んでいき　むによ～スリッパに変身する。
「タワケが!!!」パカァン!!!　　スリッパで思いっきり頭を叩かれた。
フラ　　フラ…「……（……）」
「ねえ・・・・・・（本気（マジ）で）殺していい？」
本気で殺そうかと思ったとき、
「そこまでだ」リボーンが声をかけてきた。
「やっぱつえーな　おまえ」
（「リボーン…　）君が何者かは知らないけど、　　僕、今　イラついてるんだ。」
「横になってまってててくれる。」リボーンにトンファーで攻撃する。
だが…　　キィンッ！
その攻撃は　リボーンの持つ十手（じって）によって防がれた。
「ワオ　　すばらしいね君　」
リボーンはサングラスをかけ　爆弾を取り出し
「おひらきだぞ」ヂヂヂヂ「!!?　（忘れてた!!?　）」
ドガァン!!!!　　爆弾は爆発し、応接室からは黒煙が上がる。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

フィ～～　　あっぶねぇ～　イラついて少しの間　我を忘れてた。
ここは風紀委員会室、応接室とは別にある風紀委員会が使用する部屋〔生徒会室的なもの〕
応接室はしばらく使いものになりそうもないな・・・・そうだ、最後はこう言うんだったか…
窓辺に近づき左肘を机につき、顎を左手のひらに置き、流し目で外を見ながら、
「　あの赤ん坊　また会いたいな　」

浮雲　１５

ボンゴレ１０代組との初邂逅が無事（）に終わり、次の接触は体育祭の棒倒しで、というところで　原作開始してからの俺が知ることができた出来事を簡単に言うと、、

綱吉パンイチ告白→綱吉ｖｓ持田→球技大会→根津銅八郎解任→山本武自殺騒ぎ→夏休み開始→学校再開

という感じかな。

原作開始から「大きな音が～」と言う報告が、風紀委員会に多く寄せられはじめた。

（学校を傷つけられてると思うと気分が悪い・・・　グラウンドが崩壊した時とかさぁ…　）

あぁ、草壁副委員長も、とてもとても頑張ってくれている。彼もこれからどんどん巻き込まれていくんだなぁ～

じゃ、体育祭までカット！

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ここ並盛中学体育祭では、縦割りでつくられたＡ・Ｂ・Ｃ組の熱き戦いが繰り広げられていた。

１年生＝Ａ組　Ｂ組　Ｃ組
２年生＝Ａ組　Ｂ組　Ｃ組
３年生＝Ａ組　Ｂ組　Ｃ組
合同＝Ａ組ｖｓＢ組ｖｓＣ組

俺こと雲雀恭弥は体育祭に参加せず、並盛町の見回りをしていた。騒がしいのは嫌いだ。

時は体育祭のお昼休み
みーどーり　たなーびくー　なーみーもーりのー
携帯電話がなった。相手は風紀委員のメンバーだ。

ピッ「なに？」
『すみません、体育祭の棒倒しに問題がおきてしまいまして、、Ｂ組Ｃ組の総大将が　Ａ組総大将の策略によって棒倒しに参加できる状態ではなくなってしまいまして、今　各チームの３年生代表を集めて審議をおこなっているのですが、、』
「そう、Ａ組の総大将って誰？」
『１年の沢田ツナと言うそうです。』
「　ツナ？・・・僕も今　学校に戻るよ。」
『はい　わかりました、お願いします。』　　ピッ
（災難だね沢田綱吉、さすが主人公　　　　ここから並中まではそれほど離れていないから　さっさと向かおう）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

スピーカーから声が流れる。
《おまたせしました。　棒倒しの審議の結果が出ました。　各代表の話し合いにより、今年の棒倒しは　Ａ組対Ｂ・Ｃ合同チームとします！　》
《男子は全員　棒倒しの準備をしてください　》
「Ｂ・Ｃ連合の総大将　誰にする？」「サッカー部の坂田だろ？」「レスリング部の川崎も強いぞ」「！」
「　僕がやるよ。」　　　ザワッ「「ヒバリさん!!」」
（騒がしいな・・・　群れるのは嫌いだけど　これは仕方がないか、学校の行事だし　）
　周りに居る奴らを足場にして棒に登っていく
ドカ　ドガッ！　「ぎゃ！」「ぐふっ」
「あっ　制服のままでっ　」「うわあぁっ！」
ガン！ガン！ガン!!？　　気に留めずに登っていく
　　バサァッ　　　頂上にたどり着き学ランが風にたなびく
「　向こうの総大将とあいまみえれば赤ん坊に会えるかも知れないからね　」

「（そうだ）倒さないでね　」　　ビクッ!!　「「はいいい!!!　」」

《それでは棒倒しを開始します。位置についてください！》

ワーワーワーワー

《　用意!!?　　開始!!!　》　棒倒しが始まった。

オオオオオオ！　　絞め技　掴み技　殴るのも髪を引っ張るのもアリな取っ組み合い。

人数の差でA組が不利なのは　火を見るよりも明らかで、A組の総大将　沢田綱吉が蹴られ殴られ、棒が倒れそうになったその時に、

ズガン！　　最近耳に入る事が多くなってきた音が聞こえた。

「空中復活（くうちゅうリ・ボーン）!!」

沢田綱吉は　死ぬ気タイムになり、額に炎が灯りパンイチに。

死ぬ気タイムになった沢田綱吉は　人の上をピョンピョンと　飛び移りながら　B・C連合の棒に向かって行く。

途中、笹川了平・獄寺隼人・山本武が騎馬（きば）になり、その騎馬に沢田綱吉が乗りこむ。

「ゆけー！　目指すは総大将!!」うおおおおおおぉ!!　　ドガ！ドガ！ドガ！

近づく者を吹き飛ばしながらどんどん　どんどん進んで行く

「ありゃあ　重戦車（じゅうせんしゃ）だ!!?」「あんなの止められない!!」連合組は弱音を吐く

「　そうこなくっちゃ（一般人との力の差が激しいなぁ。俺もこれぐらい簡単に出来るがな、吹き飛ばすくらい簡単にできるがな。　）」

まだまだ離れている実力差に少しがっかり気味な俺。

騎馬に動きがあった（「あ、仲違（なかたが）いしてる」）

獄寺隼人と、笹川了平がぶつかり合い、騎馬が崩れてしまった。

しーーん　（「　……　」）　予想外の結果にあたりが静まりかえる。

勝負は決した。Ａ組の自滅
敗軍の大将が敵陣のど真ん中に居て、ただで帰れはしなかった。
棒倒しの最後は乱闘で終わった　…
俺は白けて　そのまま帰った。

浮雲　１６

体育祭から数週間後の日曜日　雲雀の携帯電話に、非通知で、一通の電話がかかってきた。
みーどりたなーびくーなみもーりのー
ピッ『もしもし　オレだぞ　』「　赤ん坊かい？　僕になにかようかな？」
かかってきた電話はリボーンからだった。
『取り引きしねーか？』「　取り引き？　内容は？」
『今、ツナの家に死体があるんだが、それを見つからないように処理して、情報操作して殺し自体を無かったようにしてほしいんだぞ　』
「・・（原作か…　）　ふうん　　対価は？」『そっちで決めていいぞ』
「じゃ、いまは貸し1つって事でいいよ」『わかったぞ』
「　それじゃあ　今から向かうよ。」
『ああ、待ってるぞ』
ピッ　　電話をきった。
どうやって電話番号を知ったかは気にするべからずってか…

確か、ボンゴレの特殊工作員・殺され屋のモレッティだったか？
使う技はアッディーオ（さようなら）　自分の意志で心臓を止めて仮死状態になる。
つまりは死んだフリ　　マフィアの世界では顔を変えて影武者要員として重宝するだろうな。
まあそれはいい、　沢田家はここから少し離れてるからバイクに乗って行こうか。
雲雀は、バイク、スズキ・カタナに乗って沢田家に向かって行った。
ヴオオオオン!!

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ヴオオオン!!　　キキッ！
沢田家の前にバイクを止める。

バイクから降りて塀に足をかけ家の一階の屋根に飛び乗り綱吉の部屋の窓を開け、声をかける。
ガラッ「　やあ　」　「ヒバリー!!!」
(「お、三浦ハルだ、初めて会うな。　綱吉に??な天然少女だったか。」)
「　今日は君達と遊ぶためにきたわけじゃないんだ。　赤ん坊に貸しを作りにきたんだ。ま、取り引きだね。」
「待ってたぞヒバリ」
ゴロ…　死体を足蹴にする。
「ふーん　やるじゃないか、　心臓を一発だ。(本当に凄いな、これが死んだフリだなんて…　死んだフリだと知っていても本物に見える…)」
「　うん、　この死体は僕が処理してもいいよ。　」
「なっ!!はあ~!!?　何言ってんの~!!?」
「死体を見つからないように消して　殺し自体をを無かったことにしてくれるんだぞ。」
「いろんな意味でマズいよそれは!!」
「　じゃあ　あとで風紀委員の人間よこすよ。」
「風紀委員会でもみ消してんの~~!!?」
「(しばらく来ることはないか、)またね」
シュッ　窓から飛び降りて帰える。
「いや!　!ちょっ!　あの!!?　」
綱吉が窓から顔を出す。
「10代目!!?　どいてください!!?　あいつだけは　やり返さねーと気が済まねぇ!!」
ビシュッ!「果てろ!!」
獄寺がダイナマイトを投げてきた。
「そう死に急ぐなよ」
チャキンッ仕込みトンファーを取り出し、　ヒュッ!　ダイナマイトを全て弾き返す。
「ゲ」「うそーっ!!」
!!!
!!!ドガァン!!!!

室内でダイナマイトが爆発した。
（「よく死なねーよなこれで、　リボーンから電話かかってくるだろうが、もうやることねーから　かーえろ」）

浮雲　１７

ちわっス！　ベットの上からこんにちは
いやさ、原作力って時よりすごい力を発揮するというか…
今　俺がいる場所は並盛中央病院、風邪をこじらせて入院中なのさ。。。
今まで風邪をひいたことはなかったし、風邪をひく要因は何もなかったと思うんだけど、いつのまにか入院してた、入院するまでの記憶がまったくないというね…　何があったと言いたい。
え？これも原作力のせい？怖
ま、俺が風邪をこじらして入院した。という事は、綱吉が足を骨折して入院することになるということで、退屈しのぎにゲームをしながら待ってたら病院中が騒がしくなってきて、看護師を呼び止め、理由はほぼわかっていたけど聞いてみた。
そしたら「新しく入ってきた患者が騒ぎ過ぎるから退院してもらおうとしてた」と言ってた。
俺が居る病室に連れてきてと言っておいたから　もうすぐ来ると思う。

ああ、ほら　来たみたいだ。
～～～～～～～～～
綱吉ｓｉｄｅ

ある患者のご好意？でその人と相部屋になる事で退院をまぬがれた綱吉
看護師主任に案内され、その人の病室に行く
「ここです。では私は……これで…」「？」
病室に着いた途端　そそくさと戻って行った看護師主任に疑問を持ちながら　部屋の中を見る。
「　やあ　」「ヒバリさん!!」
その病室に居たのは予想もしていなかった人物、雲雀恭弥だった。

「うそー！⁉？　　え⁉？　　なんで病院に⁉？！」
「　カゼをこじらせてね。　退屈しのぎにゲームをしていたんだがみんな弱くて…　」
　ベットに座っているヒバリの足下には　人が３人重なり合って倒れている。
「んなー！⁉？（　何があったのー！！！）」
「相部屋になった人にはゲームに参加してもらってるんだよ。ルールは簡単だ、　僕が寝ている間に物音をたてたら」
　「　咬み殺す　」ヒバリさんはトンファーを構える。
　！ガーン！「一方的ーっ！　⁉？　　ってか病院じゃありえない状況だーー！！！（この部屋ムリ！！　　ここにいるんだったら家の方がマシー⁉？　）」
「あ　、あの僕　もうすっかりよくなったんで、たっ…退院します⁉？　」
　そう言い、後ずさったが、
「だめだよ　医師の許可がなくちゃ」「　！⁉？　」
　突然、後ろから声をかけられ驚いてしまった。
「やあ　院長」「え☒　いんちょー⁉？？」
「こうして安心して病院を運営できるのもヒバリ君のおかげ、生け贄でもなんでも　なんなりとお申しつけください」
　院長？は、ヒバリさんに向かって頭を下げた。
　！ガーン！（「病院ぐるみー！！！」）
　ふぁ～…「　じゃあ　そろそろ寝るよ。ちなみに僕は　葉が落ちる音でも目を覚ますから。」
「なっ！」
「では失礼します」ガラガラ　　ピシャッ
　院長が部屋から出て行ってしまった。
「えっ　　うそ⁉？　　ゲームスタート⁉？　　（マジスか～⁉？！）」
　だが、ゲームが始まってすぐ、
ガラ…　「？」

扉が開く音がし、見てみると　そこにいたのは、
ニッコリ（「イーピン⁉？　と　うるさい奴　来たーー⁉？！　」）
イーピン＆ａｍｐ；ランボだった。
「ガハ…んむむ」うるさくするだろうと思いランボの口をふさぐ
（「しーーー!!　声　出すなー⁉？!」）
（「！　ＯＫＯＫ」）「？」
「どかん？　」ランボがグレネードのピンを抜く（「ちがーう!!」）
ランボを連れ　急いで病室の外へ　、病室から離れた窓からグレネードを投げ捨てる。
!!ドガァン!!
「おまえはオレを殺す気かーー!!!　今部屋でさわぐと恐ろしいことになるんだぞー!!」「？」
「あそこにはおっかねー人がいて！…？」
病室の入り口に目をやると　イーピン部屋の中を見ていた。
「イーピンの奴　なに立ちつくしてんだ？」
そう思っていたら、イーピンがこちらを振り向いた。
「!!　筒子時限超爆（ピンズじげんちょうばく）のカウントダウンだー!!!」
「うそ　なんでー⁉？　イーピンが照れるような事は何も・・・
はっ　まさか…　ヒバリさんに惚れてるー!!」
イーピンの目はハートになっていた。
（「あーー　もーーー　」）
今度はイーピンを窓から投げる。
「バカー!!」　!!!ドオオオォ!!!!
パラ　パラ…　パチ
結局　ヒバリ魔王さんが目を覚ましボコられるはめになった綱吉だった。

浮雲１８

オパリオ！

今日は　２月１４日　バレンタインデー　　学校生活の中で風紀が乱れる要因のひとつ

この日も学校にチョコレートやお菓子を持ってきてはいけないという規則を作っても良かったんだけど…と言うか、俺が風紀委員会を創った年にその規則も作って、その規則を遵守させようと思ったんだけどさぁ

女子生徒が徒党を組んで風紀委員会に抗議しに来たんだよな、、

あの時の女子生徒達の目の中には　一種の狂気を見たよ…ハハッ…

その抗議期間中　風紀が乱れまくって大変だった。

（何故、どういう風に風紀が乱れたかは想像にお任せするよ。ＧＫＢＲ（ガクブル））

そんな事があってからは、チョコレートの持ち込みの禁止という規則を廃止する事になった。

一応、俺も毎年　バレンタインデーには　女子生徒達からチョコレートを渡されるが、直接手渡しするのは禁止、というルールが女子生徒の間で作られているそうだ。チョコレートはファンクラブが一旦集めて箱に入れ、応接室の前に置く事になってる。

（他にも幾つかルールがあるそうだが　俺には関係ない。そして、ファンクラブは草壁副委員長などのもあるみたいだ…全部でいくつのファンクラブがあるんだろ…）

だけどまぁ、俺は学校で渡されるチョコレートを一度も開封したり　口にした事が無い、触れたことも無いな。

そんな　大して親しくも、話したことも　多分　ない奴の　安全も確認されていない、何が入ってるかわからないものなんか口にするわけないだろ。

食べないチョコレートは処分しても良いんだけど、食べられる食べ物をそのまま捨てたりしたら、もったいないばばあ　や　もったいな

いおばけが出現する可能性があるから出来なくて、、
だから　チョコレートは、草壁副委員長以外の風紀委員が持ち帰ったりしてた。
（草壁副委員長は自らの意思でチョコレートを食べていない。べつに俺はそんな事を強制するつもりはないしな）
前に　俺に渡されたチョコレートを食べた風紀委員の奴がヤバい感じに泡吹いてぶっ倒れ　救急車で運ばれていった事があって、それからは　食べれる食べれないを確認してからにしてるようだ。
（そんな事するなら食べなければいいじゃんか、そこまでしてチョコレートが食べたいのか…食べたいんだな…。俺も、前だったら欲しいとは思ったはず…　）
俺は毎年　草壁副委員長やお手伝いさんにチョコ系のお菓子を貰ったりしている。
というか、べつに　バレンタインデーではない日にもその２人からはお菓子類を貰ってるから　これといって特別な日という認識はないんだよね。

そうだ、話は変わるけど　　生活パターンが変わっているからその報告おば
前のパターンは、、起床→朝食食べる→トンファー持って並盛町の見回り（群が居たら咬み殺す）→家に帰って昼食→読書や勉強をする→おやつを食べる→トンファー持って並盛町の見回り（群が居たら咬み殺す）→家に帰って晩ご飯→お風呂入る→読書や勉強をする→就寝

だったけど、今は、、起床→朝食食べる→早めに家を出て見回りをしながら学校に登校→風紀委員会の仕事、並盛町の見回り→　昼休み昼食、読書や勉強をする→風紀委員会の仕事、並盛町の見回り→家に帰って晩ご飯→お風呂入る→読書や勉強をする→就寝
あまり前と変わってないね。　　風紀委員会の仕事は俺に回ってくることが少ないから楽で良い
（草壁副委員長が色々やってくれているみたいだ。ま、暇な俺は気づ

かれないように書類などを横から掻っさらってこなしている。
応接室には妖精が出るという噂が風紀委員の中で広まっているそうな……（笑）　　）

浮雲　１９

今ー日ーは　晴れの日　日曜日！
　俺は雪の積もっている中、何故か　たまってる風紀委員の仕事を片付けに学校に向かっている。
（ちょくちょく　かたずけてるはずなんだけどな～　）
　あ、今　学校の校庭に『星の王子が見てきた動物　２万２１２６匹のうち　凶暴性　でかさ　ともに１位』のスッポンが見えたから少し接触してくるよ。
～～～～～～～～～～～～～～～～～～

　特殊雪合戦終盤の沢田綱吉ｓｉｄｅ
　ブイイイ　ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε！（　，ω，　）！
「あ!!　いた！　レオンＴＵＲＢＯ(ターボ)!!?　」
　勝つために　レオンを追いかける。
「こんなんで勝っちゃっていいのかな～　後で恨まれないかな…?」と考えながら走っていたら
ズルっ！「うわっ！」
　雪で足を滑らせ転んでしまう　「いでで～～っ!!」
と、そこで、　ぱしっ　レオンが誰かにつかまる。
「　何これ?　あと　そのでかいカメ　」
「ヒバリさん!!」
　レオンをつかまえたのはヒバリさんだった。
「いや、あの、、（なんでヒバリさんが日曜日に～！）」
「　せっかくの雪だ、雪合戦でもしようかとね。」
（「ヒバリさんも～～！!?　」）
「　といっても、群れる標的に一方的にぶつけるんだけど。」
（「なんでこの人捕まんないのー！!?　」）
「　ここで会ったのも何かの縁だ。今日は君を標的にしようかな。」
　そう言ってヒバリさんは、まん丸になったレオンを構える　。レオンもヒバリさんの理不尽さがわかったのか　喉がなり　冷や汗もか

いている。
「え！　そ…そんなっ　ってか　レオン投げてくんの～!!??」
ビッ！　ヒバリさんが　レオンを投げようとする。
「ひいっ！」バッ　防御体制をとるが一向(いっこう)に衝撃がこない。
「……？」
「と、思ったけど風紀委員の仕事がたまってる。　またね。」
ヒバリさんはレオンを放り捨ててどこかに行った。
「た…助かったー…　ん？無意識に何かをタテに…」
タテにしたもの　それは残り三筒(サンピン)状態のイーピンだった。「うそー！」
「イーピン　ヒバリさんに惚れてるんだったー!!　ああ！爆発する!!
あと二筒(リャンピン)しかーーー！」
カチンッ「あ」一筒(イーピン)に変わり
ドオオオオォ…　爆発

沢田ツナ　行方不明により　リタイア

雪合戦　リボーン　優勝

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

雲雀恭弥ｓｉｄｅ

ブイイイ　ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε！（，ω，　）！
「あ!!　いた！　レオンＴＵＲＢＯ(ターボ)!!？」
レオンを追いかけ沢田綱吉が近づいてきた。
「こんなんで勝っちゃっていいのかな～　後で恨まれないかな…？」
（「気配は消してないんだがな・・・　視界に入っているはずだろうに何故気づかない…」）
ズルっ！「うわっ！」

沢田綱吉は雪に足をとられ転ぶ　「いでで～～っ!!」
ぱしっ　足元に来たレオンを捕まえる。
「何これ？　あと　そのでかいカメ（スッポンだけど）」
「ヒバリさん!!　いや　あの」
沢田綱吉は青ざめている。
「せっかくの雪だ。雪合戦でもしようかとね。（自分で言っててあれだけど　どんな言い訳だよ）」
「といっても、群れる標的に一方的にぶつけるんだけど（嘘つきました。　そんな事　一度もしたことないよ。）」
「ここで会ったのも何かの縁だ。今日は君を標的にしようかな。
（俺　これ知ってる　理不尽って言うんだよね。）」
そう言った後に　いつのまにか丸型になっていたレオンを沢田綱吉に投げようと構える。
「え！　そ…そんなっ　ってか　レオン投げてくんの～!!??」
ビッ！　レオンを投げようと　腕を動かす。
「ひいっ！」バッ　沢田綱吉は防御体制をとる。
だが投げようとした腕が動かなくなる。
（「！…　原作力が働いたか、投げれないな…。あと、イーピン何処から出てきたし…　」）
「……？」
沢田綱吉は衝撃がこないことに気づいた。
（「ハァ　原作力めんどい」）
「と、思ったけど　風紀委員の仕事がたまってる。　またね。」
レオンを放り捨てて応接室に向かう。

・・・何か忘れてる気がsドオオオオォ…　爆発

～～～～～～

ハッ！　　気がついた時には応接室で、仕事もほとんど終わっていて時間もだいぶ経っていた。

何があった・・・確か辺りが光ったと思ったら…　　あ！イーピンの爆発か！

あれ？校舎ごと爆破に巻き込まれたはずだけどどどどどどどどどどｄｏｄｏｄｏｄｏｄｏｄｏｄｏｄｏｄｏｄｏｄ……

ヒバリの意識はそこで途切れた。　目の前が真っ暗になった、ということだね。

浮雲　２０

♪　桜　　咲く　舞い落ちる　　何も無い　ぼくの手の上

　　儚くて　優しくて　壊れそう　きみみたいな花　　♪

今日は、花見をしなければ!!　という使命感に追われ　　お花見に来た　俺こと雲雀恭弥デス。

今は風紀委員に桜並木一帯の花見場所を全て占領させ、静かな中で花見中。

今回以降　、桜をゆっくり見ることができなくなるかもしれないからさ、

本当に残念だ…　　桜は好きな方だから。　　散っている時が1番ね・・・フフフ

～～～

ている。
（「いつも通りにやるだけだ。」）
「　弱虫は、、土にかえれよ。」
ガッ！　「がはっ」　トンファーで殴りつける。
「！　仲間を　」
トンファーに血が付着してしまった。
「　見てのとおり、僕は人の上に立つのが苦手なようでね。　屍（しかばね）の上に立ってる方が落ちつくよ。（本当に…落ち着くよ。）」
そう　無表情で言うヒバリに　３人は軽い恐怖をおぼえたようだ。
するとそこに　ＣＶ勝矢（かつや）の声が聞こえてきた。
「いやー絶景！絶景！　花見ってのはいいねー♪　っか～～やだねー男ばっかっ！」
桜の木の陰からデロンデロンに酔っぱらったシャマルが現れた。
（「雲雀が桜を嫌いになる原因！　」）
「Ｄｒ．シャマル！」「まだいやがったのか!!？　このやぶ医者　ヘンタイ！　スケコマシ！　」
「オレが呼んだんだ。」「リボーンも！」
桜の木の枝の上に、花咲爺さんの変装をしたリボーンも現れた。
「　赤ん坊　会えて嬉しいよ。　（そういえば、アッディーオ使いが来た時に作ろうとした貸し、あれ　無しになったんだよね。わかってはいたけどさ、、　）」
「オレ達も花見がしてーんだ。　どーだヒバリ、花見の場所をかけてツナが勝負すると言ってるぞ」
「なっ　なんでオレの名前出してんだよー!!？　」
「　ゲーム…　いいよ、どーせ　皆（みんな）つぶすつもりだったしね。じゃあ、君達三人とそれぞれサシで勝負しよう。　お互いヒザをついたら負けだ。」
「ええ！それってケンカ!!？」
沢田綱吉達が色々話しているのを聞き流していると、シャマルがこちらに近づき話しかけてきた。
「へー　おめーが暴れん坊主か、、おまえ姉ちゃんいる？」

「（酒臭い）消えろ　」バキッ　　「ふぎゃーっ!!?」
トンファーでシャマルを殴りつける。
そして、　　プ～ン（「！」）
俺は小さな羽音に気づいた。
（「トライデントモスキート…桜クラ病…。か、かかりたくねぇ…　」）
「てめーだけはぶっとばす!!」
獄寺隼人がダイナマイトを持ちながらこちらへ向かってきた。
「いつもまっすぐだね。わかりやすい（あれ？今　歌（ひとりぼっちの）が頭をよぎったな）」
ビッ！　　トンファーを上から叩きつけるように攻撃するが、避けられる。
「！」　獄寺隼人はトンファーを避けながら、俺の周囲にダイナマイトをバラまく。
「果てな」!!ズガアン!!
ダイナマイトが爆発する。
俺はその爆風をトンファーで防ぐ。
（これで完全に防げるのが不思議なんだよな…　）
「で…？　続きはないの？」
声をかけトンファーを使い煙をちらす。
「なっ　トンファーで爆風を!?？　」
「二度と花見をできなくしてあげよう（できなくなるのは俺だけども・・・言って悲しくなった…　）」
獄寺隼人に走り近づき、勢いよくトンファーで攻撃をする。
獄寺隼人はその攻撃をしゃがみこむことによって避ける。
「獄寺はヒザをついた。　ストップだ」
「　やだよ　」
リボーンが止めるが、俺は攻撃することをやめない。
続けて獄寺隼人に攻撃しようとすると、　キィン！
「次、オレな　」「山本!!」
山本武がその攻撃を刀で防いでくる。

「……！（防がれた・・力が入らなくなってきている。　原作力か、病気のせいか…）」
「これならやりあえそーだな　」「　ふうん　」
防がれたトンファーを押し返す。
「どーかな？」攻撃を続け　打ち合う
ギッ！　山本武の攻撃をトンファーで防ぐ
「（ここかな？）　僕の武器にはまだ秘密があってね。」
「？　秘密…⁉？　」
「（桜を見に行く時はこのトンファーも持ち運ぶようにしてるんだよね。）」
ガキ！　仕込み鉤を使用し刀をとらえ、　ブンッ！　勢いよく押し飛ばす。
「ぐわっ」
仕込み鉤を元に戻す。（「俺は山本武を倒した。　経験値は貰えなかった。　よわーい　」）
〔ディスるな！〕

ズガン!!　銃声が聞こえた。
「復活（リ・ボーン）死ぬ気でヒバリを倒す!!」
死ぬ気タイムになった沢田綱吉が、〝はたき〟に姿を変えたレオンで攻撃を仕掛けてきた。
それをトンファーで防ぐ。　バチッ！ぽふっ
「うおお!!」
沢田綱吉は大声をあげながら〝はたき⊠で攻撃してくる。
「　君は変わってるね。強かったり弱かったり。よくわからないから・・・殺してしまおう。」
激しく武器を打ち合う　バチ！バチ！バチ！ぽふぽふぽふ
互角に打ち合い続ける。
（「一々（いちいち）　〝はたき⊠の先端が当たってうざいんだが…　」）
シュウウウウウ「い⊠⁉？」
5分が経ち　沢田綱吉の死ぬ気タイムが終わったが、かまわず攻撃

する。

「わっ　ちょっ　まって！　ひいっ！」

どさっ！　「！」

（「・・・今か……」）

俺は足の力が抜け、両ヒザを地についてしまった。

「い☒っ‼？！　えー⁉？　うそっ⁉？　オレがやったの～⁉？」

（「イラ俺は今のお前にやられるほど弱くない」）

「ちがうぞ　奴の仕業だぞ」

（「そうだぞ　あの呑んだくれのせいだぞ」）

（「あ☒☒～　ふらつくんじゃぁ☒～」）

ふらつきながらも立ち上がる。

「ヒバリさん！」

「　約束は約束だ。　せいぜい桜を楽しむがいいさ（俺が楽しめなくなった桜をなぁぁ!!）」

フラフラフラ…　俺はふらつきながらその場を離れる。

（「今日はもう家に帰ろう…桜が無い道はリサーチ済みだよ。」）

浮雲　21

おはこんばんにちは！　さぁ、新学期が始まったよ。
・・・・・俺　、並中4年目だ…なんでだろ～なんでだろ～
なにしてんだろ・・・

ま、それは置いておくとして・・・
今日は新入生が入ってくる日　＝（イコール）　俺に逆らう者も入ってくるということで、
今、俺の足下には咬み殺したばかりの肉塊が落ちてるいるんだよね。
今日みたいな風紀が乱れる日には、咬み殺したものを一旦集めてから救急車を呼ぶようにしてるのさ。
じゃ、これも運ぼうかな。
（これの肉塊は、俺のお気に入りの場所を汚したから咬み殺した。）

～～～～～～～～～

運んでいる途中
「ちゃ　おっ　ス　　ヒ　バ　リ」「　！　（リ　ボー　ン！）」
ピラミッド（リボーン）パワーが現れた。
「　君は？　　並中は関係者以外立ち入り禁止だよ（どうやって飛んでるんだこれ？）」
「それはわるかったぞ。　　だが、伝える事があるんだ。」
「　伝える事？（の前に　そのフワフワ浮いてるのが気になるんだけど。）」
「ああ、2年A組の沢田と内藤が風紀委員会に入りたいと言ってたんだぞ。」
「　へえ、確かに聞いたよ。　　それだけなら僕はもう行くよ。これを捨てにいかないといけないからね。」
そう言って持っている方の手を少し揺らし、その場から離れる。

（「読心術（唇）が俺に効かなくてよかったなー」）

～～

「　やあ　」少し歩いたところで沢田綱吉を見つけ、　先程の聞いたこともあるので声をかける。

「ヒバリさんも3年…でしたっけ…？」沢田綱吉は何故か、顔を青ざめさせながら聞いてくる。

「　僕はいつでも自分の好きな学年だよ。」

　ひきずっていたものを放り捨てながら答える。

（「俺って今何年生だっけ？授業を受けた記憶ががｇ」）

「沢田ちゃん　オレもバイト断っちった！　せっかくなら一緒がいいもんね！」そう言いながら内藤ロンシャン（バカ）がやってきた。

「　きいたよ。君達　風紀委員に入りたいんだろ？（内藤ロンシャン…心に闇（病み）を抱えてそうなんだよな…）」

「えーー！　誰がそんなことをー　！!?　」

「　彼に聞いたよ。」

　そう言いながら、まだ後ろに居たリボーンに指をさす。

「おっ　いいじゃん！いいじゃん！　やろーよ　沢田ちゃん！　いやー　どもども！　トマゾ8代目　内藤ロンシャンでーす！」

「なにいってんの！　オレはいいよ!!？　」

（「うるさい奴だな…　あ！　そういえば…」）

！ズガン!!　銃声

　キィン!!？　（「・・・撃たれるんだったな、」）

　嘆き弾を防いだ。

「　何のマネだい？　殺し合いするなら気軽に言ってくれればいいのに。」

　獲物を見る目で2人を見る。

！ズガン!!　また銃声　内藤ロンシャンが倒れる。

「ロンシャン」
モコッ　「もうお先まっ暗コゲ…過去もまっ暗コゲ…」
　嘆き弾を撃たれ、なげき小僧を額から出した内藤ロンシャンが体育座りしながら現れた。
「テルミ!!?　なぜ着信拒否なんだ!!!うおおおぉ」
「うん　いい鳴き声だ。　すごく咬み殺したくなってきたよ。」そう言い　トンファーを用意する。
　!ズガン!!またもや銃声
　次は　沢田綱吉が倒れる。
「オレにまっ暗コゲとか…　どーでもいいよ…　煮るなり焼くなりどーにでもすればいい…」
「　!??　」（「これは確か、嘆きの境地だったか…　死ぬ気のゼロ地点に少し似てる…かな?」）
「人生　ダメがこんで嘆くことが多すぎると…　どーでもよくなる……」
「……死を覚悟した人間を倒すことほど、つまらないものはない…」
「　とは思わない。」　ぎゃ　ぐはっ!　ボコりまくる。

（「うっせーな　日常編はもういいんだよ!さっさと黒曜編に行けやゴラ!」）

浮雲　２２

ちょりっス！
季節は早々に夏へと変わり、俺は暇しているところだ…
今　、俺は綱吉が修行した崖の上にいる。
いや、ホントついさっきまで崖の下にいて　久しぶりに登ってみようという考えのもと崖登りを開始したんだけど・・本気を出さずにこの崖を1分で登ってしまってね、、、
「そ、そんなに鍛えたつもりはありませーーん!!」
ハイスペック？そんな言葉で表せないだろこれは!!
何？原作力で力がセーブされてしまうのに　これは意味がないだろーが!!
え？　原作終了したら暴れていいのか？このままだと俺、破壊神と化すよ？
うぉぉぉお!!　本っ気で暴れてぇ～～～!!
今までの生活でわかったけど、俺も戦闘狂の気があるみたいなんだよな。。。
いずれ強い奴と戦うってのを考えると、体がゾクゾクして気も高ぶって口角も少し上がってしまうんだよね。
そういう時は　咬み殺す対象を探しに出て、気を落ち着かせようとするけど、逆に不燃焼になることの方が多いのな。
・・・・思った・・今の俺は確実に原作雲雀さんより強い、とてつもない差がある・・・
・・・あれ？　俺が満足できる程　戦える奴っているのか？
原作も壊せないし・・・・よし！考えないことにしよう。その時はその時だ。現実逃避ともいう。
こういう時は歌を歌う。　うん　　それが良い
「　『ファミリア』
♪　ファミリア　限りある出会いの中で人生の一部の人

ファミリア　携帯の着信履歴をいつも埋めてくれる人
ファミリア　時にケンカして離れたり　でもいつの間にかそばにいたり
ファミリア　何かあるとすぐ駆けつけてくれる人よ
♪　理由もなく孤独だと思うのは
ひとりじゃないと感じるためにあなたがくれた気持ち　♪　」

・・・・・歌ってて悲しくなってしまった……
理由？　理由はね

ファミリア　限りある出会いの中で人生の一部の人
（出会った奴〔会話した奴〕をほぼ咬み殺してる。）
ファミリア　携帯の着信履歴をいつも埋めてくれる人
（俺に電話してくるのは草壁副委員長が殆どだよ。。偶に風紀委員が電話してくる　）
ファミリア　時にケンカして離れたり　でもいつの間にかそばにいたり
（ケンカはした事がないな。そばにいくるのは草壁副委員長が殆ど）
ファミリア　何かあるとすぐ駆けつけてくれる人よ
（連絡すれば草壁副委員長や風紀委員はすぐにくるよ）
♪　理由もなく孤独だと思うのは
ひとりじゃないと感じるためにあなたがくれた気持ち
（俺、憶えている中で両親に会ったことがない。俺　自身は孤独だとは思ってないよ。草壁副委員長もいるしね。）

・・・く、草壁副委員長！　　お前への好感度は高いぞ!!!うん!!

浮雲　２３

ヨヨイノ　ヨイ！ヨイ！

夏祭り　１日目飛ばして　２日目デス

２日目ってことで今日は綱吉達が祭りに来る日だったか。

やはり祭りと言えば　ショバ代集めだよな!!

祭りはいつも２日連続で開催されるから、ショバ代は２日目に回収することにしてる。

俺がショバ代回収をしていなかった時期があるんだけど、、その間もショバ代が回収されていたらしくて、俺が初めてショバ代回収をした時に出店の人達がコソコソしてたのが聞こえてさ。

それが「今日から次期当主が回収に来るのか」とか言う内容で『今日から』という言葉に疑問を持ちながらも　ショバ代を全て回収し終えて家に帰ったんだ。

家に帰ったら食卓にメモと通帳が置いてあって、通帳の名前が　雲雀恭弥　って書いてあったから開いて金額を見たら思わず　「ワオ」って出てしまうくらいの金額が記帳されていて、

メモの方には、、

『恭弥様がお祭りのショバ代回収を行っていなかった時に回収した分のお金と、雲雀家現当主にして　恭弥様のお父上にあたるお方から恭弥様にお渡しするように命じられたお金を　このメモと共に置いてある通帳に入れておきました。　そのお金は恭弥様のものになります。ご自由にお使い下さいませ。』

と、書いてあった。

うん、、金はありがたかったよ。市販のパソコン買ったり、パソコンのパーツを買って自分で組み立てたり、トンファーの改造をするためのパーツを買うのに使ったり・・・　・・・でもね、、親からの金は、何を今更って思ったね。

ま、感想はそれだけなんだけども、、俺は　使えるものは何でも使うつもりだよ。

あれだね、雲雀恭弥のキャラソン『ひとりぼっちの運命（さだめ）』の歌詞に

「　愛なんて知らない　　愛シカタわからない　」ってのがあるんだけど、今ならわかるかもな　この意味　　。。
だけども、パラレルワールドは無数に、ＩＦ（もしも）の分だけあるから一概には言えないんだけどね。
ま、長々と話してるけどあれだ、俺はしばらく前に大金（たいきん）と　パソコンを手に入れていたってことだね
じゃあそろそろ　ショバ代回収に行きますか

～～～～～～～～

夏祭り会場　　ヒバリｓｉｄｅ
（「結構回収できたな～　　」）
俺は今、ショバ代を回収しながら夏祭りを見ている。
（「お、綱吉達見っけ、ショバ代回収にまいりました～」）
「ここらを取り締まってる連中に金を払うのが並盛の伝統らしいっス。　ここはスジを通して払うつもりっス。　」
（「ホウ、ならキチンと払ってもらおうか。」）
ザッ　「来た！」
「　５万　」　　「ヒバリさんーー!?!!」
「てめーー　何しに来やがった！」
「まさか」「ショバ代って風紀委員にーー!?」
「　活動費だよ。　　払えないなら屋台をつぶす。　」
そこに「待ってください！」
数軒隣の屋台から声が聞こえる。
「やっぱり払います！払いますから!!」
ドガッ！ガッ！バキッ‼？　　そこでは実際にショバ代を払わなかった屋台がつぶされている。
～～
「　たしかに　」沢田綱吉達からショバ代を回収し、その場から離れていった。
（「あとは、ひったくり犯達を咬み殺すだけか…」）

浮雲　２４

そろそろかな?と、暫く時間が経った後、
ひったくり犯を咬み殺すために神社の方に向かう。
居た、、これまた群れてらっしゃる・・・
トンファーで、端に居るナイフを持った金髪男の側頭部を殴る。

バキッ!!「うわ!!」
声に反応して　全員の視線が俺に集まる。
「　うれしくて身震いするよ。」
トンファーに付いた血を振り落としながら
「　うまそうな群れをみつけたと思ったら、追跡中のひったくり集団を大量捕獲　」
「ヒバリさん!!!」沢田綱吉が名前を呼ぶ
「んだっ　こいつは」「並盛の風紀委員だ　」
集団がざわめく
「　集金の手間がはぶけるよ。　君達がひったくってくれた金は風紀が全部いただく　」
(「俺の所持金とは別で　委員会の金も必要だからな　」)
「ムカツクアホがもう一人。ちょうどいい、中坊一人しとめるために柄の悪い後輩を呼び過ぎちまってな。」
ゾロゾロ…ゾロゾロ…ゾロゾロ…　　と、周囲から様々な武器を持った奴らが集まってきた。
「やつら　力もてあましてんだわ。」
「何人いるのーー!?」(「１００くらいか?」)
集団のリーダーが叫ぶ
「加減はいらねぇ!!　そのいかれたガキもしめてやれ!!」
(「こう見ると、俺って知名度がまだ低いよな　」)
ズガン!!　いつも通りの銃声
「　復活(リ・ボーン)!!!　死ぬ気でケンカー!!　　オラァ!　来やがれ!」

「　余計だな（俺一人でも十分過ぎるくらいだ。）」
「たかが中坊二人だ！　一気に仕掛けろ!!」
　！ドガァン！　　神社の入り口で爆発が起こった。
「１０代目‼？　　」「助っ人とーじょー　」
　そこにいたのは、獄寺隼人と　山本武。
「気にくわねーガキどもがゾロゾロと　　」
「　冗談じゃない　　ひったくった金は僕がもらう　」
「なぁ？」「やらん！」「当然っス」
　・・それじゃ、役者も揃ったところで、　始めようか!!
「うわぁ!!」「こいつら本当に中坊か?!」
（「さっさと俺に・・咬み殺されろぉぉ!!」）
　～～～～～～～～～～
　ある程度時間が経ち　　不良どもを全て咬み殺した。
　いつのまにか三人が居なくなっていたのに気がついた。と言っても　神社の裏に気配があるから　そこに居るんだろうけど
　俺は後始末を風紀委員に任せ、始まった花火を見ながら家に帰った。
　＋＋＋＋＋＋＋＋
　夏祭りが終わったから　次は漸く黒曜編に突入か…

・・・♪
♪羽根がない天使は　ぼくに言った
　家へと帰る　　地図をなくした
非力なぼくは　絵筆を執って　　乾いた絵の具に　水を注す
この目が光を失っても　ぼくは描いてみせる
この手が力を失ってでも　ぼくは描いてみせる　　・・・♪

リボーン　＝羽根がない天使
　俺に的にあいつは天使より堕天使っていうかんじだな（スーツと強さが目立つせいか？）

黒曜編
浮雲　２５

並盛中学校前　雲雀ｓｉｄｅ

「風紀委員だ‼？」「あそこにも…！」

沢田綱吉とリボーンが来た。

「そりゃあ　あんな事件が多発してるんだ。ピリピリもするぞ」

「やっぱ不良同士のケンカなのかな…」

「　ちがうよ　」

的外れなことを言っている沢田綱吉に声をかける

「ヒバリさん!!」　「ちゃおっス」

「いや…ボクは通学してるだけで…」

沢田綱吉は俺を見て顔を青ざめさせる。

「(何も知らない者からすれば)身に覚えのないイタズラだよ。もちろん、ふりかかる火の粉は元から絶つけどね。(　迷惑なんだよなぁ。今回は俺、やられ役だし…　)」

『緑～たなびく　並盛の～　大なく小なく　並～が～いい～　』電話だ…

ピッ『委員長　草壁です。　３年Ａ組の笹川了平がやられ、並盛中央病院に運ばれました。』

「・・・そう、わかったよ　」ピッ

離れようとしていた沢田綱吉に話しかける。

「　君の知り合いじゃなかったっけ。　笹川了平……やられたよ。」

「！　お兄さんが!!　」

「　今は並盛中央病院に居るみたいだよ。」

「わ、わかりました！　ありがとうございます!!　」

沢田綱吉は病院へと走って行った。

・・・よくもまぁ、俺の目の前で堂々と学校をサボれるものだね。。

ま、それが仲間思いの沢田綱吉だからな。　　俺はそろそろ、黒曜ヘルシーランドに向かうとするか

～～～～～～～

ハァ・・やだな～行きたくないなーっと思ったら頭痛が!!　ウグッ

ヤベ！　　行く！行くから！　　…そう考えると頭痛が治まった。

フゥ～　・・・原作力が　痛みを与えてきやがった……　。

このやろう・・原作力、あとで絶対に咬み殺す…

！　黒曜ランド発見

骸が居るのはたしか、ボーリングができる所だよな、

＋＋＋＋＋＋＋

雲雀ｓｉｄｅ

雑魚どもを咬み殺し、建物内に入る。

返り血を飛ばしすぎたな　・・・

パリ…　　辺りにはガラス片が散乱している。

感じる気配は２つ　、　１つは手前に、もう１つは奥に

（「奥にある気配が骸だな。」）

手前にある気配が動く

「オラァァァ!!」

男が飛び出し、斧を振り下ろす。

（「遅いし大振り」）

斧を避け　　トンファーを男の胴体にくらわせ、そのまま吹っ飛ば

す。

ガシャーン！　男は　ガラスの壁を壊しながら吹っ飛んでいく

奥の部屋に進むと、ソファーに座っている人影が目に入る。

「　やあ　（クフフのサンバ君）」

「よくきましたね」

「　ずいぶん探したよ。　君がイタズラの首謀者？」

「クフフ　そんなところですかね。　そして　君の町の新しい秩序　」

「　ねぼけてるの？　並盛に　二つ秩序はいらない　」

「まったく同感です。僕がなるから君はいらない」

ジャキッ　ジャキッ　「　それは叶わないよ　」

トンファーの仕掛けを発動し、棘（とげ）を出す。

「　君はここで　咬み殺す。」

（「　並盛町は僕（俺）のものだ　」）

浮雲　２６

「　座ったまま死にたいの？」　骸に問う
「クフフフ　　面白いことを言いますね。立つ必要がないから座ってるんですよ。」
ム　　「　……　　君とはもう口をきかない（この頃の骸はＤ（ディモン）に似てるから　少し気に入らない…）」
「どーぞお好きに　　ただ、今　喋っておかないと二度と口がきけなくなりますよ。」
ぞく…　　「　‼？　　（きた…！　）」
「んーー？　　汗がふきだしていますが　どうかなさいましたか？　」
「　黙れ　（よく言うよ、）」
「せっかく心配してあげているのに、ほら　しっかりしてくださいよ。」
　　フラ…　　「僕はこっちですよ。」
「　!!!　（……スゲーグラグラする、）」
「海外からとりよせてみたんです。　　クフフフ　　本当に苦手なんですね・・」
カチッ　　六道骸がボタンを押す　。
　パアアッ　　部屋が明るくなり周りが見えるようになる。
「・・　桜　　・・」　　部屋の天井付近には　　沢山の桜が咲いていた。

～～～～～～～～～～

　ガッ!!　　攻撃され　体が傾くが、
「おっと」　　髪を掴まれ　倒れることを阻止される。
　顔も体も構わず攻撃される。
　外傷は見た目だけで　それほどでもないが、骨や内臓に響く攻撃ばかり。

ヒザをつき、体を腕で支えなければ、体が横になってしまう状態。
「なぜ、桜に弱いことを知っているのか？　って顔ですね。」
（「　…　」）　無言で　六道骸を睨みつける。
「さて、、なぜでしょう　」
「　……　」
「おや？　もしかして、桜さえなければと思っていますか？
　それは勘違いですよ。　君レベルの男は何人も見てきたし、幾度も葬ってきた　。　地獄のような場所でね　。　さあ、続けましょう　」
　ゴッ！　ドカッ！

～～～

城島犬は雲雀が此処にいるってことを知らなかったみてーだが、今の骸に有幻覚が使えるとも思えないしな……

ま、どうせ原作力のせいで此処から出ることができねーし

バーズの鳥が来るまで座って待つことにするか…

ああ、そうだ　俺の携帯電話がお陀仏になったから　ここから出たら新しい携帯電話買わねぇ・と・な・・

浮雲　２７

「　ヤラレタ！　ヤラレタ！　」「ん？」
　高い声が聞こえ、目を開けると　そこには　一羽の小鳥がいた。
「　君…（　ヒバード　）」「ピチチチチ」
　さえずりながら近づいてきた。
（「・・愛でておこう　」）
　指先でヒバードをなでる。
（「癒しだ……　　校歌を覚えさせようか　」）
「チチチ　」　「　ほら、、緑ーたなびく　並盛のー　大なく　小なく　並がいいー　」
「ピチチ　　ミドリービクーナミノーミノ　　」
「　違うよ。　緑ーたなびく　並盛のー　大なく　小なく　並がいいー　　だよ。」
「チッ」　　（「！　舌打ち　…だと……　」）
「ミドリーたなびく　ナミモリのー　ダーイなくーショウなくーナミがいいー」
「　そうだよ　（覚えるのが早いな…）」
「ピチチチ」バサッ　　バササササ
　ヒバードは何処かに飛び去っていった。
（「ヒバードが来たってことは　バーズがやられたってことで、、それじゃあ、あとは　獄寺が来るまで待ってようか　・・・・ノドがかわいたな…。　一応　原作力のせいで骨も数本折れてるし、さっさと骸を殴って帰りたい　」）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

獄寺隼人ｓｉｄｅ
　建物内には入ったが、どこの階段も壊されていて上の階に上がれなくなっていた。
（途中でヒバリの物らしき　壊れたケータイを見つけたが　着うたが

校歌ってダサすぎだろ　）
　そのあと、上の階に上がるための階段を探し回って　やっと見つけたのは非常用のハシゴだった。
　だが、ハシゴがあった部屋には　メガネヤロー　が待ちぶせていた。
　オレはメガネヤローの相手をすることにして、１０代目とアネキには先に骸のもとに進んでもらった。
（副作用の激痛なんてどうでもいい。オレは１０代目が骸のいる場所にたどり着けるように　ここに来たんだからな）
　戦いが始まる。
　メガネヤローの武器、ヘッジホッグから飛ばされる毒針を避けながら、トリッキーな方法で戦っていく。
「障害物のある地形でこそオレの武器は生きる。　ここで待ちぶせた時点でおまえの負けだ　」
　と、ダイナマイトを食らわせる。
　・・だが、、突如　激痛がオレを襲った。
「　うがあああ！　　くそっ　こんな時に…!!?　」
　激痛に気を取られていたオレは　背後（外）から来るもう一人の仲間に気づかなかった・・
　オレはそいつの鋭い爪に胸を抉られ　大ダメージを負ってしまった・・
　階段状になっている数段の段差から落ち、仰向けに倒れる。
（「体が…動かねぇ…　」）
バササ　　「ヤラレタ！　ヤラレタ！　」
　１羽の鳥が、どこからか来て　壁に空いている穴にとまる。
（「くそぅ…ヘンタイヤローの鳥まであざ笑ってやがる。何が１０代目の右腕だ…
　　何の役にも立っちゃいねーじゃねーか…　　くそっ…くそっ……！」）
「ミドリーたなびく　ナミモリのー　　ダーイなくーショウなくーナミがいいー」

鳥が歌う

「へへ…（ここに居たのか）」

一本のダイナマイトに火をつけ　鳥がとまった壁にむかって投げ転がす。

！ドガアン!!　　ガラガラガラ　　壁が崩れる。

「へへっ……　うちのダッセー校歌に愛着もってんのは…　おめーぐらいだぜ…」（「ヒバリ」）

浮雲　２８

雲雀恭弥ｓｉｄｅ

！ドガアン!!　ガラガラガラ　　壁が崩れていく。

（…ようやく出番か　）

「……元気そーじゃねーか」

崩れた壁の前には　胸に傷を負い　仰向けに倒れている獄寺隼人が

「ヒャハハハハ　　もしかしてこの死に損ないが助っ人かーー!?」

その奥には邪魔者がいる。

「　自分で　でれたけど、まぁいいや。　じゃあ、このザコ２匹はいただくよ。」

「　好きにしやがれ」

「死にぞこないが何ねぼけてんだ？　こいつはオレがやる　」「言うと思った。」

「徹底的(てってーてき)にやっからさ」　カシャン　牙をつける。

「百獣の王　　ライオンチャンネル!!!　　ガルルル…　」

姿が変わった

「　ワオ　　子犬かい？」

「うるへーアヒルめ!!」

四足歩行で走り　こちらに向かってくる。

（「俺の名はヒバリだよ。」）

俺は　落ちているトンファーを蹴り上げ　カガッ掴みパシ　　パシッ　叩きつける　ヒュッ！

それは避けられてしまうが、勢いを殺さずに　もう片方のトンファーで攻撃する。　ガッ!!

その攻撃でそいつは　窓ガラスを割りながら外に飛んでいく

「犬(けん)！」片割れが叫ぶ

「　次は君を…　咬み殺す。」　　「　……　」

そいつはヨーヨーを構え　攻撃しようとしてくるが、そのまえに

近づき、そいつもさっきのやつと同様に外に向かって殴り飛ばす。
（「次は…六道骸　　。　　獄寺を連れ、さっさと上に行くか…　先に病気の薬もらわないとな。」）

～～～～～～～

悲鳴が聞こえた。
「ひぃぃ!!　やめて！　助けて!!」
沢田綱吉の声だ。
六道骸の姿を見つけ、片方のトンファーを投げつける　　ビッ！
　ギュルルルル！
が、弾かれる　　キン！　　カラカラカラ
「トンファー⁉？　」
「１０代目…！　伏せてください！」
！ドガガガ!!
獄寺隼人が投げたダイナマイトは　沢田綱吉を囲んでいた蛇を吹き飛ばす。
「おそくなりました。」
「ヒバリさん!!　獄寺君!!」
「（ここまで連れてきたんだ）借りは返したよ　」　ポイ　　「いでっ」
　　肩を貸していた獄寺隼人を捨てる
「これはこれは、外野がゾロゾロと、千種は何をしているんですかね？」
「へへ　　メガネヤローならアニマルヤローと下の階で仲良くのびてるぜ。」
　と、他が話しているうちに　俺は原作力のせいでフラつきながらも、先程投げたトンファーを拾いに行く
カラン…　　チャ「覚悟はいいかい？」
　トンファーを構える。
「これはこれは　怖いですねぇ。　だが今は、僕とボンゴレの邪魔をしないで下さい。　　第一（だいいち）君は　立っているのもやっとのはずだ、

骨を何本も折りましたからねぇ」
「遺言はそれだけかい？　（それぐらいで動けなくなるような柔な体はしていないよ。全て原作力のせいだ　）」
「クフフフ　面白いことを言う　君とは契約しておいてもよかったかな？　仕方ない　君から片ずけましょう　」
ヴゥ…ン　六道骸の右目の数字が四に変わる。
「一瞬で終わりますよ。」
ダッ　六道骸が三叉槍（さんさそう）を手にしながら走りよってきた。それを迎え撃つ
ガッ！　キキキンッ　ガギキキキキ！　キキキンッ　ギンッ‼？
どちらとも、攻撃し　防ぎを繰り返す。
「　君の一瞬ていつまで？　（左肩攻撃されたけど　少しは躱せたな）」
ばっ！　互いに距離をとる。
「やっぱり強い！　さすがヒバリさん!!」
「こいつらを侮（あなど）るなよ骸、お前が思っているよりずっと伸び盛りだぞ。」
「なるほど　そのようですね。　彼がケガをしてなければ勝負はわからなかったかもしれない」
ブシュッ　「！」　左肩から血が吹き出た。
（「原作よりもキズは浅いぞ！　原作だと　ブシュウ　だったからね　」）
〔そこまで覚えてるのか主人公…〕
「クフフフフ…　時間のおムダです。てっとり早くすませましょう」
ヴゥ…ン　六道骸の眼の数字が一（いち）に変わる。
サァァ　天井付近で桜が咲く
「さ…桜!?　まさか　ヒバリさんのサクラクラ病を利用して…！」
フラ……

「クフフ　　さあまたひざまづいてもらいましょう」
「そんな！　ヒバリさん！」
（「　心配無用　・油断大敵　　」）
縮地簡単にいうと、一歩で二歩分進める歩法、高く飛ばない前に行くスキップを使い、一瞬で六道骸の懐に入り　攻撃する。
　油断していた六道骸には簡単に大きなダメージを与えることができた。
　六道骸の口からは　ツー　っと血が出る。　内臓がきずついたのだろう
「へへ…　甘かったな。　シャマルからこいつをあずかってきたのさ
　サクラクラ病の処方箋だ　」
　獄寺隼人が内用薬の袋を取り出しながら語る。
（「　いらんこと言うな、そこは黙っていた方が動揺を誘えるだろ　」）
　俺は攻撃をたたみかけながら考える。
（「　そういえば、無意識には戦ってないな　どうなるんだ？　」）
　六道骸を殴り飛ばした。
「ひ…ヒバリさん　大丈夫ですか？」
　沢田綱吉が近づいてくる。
　　フラ　ばたっ！　　倒れる　。　（「　痛いここでも原作力か！　」）
「大丈夫ですかヒバリさん！」
「こいつ　途中から無意識で戦ってたぞ　よほど一度負けたのが悔しかったんだな」
「ヒバリさんすげー…」
（「　何言ってんの!?？　意識あったよ！　てか今もあるよ！
ガンガンあるよ！　うわぁ　げんさくりょくぅ～　」）
「クフフフ　Ａｒｒｉｕｅｄｅｒｃｉ」　！ズガンッ!!　どさ
（「あ、いつのまにか骸が憑依弾使ってた。ここから俺の出番ねーし、寝てようかな。　原作力　あとは任せた。　」）

浮雲　２９

ピッ　「契約すると言ってますがね。」
（「　…起こされた。時間たってねーじゃねーか。言ってますがね、じゃねーよ。あ、骸(何か)入ってきた感じがする。　」）
「ま…まさか‼？　」　沢田綱吉が少し後退する。
ゆら…　俺の体がかってに下を向きながら立ち上がる
「ヒバリさんの中にまで‼？　」
（「だよな～　こーなるよな～　　働け原作力、俺の体倒れろ～」）
　バキッ!!　　「がっ」　　俺の体が勝手に動き　沢田綱吉を攻撃する。
　が、　　どさっ！　　俺の体は倒れた。
「おや？　　この体は使いものになりませんね」
　どうやら　俺の体に入った六道骸は立ち上がれないようだ。
「これで戦っていたとは恐ろしい男だ。雲雀恭弥……　」
（「お、骸が出て・どさ・痛(いった)。。。ひでぇ、寝てたところ憑依して　攻撃一発だけして使えないならあとはどうでもいいと出て行きやがった。
　例えると、寝始めて少し経ったころに電話がかかってきて、その電話に出たら『よ！　　お前の自転車借りるな・・・あ、大きさ合わねぇからやっぱいいや　』って言って電話を切るって感じだな。その間俺は一言も喋ってない・・・その後自転車みたら鍵がさしっぱなしになったままだったしよ、、なったままと言えば　これ、契約されたままになるのか？それとも　骸の闘気(オーラ)が浄化されたら契約が無効になるのか？　いや　でも　黒曜が終わった後に一般人の子供に骸が憑依してる描写があったな、またいずれ　ってさ。ま、これも今考えても仕方ないか、また寝ることにしよっと　」）

＋＋＋

「委員長‼？　本日は野球部　秋の大会です‼？　」
リーゼントの風紀委員はそれだけ言って　屋上から去っていった。

ふあ～ぁ…　　いい天気だ。
あの戦いのあと、目を覚ましたら病院のベットで寝ていて、治療もされた後だった。
携帯電話が無く　日にちも分からなかったし、いつのまにかそこに居たという事と、雲雀の心が骸にいいようにされていたという事にムカつき度がガンガン上がり、体が勝手に動き　病院から脱走することになったが、、まあ、、うん
入院していた病院は　並盛中央病院　、何故か替えの服があったからそれを着て窓から　ＧＯ！　をした。。
まあ、そこらへんはどうでもいいんだけどね。
・・・次は…ＶＳヴァリアー編、、並盛が荒れるし壊れてしまう
気に入らないな…
だけどまあ、制限されている力を使う最大値が上がるのはいいね。ディーノとも戦えるしな、
リング争奪戦じゃ　足をケガしちまうだけで　いいように戦えないからさ
ま！　その不満をディーノにぶつけてやる。まぁ　　戦ってる時も本気をだすことはできないだろうけど、、
じゃあ、ハーフリングが届くまで待とうかね。

ＶＳヴァリアー編
浮雲　３０

…ＶＳヴァリアー編に突入したようだ。
日曜日にショッピングモールが破壊されたと報告をうけた。負傷者死者はいないそうだ。
（いるけども、いるけども！　）
建物をなおすのは誰だと思っているんだか・・・俺じゃないけど、
それでだけど、今日　、今、応接室にある俺の机に　雲のハーフボンゴレリングが置いてあったから手にとってみたというところで疑問というか不安がわいた・・・
雲のリング、というより　雲の守護者の使命は、〔なにものにもとらわれず　我が道をいく浮雲〕
・・原作力による強制力や　原作雲雀＝他人と同じように生きている、生きてしまっている俺に　雲の守護者がつとまるのか・・・
ハァ　、、未来編までに　僕ではなく俺が、俺自身が覚悟を決めないとな
・・・俺の覚悟、か。。。

～～～

「ふーん、赤ん坊の…　じゃあ強いんだ。」
そう言いながら日誌を横に置き、ソファーから立ち上がる。
「僕は指輪の話なんてどーでもいいよ。。　あなたを咬み殺せれば…」
「なるほど　問題児だな。いいだろう　その方が話が早い」
話しかけてきた彼、跳ね馬ディーノはムチを構える。　それに合わせて俺もトンファーを向ける。
（「あなたが応接室に、俺のテリトリーの一部に無断で入ってきたのがいけないんだ。
ここでやると後始末が面倒だから屋上でやろう。やっとだ、やっと強者と戦える。わくわくするね。」）

～～～

かれ避けられる。
それを気にせず、勢いそのままで攻撃を続ける。
少しすると　跳ね馬がムチを振るってきた。
「甘いね。死になよ（たしか、腕を取られるんだったか）」
そう考えながらもそれを避け、攻撃する為にトンファーを引く

ガッ！　　引いたトンファーは腕ごとムチで絡められてしまった。
（「・・どうなってんだか、物理法則無視だろ…」）
「おまえはまだ井の中の蛙だ。　こんなレベルで満足してもらっちゃ困る。」
「……（されど空の深さを知る。俺は並盛から出た事は黒曜を除いて無いが、ずっとここにいる事で面白いことを知ることができてるけどね。俺にとって、だけど。）」
「もっと強くなってもらうぜ　恭弥。」
「（命令されるのが）やだ」　「なっ」
ビュッ！　ガッ!!
俺は捕らえられていない方のトンファーで攻撃した。
「てってめーなあ！」
（「やっぱ　直撃は避けられたか。というか、少し離れたところに気配を感じる。これはたしか、、沢田家光・・・ま、あいつはどうでもいいか。今は、俺を手懐けようと思ってるはずの跳ね馬を咬み殺すだけだからね。」）

浮雲　３１

次の日・学校の屋上
今　屋上にいるのは、俺こと雲雀恭弥、そして、キャバッローネファミリー１０代目ボス　跳ね馬ディーノと　その部下のロマーリオ
「よう　恭弥。今日は戦う前に指輪の話をしてえ、騙してるみてーでスッキリしねぇからな。」
「　いいよ興味ないから。・・・あなたをグチャグチャにすること以外（グチャグチャ＝（イコール）血まみれだからな、）」
「ったく、困った奴だぜ。」
「（いちいち言葉がうざい）ねえ、真剣にやってくれないと、この指輪捨てるよ？　」
そう言い、雲のハーフボンゴレリングを取り出す。
「なっ　まて！　のやろ～～っ」
跳ね馬は動揺し、その背後では跳ね馬の部下が笑いをこらえている。
「わーったよ　じゃあ交換条件だ。真剣勝負でオレが勝ったら　おまえにはツナのファミリーの一角（いっかく）を担ってもらうぜ。」

チャキッ　　、　　ビッ！
俺はトンファーを構え、跳ね馬はムチを構える。
ヒュウゥゥウ　　風が吹き始め、、　止まったと同時
ダッ!!　　攻撃を開始する。
俺はトンファーを使い、近距離で攻撃をするが避けられる。少しでも距離が空けば、跳ね馬がムチを使い中遠距離で攻撃をしてくる。
戦いはすぐには終わらず、時間が過ぎて行く

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

あれから五日後、リングを手にしてから六日後、ヴァリアーが並盛

に来た　次の日の朝である。
俺は、まだヴァリアーが来た事を知らない跳ね馬と並中の屋上でバトっていた。
戦い始めてから、双方　休息を全く取らず、傷の手当てもしていなかった俺達は　血まみれになりながらも向かいあっていた。
屋上も所々（ところどころ）壊れており、壁が削り取られていたり、手のひら程の大きさの円状のへこみやヒビが入っていたりと周りの被害も大きくなっていた。

そんな時、ディーノの部下が報告があると声をかけてきた。
それをきっかけに戦いは一時休戦となった。
大方（おおかた）、ヴァリアーが来た事と、争奪戦の舞台が並中になった事についてだろう。報告が遅いな。

・・・そうか、リング争奪戦は今日からか…
俺は応接室にて　そんな事を考えながら自身の傷の手当てをする。
消毒をし、ガーゼを当て　包帯を巻く。
跳ね馬の部下の治療は大ざっぱだったはずだし、自分でやった方がいい。
医療〔応急手当〕を覚えておいてよかった。
今日の対決は　晴、そのあとは　雷→嵐→雨と続いていく、
という事は、今日から俺は　嵐戦の日まで跳ね馬に連れられ修行の旅に出ることになるのか……
お、俺の並中～すまねえ、、すまねぇな～
窓ガラスやら校舎の三階、あとは校舎B棟と体育館の屋根が破壊されるんだったな・・・・・・仕方ねーか、、、

～～～～～～～～～～～～～

着替えや食事をし終わり　応接室で休息をとっていると、包帯を巻いた跳ね馬が部屋に来た。

そして、「屋上だけじゃなくいろんなシチュエーションで戦ってみよーぜ。　その方が　より強くなれるからな。」と言って俺を連れ出した。
移動には車を使った。群れるのが嫌いという事を配慮してくれたようで、車には俺、跳ね馬とその部下だけだった。
（3人からは群れの認識だが俺は我慢して車に乗った。俺！　えらい！（部下さん（ロマーリオ）が　できる限り気配を消してくれていたのが大きい。）
跳ね馬は助手席で寝ていた。俺も半分寝てしまった。少しでも大きめの音がするごとに目を開けてあたりを確認してたが…
ヒバリの心がこんな所じゃ眠れないと、俺の睡眠の邪魔をしてきた。。警戒心高いな　おい。
（知ってるけど、いつも通りだけど…　）
今日までの跳ね馬との戦いで、俺も使える力を少し上げる事が出来るようになったから　この旅でのケガも減るだろう。
次の俺の登場は嵐戦の終了時か・・・

浮雲　３２

リング争奪戦３日目
今宵は嵐の守護者戦　　ベルフェゴールＶＳ獄寺隼人
フィールドは校舎の３階全てでおこなわれる。
時刻は　１１時２０分　　勝負開始が１１時過ぎ。
勝負に使われるハリケーンタービンは試合開始から１５分後に爆発して行く
勝負の説明が１１時に始まったので、移動の時間も含め　もうじき爆破が開始されるだろう。
俺は並盛に帰ってきてすぐに跳ね馬を無視して並中に向かった。

並中が見えてきた頃・・・
！ドガガ…ン!!　　と爆破が始まった。

急いで並中に向かう　　その間も爆発は止まらない。
学校近くに住んでいる住民はこの爆発に気づかないのかと思ったが、幻術で学校を覆ってると思い出す。
俺に幻術の効果が及んでいない？・・・原作を知っていて何が起こっているか知っているからか？それとも守護者だからか？
そう考えながらも学校に到着、爆発が起こっている３階へ向かう

（爆発が始まって１分以内で到着した俺スゴ）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

雲雀恭弥ｓｉｄｅ

３階へ向かおうとしてすぐ、黒服を着たやつらが襲いかかってきた。
不法侵入者は咬み殺す。

ガッ！「ギャッ!!　」　　ガシャァンッ!!
階段下へ叩き落とす。
ビッ！　　どささささっ！
あぁ、あちこちに血が飛び散っちまった。血の汚れって落とし難いんだよね。ルミノール反応だったかが出ちまうし。
ザコどもを咬み殺しながら3階に到達し、最後の1人を咬み殺す
「ぐああっ」　どしゃっ！
3階は　あちらこちらがボロボロになっており、その原因だろう奴らも居た。
（「　・・・・・・　」）
「ヒバリさん!!」
沢田綱吉が俺の名を呼ぶ、　君の最初のセリフはいつもこれだ…
「ヒバリさん…　来てくれたんだ。　本当にリング争奪戦に加わってくれるんだ…　あの　最強のヒバリさんが…!!?　」
「（俺は、最も強いわけではないんだがな…　）校舎への不法侵入及び校舎の破損　連帯責任でここにいる全員咬み殺すから　」
その言葉に、沢田綱吉側はヒバリはヒバリだと改めて思い、ヴァリアー側はそれぞれ別々の感想を抱く。
チェルベッロの片割れが俺に話しかける。
「あなたは沢田氏側のリング保持者ですか？　でしたらこのような行為をなされては…」
だがそれをレヴィ・ア・タンが遮る。
バッ！「どけ　チェルベッロ　奴はただの　不法侵入者だ!!!」
バ！バ！バ！バッ！　電気傘に電気を纏わせ突っ込んでくる。
（「　俺にしてみたら、お前達の方が不法侵入者だからな。」）
ムッツリの攻撃は、出せる力が上がった今の俺には簡単に対処できる速さだった。
俺はムッツリの突撃を避ける。
その際に足を引っ掛け　ムッツリを転かす。　ムッツリは顔面から転び倒れる。

「　まずは君から　咬み殺そうか（疑問形ではない）」
「なに!?」
「おーおーかっこいいねえー」
　ＶＳヴァリアー編以降　全く出番がなくなる指名手配犯がほざく
（作者は不覚にも、不覚にも、こいつの事をかっこいいと思った事がある。）
「あのバカ出てくるなりメチャクチャしやがって」
「でもやっぱりすごいよ　ヴァリアーの攻撃をいとも簡単に」
「ああ　さすがだな。」

「できる…！　何者なんですか？」
　チェデフのバジリコンの質問にリボーンが答える。
「奴は、うちの雲のリングの守護者にして　並中風紀委員長　雲雀恭弥だ。」
「雲ということはゴーラ・モスカの相手だね。」
「マーモン、奴をどう思う。」
　と、双方で俺に関して話している。
（「　暇…帰りたい眠い…休ませろ、どうせ戦えないんだから　」）
　そう考えていると、スペルビ・スクアーロ（ロ・ン・毛）が吠えてきた、
「うおぉい!!　貴様　何枚におろして欲しい!!」
「　ふうん　次は君？（やるよ？俺殺（や）るよ？　チェルベッロが止めても関係ないよ？　原作力が働かなければ今にでも俺はお前をやってるよ？↑眠いとこうなります。）」
　山本武が俺を止める。
「落ちつけってヒバリ　怒んのもわかっけどさ。」
「　邪魔だよ。僕の前には　立たないでくれる。」
　そう言いトンファーを振るう。
　だが、どんなにイラついていても原作力が働き、攻撃が遅くなってしまう。
　そのため、山本武はそれを簡単に避（よ）け、俺の背後に回り　トンファーを掴み　抑える。

「そのロン毛はオレの相手なんだ　我慢してくれって。」
「　！…（我慢？）…邪魔する者は何人(なんぴと)たりとも、　　咬み殺す
」
殺気は無いが、　　ゴゴゴゴ　　という効果音が聞こえてきそうな程のイラつきを　山本武達は感じているだろう。

そんな俺に　リボーンが声をかける。
「ちゃおっス　ヒバリ！」
「　赤ん坊かい？　悪いけど今、取り込み中なんだ。」
「ここで暴れちまってもいいが、でっけえお楽しみがなくなるぞ。」
「　！　　楽しみ…？（何だっけ　眠くて思考が…）」
「今すぐってわけじゃねーが、ここで我慢して争奪戦で戦えば、遠くない未来、六道骸とまた戦えるかもしんねーぞ。」
「　ふうん　　本当かな　」
俺は問うが、リボーンは俺を見つめるだけだ。
（「　！言ってない！本当だとは言われていない!!かもしれないと言われただけだ！うわ！うわー！自分がやるのは良いがそれをやられるのはイラつく!!くそ！くそ！くそ！くそぉー!!」）
一旦　そのイラつきを抑え、チェルベッロに問う。
「　校舎の破損は完全に直るの　」
「はい　我々チェルベッロが責任をもって。」
「　そう……　気が変わったよ。　　僕とやる前にあそこの彼に負けないでね。　　じゃあね。」
山本武にそう告げ、俺はその場を去る。
（「　六道骸…俺自身も、あいつとまた戦いたいと考えている。あの勘違い野郎をボコりたい。・・・六道骸じゃなくても良いけど、誰かと、本気で戦いたいな…　　」）

浮雲　３３

家に帰りぐっすり寝た次の日の夜　今日は雨の守護者の対決
リング争奪戦の話は昨日、並盛に帰る前に跳ね馬に聞いておいた、
というより、話を聞いたから帰ってきたんだけどね。
俺は今、校舎の屋上にある給水タンクの上に座っている。ここから
争奪戦を見る予定だ。
もう少しで戦いが始まる・
ふあぁ…　「皆殺しにすれば早いのに　」
結果を知っているため　暇していた時（今日は昼寝したから起きて
いられるよ）
サアァァァ…　「　霧（きり）…？　」　辺りに霧がかかった。
（「この霧は…クローム髑髏こと凪に憑依中の六道骸が発生させた
ものか。　居る場所は体育館の上だったはず　。　ま、
今はいいか、、さて　山本武、俺に時雨蒼燕流（しぐれそうえんりゅう）をみせてくれ。　」）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

雨のリング争奪戦は山本武の勝利で終わり、Ｓ（スペルビ）・スクアーロは鮫
によって水中に・・

次の日の放課後　並盛の見回りをしていたときだった。
「お久しぶりです。また　強くなったようですね。」
話しかけられた？　振り向くが気にとまるものは無く、そのま
ま見回りを再開した。

内心では…（「　骸だよ！・クロームだよ！　骸ＩＮクローム
髑髏　どうせ勝つだろうが霧戦ガンバ～　骸あいつ、なに
アルコバレーノに圧勝してんだよ。　この争奪戦、ヴァリアー
全員手加減してんじゃねーのかと思うぐらいの勝ち方だよな。
そういうＩＦ（もしも）もあるだろうけど。」）

～～～

そう言いながら、何も知らない跳ね馬が河川敷に現れた。
「　試してみなよ。　（俺今、ものすごくイラついてるからストレス発散させてよ。）」
「いや！　　もう今日はいいだろう！」
跳ね馬は少し焦りながら両手を俺に向けてくる。
（「・・・まあ、もう深夜で、午前中にもやりまくったしな…　　」）
「じゃ、じゃあ俺はもう行くぜ。　　また明日（あした）な！　」
そう言い残し跳ね馬は帰って行った。
（「　あれ・・俺ってこのためだけに何時間も待たされたのか…？　」）

浮雲　３４

次の日、今日の戦いは雲戦　俺の戦い
・・今回は足をケガするはめになるのか…。まあいい、やってやるさ、なるようになれ！　だ。

夜になり、並中に向かう
目に入ってきたのは、獄寺隼人、山本武、笹川了平の３人
「　君達……　何の群れ？　」
そう声をかけると　それぞれが答える。
「んだとてめー！」「まーまー　、えーとオレ達は…」「応援に来たぞ!!」
「　ふうん…　目障りだ　消えないと殺すよ　」
「なんだその物言いは!!　　極限にプンスカだぞ!!」
「まーまー　落ち着けって、オレ達はぐーぜん通りかかっただけだから気にすんな　ヒバリッなっ」
山本武が他２人をおさえていると、ヴァリアーが降り立った。
「　そうか…あれを　　咬み殺せばいいんだ（さっさと終わらせる）」

～～～

フィールドを用意しました。
四方は有刺鉄線で囲まれ、８門の自動砲台が３０ｍ以内の動く物体に反応し攻撃します。また地中には重量感知式のトラップが無数に設置され、警報音の直後　爆発します。」
チェルベッロがフィールドについて説明する。

（「　早く始めたいな。あいつ（ザンザス）は強い部類だから、戦ってみたい　」）

「ぶはーはっはっ!!そいつぁ楽しみだ!!!」
大声でＸＡＮＸＵＳ（ザンザス）が笑い出した。
「　……（あいつらが挑発でもしたか？　まあいい、開始まで待つか　）」

～～～

カチ…　　俺はそれを見向きもせず、リングを1つにする。
　周りのやつらは早々の決着に　ぼーっとしている。
（「　暴食のことはどうでもいい　」）
「　これいらない　」「へ？」
　近くにいたチェルベッロにリングを渡す
「あの…」
　何か言いたげなチェルベッロを無視し、俺は憤怒に話しかける。
「　さあ、おりておいでよ。　　そこの座ってる君。　サル山のボス猿を咬み殺さないと帰れないな　」
　挑発していく～・・・

浮雲　３５

ＸＡＮＸＵＳ　が動く、不敵な笑みを携えながら
フィールドを仕切っている有刺鉄線を飛び越え、ヒバリを踏みつける。
ヒバリは、それをトンファーで防ぐ。
ダ　ンッ！　　ＸＡＮＸＵＳ　は空中で翻(ひるがえ)り着地した。
「足が滑った。」
「　だろうね。　」
「ウソじゃねえ」
ピーッ　！　　ザンザスが着地したところには　フィールドトラップがあったようで警報音が鳴る。
！ドオン!!　トラップが発動し　爆発がおこるが　ザンザスは軽々避ける。
ザッ！　　「そのガラクタを回収しにきただけだ。　　オレ達の負けだ。」
「ふぅん　　そういう顔には・・見えないよ。　」
ダッ！　　俺はざに向かって走り、攻撃をしかける。
ビュ！ビュッ！　避けられてしまうが　それでも攻撃を続けていく
ウイイィ…ン　ガガガガ！　　砲台の射程距離に入ったようで撃たれ始める。
！ドンッ!!ドォン!!　　いくつものトラップも反応し　爆発していく
「安心しろ、手は出さねえ」
「　好きにしなよ　　どのみち君は咬み殺される　」
（「　・・攻撃が当たらない、、それと、モスカにスッゲー観察されてるのを感じる…」）
しばらくの間　攻撃を続けていると、
「！」　コオオ…
ＸＡＮＸＵＳ　は手に憤怒の炎を纏わせる。

！バチッ!!!　　炎を纏わせた手とトンファーがぶつかり合い大きな音を出す。
「　手……出てるよ？（やっと当たった　）　」
「くっ　　チェルベッロ」
「はい　　ＸＡＮＸＵＳ様」
　ザンザスは俺からの攻撃を避けながらチェルベッロに話しかける。
「この一部始終を忘れんな　　オレは攻撃をしてねえとな」「　⁉？
　」

　ＸＡＮＸＵＳは何かを見てニヤリと笑う
（「　！　来るか!!　」）
　そう思ったとき・・・　　ブオン!!　　ゴーラ・モスカから放たれたビームが左脚を深く掠めた。
　　ブシュッ　　ガクッ　　足から血が噴き出し痛みに片膝（かたひざ）をついてしまう　　。
（「　グッ・・・イテェ…やっぱり、完全には避けられなかったか…、だが、原作のキズよりは浅いと思いたい　」）
　！ドン！　！ドドン!!!　　大きな爆発がいくつも起こり、それぞれの守護者達もその被害に合う
「……なんてこった。オレは回収しようとしたが、向こうの雲の守護者に阻まれたためモスカの制御がきかなくなっちまった」　ＸＡＮＸＵＳが白々しく語る。
　ガガガドシュドシュドシュッブオ！ガガガガガガガガ⁉？
　暴走したゴーラ・モスカは　あたりかまわず攻撃していく

ド！ド！ドン！　　ギュオオオ　　ブオン！　!!ドガン!!
「　…フフ…ぶはーはっは!!　　こいつは大惨事（だいさんじ）だな!!!」
ＸＡＮＸＵＳは爆炎の中で大笑い。
　ゴーラ・モスカは暴走を続ける。その攻撃は、雲のフィールドの仕切りも壊していた。そのせいで、クローム髑髏がフィールドに入ってしまい、トラップや砲台がクローム髑髏を、そして、クローム髑髏を

助けに入った城島犬と柿本千種を襲う。

・・・　！ドウッ!!!　　３人を守るように大きな炎の壁が、そして、その壁をつくった沢田綱吉が現れた。

（「　やっと来たか…　」）

ゴーラ・モスカはそれにかまわず、あたりにミサイルを射出する。

沢田綱吉は、グローブに死ぬ気の炎を灯し、空を飛びながら射出されたミサイルを全て、誰にも被害がないように破壊する。

そして、ゴーラ・モスカへ　一瞬で飛んで行き、ゴーラ・モスカの取れかけていた左腕を引きちぎる。

「おい、デクの棒。　おまえの相手はオレだ。」

そう言い、引きちぎった腕を炎を使い完全に壊す。

ゴーラ・モスカは、沢田綱吉に標的を絞る。

ゴーラ・モスカから射出されたミサイルは全て、沢田綱吉を狙う。

沢田綱吉は、ゴーラ・モスカから放たれたビームを避け、空中へと飛び上がるが、飛んだ先にはゴーラ・モスカが先回りをしていた。

ゴーラ・モスカがビームを放つ前に沢田綱吉は、ビームの射出孔（しゃしゅつこう）を炎を纏った拳で　殴り壊す。

その衝撃により吹き飛ばされたゴーラ・モスカは、地面に叩きつけられ、！ドゴッ!!　と、大きな音を上げる。

沢田綱吉は地面に降りた。叩きつけられたゴーラ・モスカは煙を上げている。

「ＸＡＮＸＵＳ……一体これは　」

沢田綱吉は、何かしらの違和感を感じたようだ。眉をしかめている。

！ボファッ!!　　まだ動けたのか、ゴーラ・モスカはジェットを使い、沢田綱吉に突進する。

それに気づいた沢田綱吉は、片手で、突進してきたゴーラ・モスカを止め、もう片手に炎を纏わせ、手刀の形にし、ゴーラ・モスカを真っ二つに焼き切る。

ズンッ！　　ついに、ゴーラ・モスカは動きを止め、ヒザをつい

た。
ズ……ッ　　ゴーラ・モスカの中から　何かが出て、地面に落ちる。
「な…なんと…中から人が……!!」
ゴーラ・モスカから出てきたのは人。それも、ボンゴレファミリー現ボスのボンゴレⅠX世だったのだ。
9代目は、ゴーラ・モスカの動力源にされていた。沢田綱吉のゴーラ・モスカへの攻撃が貫通し、9代目の胸は血に染まっていた。
9代目にはまだ意識があった。口から血を流しながらも、沢田綱吉に話しかけ、想いを伝えようとする。
9代目は指先に死ぬ気の炎を灯す。だが、その炎はどんどん小さくなり、終いには消え、9代目は倒れる。
ＸＡＮＸＵＳがほざく
「よくも9代目を!!!　　9代目へのこの卑劣な仕打ちは、実子であるＸＡＮＸＵＳへの。そして、崇高なるボンゴレの精神に対する挑戦と受け取った!!」
「な!???」
「しらばっくれんな!　9代目の胸の焼き傷が動かぬ証拠だ!!?　ボス殺しの前には、リング争奪戦など無意味!!?　オレはボスである我が父のため。そして、ボンゴレの未来のために。　貴様を殺し、仇を討つ!!?」
ボスとなると同時に独裁体制をつくるための、ＸＡＮＸＵＳが仕掛けた罠。
その罠にかかってしまった沢田綱吉…
「ＸＡＮＸＵＳ　　そのリングは…返してもらう……。おまえに9代目の跡は、継がせない!!」
沢田綱吉は決意した。そして、それに伴うように、沢田綱吉の守護者達は武器を取る。
「10代目の意志は、オレ達の意志だ!!」　　「個人的に」
「くるかガキ共!!」「いいねぇ」「反逆者どもを根絶やせ」
・・・だが、それをチェルベッロが止める。

９代目の弔い合戦は我々がしきると、我々にはボンゴレリングの行方を見届ける義務があると、周囲がどう言おうが関係ない。チェルベッロは、勝利者が次期ボンゴレボスとなる　大空のリング戦の開催を決定する。
「それでは明晩、並中にみなさんお集まり下さい。」
「フッ　　明日が喜劇の最終章だ。せいぜいあがけ」
そう言い、ＸＡＮＸＵＳは　大空のリングの半分を沢田綱吉に向かって弾き飛ばす。
そして、目くらましとして死ぬ気の炎を使い、その光に乗じて、ヴァリアー　そしてチェルベッロは姿を消した。

そこに、「遅かったか‼？　」
「跳ね馬!!」
跳ね馬ディーノが部下を引き連れてやって来た。
「おまえら‼？　９代目とケガ人を‼？　」
跳ね馬の命令で部下が動く。９代目を担架に乗せ、病院へ運ぶ者、金属探知機を使いトラップを探す者。
俺はそれを横目に見ながら帰ろう動く。
足のキズは　布を巻くなどの応急処置を施したが、早く家に帰り、きちんとした処置をおこないたいと思っていた。
病院へ行かないのかって？明日もあるのに『入院しろ』なんて言われたらたまったもんじゃない。
ま、そうなったら抜け出すんだけどね。
そう考えていると、山本武、獄寺隼人が話しかけて来た。
「大丈夫かよヒバリ！」　「めずらしく大人しくしてたじゃねーか。」
「この状況が、あの草食動物の強さを引き出しているのなら　まだ手は出せないよ。」
（ここは、ターニングポイント。原作通りなら、彼が大きく成長できる場所。彼の成長を俺が止めるわけにはいかないからね。・・・原作力が働いてて、元から俺は動けないけども…）
さて、今度こそ帰ろうか。

俺は、綱吉がリボーンに蹴られたのを見て帰路についた。
誰も見ていないその口元(くちもと)は、うっすらと笑(え)みを浮かべていた。

浮雲　３６

こんにちはっス!!　　この入り方、久しぶりな気がする。

俺は今、町の見回りをしている。

・・・いや、、な。　今日一度、学校を見に行ったんだけどさ・・・ほら、昨日の戦いでボロボロにされたからね。

ま、見た目は、チェルベッロの術士がコーティングしていたから普通の人から見たらいつも通りの校舎に見えてるんだろうけど・・・俺が校舎を見たとき　何故か違和感が半端なくて、とても気持ち悪く感じたんだよね…

だから今、こうして見回りに出ているんだけども・・・・・・・かれこれ６時間くらい……目が遠くの方を見てしまうよ・・・

そうだ、ついさっき、人気のない場所を歩いていたらチェルベッロが来てね。『今日の夜行われる戦いには、守護者は必ず並中に来てください』と言われた。　そのあと、すぐに去っていったから、そのまま見回りを再開した。

日が暮れる前に　一度学校に戻って、仕事が少しあったからそれを片づけてから、家に帰った。

(違和感や気持ち悪さは我慢したよ。早く直してほしいよまったく…)

それから、家では早めに夕ご飯を食べて、足の包帯を巻き直して、軽めの準備運動をしていた。

そういえば・・毒を、デスヒーターを注入されるんだよな・・・絶対、早めに解毒してやる、絶対にな!

あとは、時間が来るのを待つだけか、また　ちゃんと戦えないのは不服だけれども。。

～～～～～～～～～～～～～～

夜、時間まであと少し…　俺は、並中にやってきた。
「　用件は何？　」
「ヒバリさん!!　　用件？」「オレ達と一緒だな。」
「守護者は必ず来るように、チェルベッロから…」
クローム髑髏がそう、沢田綱吉に教えると、チェルベッロが肯定する。
「そうです。　命ある守護者全員に、強制招集を発動しました。」
「強制招集……？」
沢田綱吉はよくわかっていないようだ。
「奴もいるぞ」
リボーンが　沢田綱吉に教えるように、ヴァリアー側を指差す。
そこに居たのは　鎖で雁字搦めにされた鳥かごのような檻に入れられているマーモンが・・
声が聞こえた方を見て見ると、そこにはベッドに縛りつけられたままのオカマが居た。
そして、ヴァリアー側の守護者が連れてこられているということは、こちら側もということで…
「沢田氏側の雷の守護者も来たようですね。」
「⁉？　　ランボ!!　　な…なんでランボまで⁉？　　意識取り戻したばっかりなんだぞ!!」
移動用の酸素ボンベをつけられた仔牛も連れてこられていた。
「強制招集をかけたのは他でもありません。　　大空戦では、６つのリングと守護者の命をかけていただくからです。」
「リングと、守護者の命をかける…？」　　「そうです」
「ちょっ　　何言ってんの⁉？　　ランボはケガしてるんだぞ!!⁉
ランボを返せ!!」
「下がってください、状況はヴァリアー側も同じです。」
「そーよ。ガタガタ言わないの！　　招集がかかったら、どんな姿だろうと集まる。　それが守護者の務めよ！」
「その通りだよ。僕もＸＡＮＸＵＳ様の怒りがおさまって、力になれる機会をうかがっていたのさ。　」

「ししし、よっくゆーよ。つかまったけど殺されずにすんで、饒舌になってやんの」
「ムッ」「お黙りベルちゃん‼?」
山本武が　おそるおそる問う
「スクアーロは……?　いねーのか…?」
「雨戦の顛末はご存知のはずです。スクアーロの生存は否定されました。」
「……」
「では、大空戦を始めましょう」
「えっ　ちょっと待ってよ!　まだ納得は…「できなければ失格とし、XANXUS様を正式なリングの所持者とするまでです。」
「ぐっ」「のやろー」

それからチェルベッロは　守護者のリングを回収し、守護者達にリストバンドを配った。
リストバンドを配られた守護者達はそれを装着し、チェルベッロの指示に従い、自身の守護者戦を行ったフィールドに移動することになった。
沢田綱吉側の守護者は、フィールドに移動する前に円陣を組むことにした。俺やクローム髑髏は円陣を組まなかったが、笹川了平の極限ルールによって円陣に入ったとみなされた。
その後、沢田綱吉側の守護者達も移動を開始した。いや…若いっていいね。アオハルしてるよ…

浮雲　３７

自身が戦ったフィールドに到着した。
フィールドには、ポールが設置されており、その頂上にはリングが置いてある。

「ただし、できればの話ですが。」
チェルベッロの意味深な言葉のすぐあとに、グサッ　と、小さな音を立てて、装着していたリストバンドから毒を注入された。
注入された毒はデスヒーターと呼ばれ、この毒は瞬時に神経をマヒさせ、立つことすら困難にする。そして、全身を貫く燃えるような痛みは徐々に増してゆき、３０分で絶命させる。
それを回避するには、装着しているリストバンドに、それぞれの守護者に合ったリングを差し込み、内蔵されたデスヒーターの解毒剤が投与しなければならない。
そして、重要な大空戦の勝利条件は、ボンゴレリング全てを手に入れること。
さあ、これより、大空戦の幕が上がる。

その頃、俺はというと、デスヒーターによる神経マヒでうつ伏せに倒れていた。
：痛いよこれは……正直、ここまでとは思わなんだ…　だけど、立てないほどじゃ～ない。
どうせ助かると、気を抜きすぎていたな　これは。・・・今まで通りに、原作力が働き続けるという保証はどこにもないのにな…
認識を改めないとダメだ。俺は今、ここで生きているんだから。俺が雲雀恭弥なんじゃない、この雲雀恭弥が今の俺なんだ。
だから・・・俺は俺として、今を生きる！　　今更感があるけどね。
俺は、フラつきながらも起き上がる。そして、毒ニモマケズの意思

で、！ドゴオッ！ガッ！ゴッ！と、ポールを倒す。　ポール自体は簡単に倒れ、リングが落ちる。
落ちたリングを拾い上げ　リストバンドの凹みに差し込む。するとすぐに解毒剤が投与された。
・・まだ少しフラつくけど、これくらいなら全く問題ない。じゃあ、雨の所に向かおう、途中でベルフェゴールにあうことになるのか、ワイヤー避けて良いかな？　……ダメ？、ダメか～・・・ちくせう！

～～～～～～～～～

移動中、リストバンドのモニターを見ると　ＸＡＮＸＵＳが、嵐と雷のポールに向かって銃を撃っている映像がちょうど流れた。
ＸＡＮＸＵＳが撃ち出した死ぬ気の炎を蓄積させた死ぬ気弾は、嵐と雷のポールを倒すこととなり、計算していたのか、嵐と雷のリングはどちらとも　ヴァリアー側の守護者に渡ることとなった。そして、ヴァリアー側の守護者は、リングを使い解毒し、それぞれ行動を始めた。
雷の守護者　レヴィ・ア・タンは、沢田綱吉側の雷の守護者ランボを殺すために、嵐の守護者ベルフェゴールは、沢田綱吉側の嵐の守護者　獄寺隼人は、毒によってもがき苦しみ死ねと、自分からは手を出さず、リングを持って、校舎の３階から飛び降りた。

原作力が働いたからか、それともタイミングが良かったのか、すぐ目の前にベルフェゴールが降りてきた。
骨折してから５日目で　その回復力は凄いと思うよ。俺も人のこと言えないけど…

「こっからだと雨が近いか」
そいつがそう口にした時、俺は攻撃をしかける。ベルフェゴールは事前に気がつき攻撃を避けるが、俺の目的は他にもあった。
ベルフェゴールが持っている嵐のリングを上に、３階の、獄寺隼人

が居る場所に向かって弾き上げる。
「……！　おまえは…」
「ふぅん　　よくかわしたね。　　君……天才なんだって？（跳ね馬が争奪戦の説明をしてたときに口にしてたよ。）始めようか、天才君。」
　雷のことは嵐に任せ、俺は俺の好きに戦う。跳ね馬が言っていた外の世界で、天才と言われている彼に興味がある。俺も存外、戦闘狂だからさ…

「オレもおまえ知ってるよ。エース君だろ？」
「　ちがう、一文字もあってないよ（確か、山本武が雲戦で言ってたんだったか…）」
「……しし、、変な奴……　でも何だか一気に、楽しくなってきちゃった。」
　そう言い、ベルフェゴールは　数十本（すうじゅっぽん）のナイフを自分を囲うように、宙（ちゅう）に漂わせる。
「　ふうん…曲芸でもするのかい？　足ケガしてる分のハンデをあげようか　。」
「ごケッコーー、だっておまえも足ひきずってん…じゃん」
　その言葉とともに、両者とも戦いを開始する。
　最初に動いたのはベルフェゴール、自身を囲っていたワイヤー（ナイフ）を操り、３６０。全方位にナイフを飛ばす。そのいくつかが俺のもとへも飛んでくるが、それは全て叩き落とす。
　数を撃っても意味ないよ　と、ナイフでキズつけようと思って行った行動ではなく、それは、攻撃するための下準備としての行動。ナイフの動きも直線的で、簡単に叩き落とせた。
　俺はこの行動の意味を知っているので、自分が動きたいときに　思うように動けなくなる原作力はとても厄介だと、改めて思った。俺も何かに縛られる事は嫌いだ。行動を制限され、一方的にキズつけられると分かっているところに行く事も嫌いだ。俺はキズつけられて喜びを感じる人間じゃないもんでね。そういう人間がいる事は知って

いる。俺的には、いてもいなくてもどっちでも良い、というかどうでもいい。俺の害にならないなら、という言葉はつくけども。
話が逸れた・・・俺が叩き落とした以外のナイフは、俺の後ろ側に建っている校舎に突き刺さった。ベルフェゴールは笑う。
ブシャッ　　と、俺の左頬と左肩から血が吹き出る。ナイフには当たっていない。
ベルフェゴールは追加のナイフを俺の左右に投げる。俺は移動するために右方向に動くが、そこにもすでにワイヤーが張ってあり、右側の頬と腕の数カ所から勢いよく血が吹き出てしまう。
流れ出た血で滑り、持っていたトンファーを手放してしまった。そして、足のケガと出血によりバランスが崩れ、後ろに倒れるように座ってしまった。
「ししし、天才の勝ちー　　っーかオレ負けなし？　　そりゃ王子だもんな。　　バイバイ」
そう言い、ベルフェゴールはトドメのナイフを投げてくるが、俺はその数本のナイフを指で挟むように全て受け止める。
「！」
「へえ、なるほど、ナイフに糸がついていたんだ。　　まるで弱い動物が生き延びるための知恵だね。　　そういうことなら・・一本残らず撃ち落とせばいいね。　」
俺は立ち上がり、トンファーの仕込みを発動させる。
トンファーの持ち手とは離れている方の先から出たのは、先端に尖っている重りが付いている鎖（くさり）。
トンファーを回すことで鎖も回る。遠心力で強化されたそれは、いとも簡単に壁をも砕くことのできる武器となった。
「や……やっべ……」
「　覚悟はいいかい　」
今度はこちらの番という意味を込めて攻撃をするが、
「っと…　　パース!!」
ベルフェゴールは後ろに下がることでそれを回避する。躱された攻撃は校舎に当たってしまい、ドゴオッ！と、音を立てて、校舎の壁

の一部が壊れてしまった。
「パスいち！　自分の血ー見て本気になんのも悪くないけど、今は記憶飛ばしてる場合じゃないからさ。だってこれ、集団戦だぜ？　他のリング取り行こっと。　　それにそれだけダメージ与えれば勝ちみたいなもんだしな、　バイビ　」
そう言い、ベルフェゴールは最後に俺にナイフを投げつけて、その場から離れた。
投げつけられたナイフは弾いておく。
「　口程にもないな。　」
まあ、彼もまだ本気じゃなかったみたいだけどさ……
腕を振って、邪魔な血を落とす。意外と右腕のキズが深く、出血が多い。
貧血になったのか、体がフラついてしまう。倒れてしまわないよう、壁におっかかる。
・・血が止まらない……これは、早く止血しないとな。　　ん？
あぁ、空中で沢田綱吉とＸＡＮＸＵＳが戦ってるのが見えるな。
俺も空中戦してみたいな・・・いずれ、ロールを足場にして空中移動できるようになるか？まだまだ先は長いな……
そうだ、さっさと止血しないと、確かポケットに入れといたはず・・・お、あったあった。これを腕に巻いて、結んでっと・・・

止血が終わった時、!!!ドドドン!!!!　と、とても大きな音が連続して聞こえた。音のした方向を見ると、夜にはふさわしくないほどに明るくなっていた。
ＸＡＮＸＵＳの技だったよな……　上手くいってれば、沢田綱吉が死ぬ気の零地点を突破できたことになるか。
なら俺は、そろそろ雨戦のフィールドに向かうとするか。

浮雲　３８

ガラッ　　雨のフィールドに到着した。　当たり前だが、水は全て抜かれていた。
「ぐっ…ハア、ハア、」
　居た、山本武。
　毒にやられて倒れているのを見つけた。
「ハア、ハア、、！　　ヒバリ…　おまえ…」
　山本武の声は無視し、ポールを倒す。リングは山本武の方へ転がるように計算した。
〔べつに張り合ってるわけじゃねーから〕
　山本武は手元に転がってきたリングを　リストバンドに差し込む。

　これで雨の守護者は動けるようになったな。
「ハア、ハア、　ふ～～　いやーまいった…　サンキュ！」
「　校舎で死なれると風紀が乱れるんだ。死ぬなら外へ行ってもらう。」
「あはは、なんだそりゃ　」
「　……（　事実だろ　）」
フラ　フラ　どんっ　と、出血は止まったが、貧血なことは変わらないので体がフラつき壁に肩が当たってしまった。
「おい、大丈夫か？」
「　何のことだい？　」
「……」
　山本武が少し呆れているのを感じるけど、弱みは見せたくないからね…

「交代だ！こっからはオレが引き受けた。」
「　…勝手にしなよ。　」
「おう！じゃ、行ってくる！」
　そう言って、山本武は走っていった。

・・・・少し、休むか…　　あ、　体育館がブッ壊れる事忘れてた・・・・今更か…

ＸＡＮＸＵＳが解凍されるまで休めるな。　休憩休憩っと。

～～～～～～～～～～～～～～～

沢田綱吉は、零地点突破初代（ファースト）エディションでＸＡＮＸＵＳを凍らせた。全身を氷に包まれたＸＡＮＸＵＳは、冷凍仮死状態になった。

もう、これが溶けることはないと、沢田綱吉は言う。

だが、、その場に　マーモンが大空以外のボンゴレリングを持って現れ、リングの秘められた力を使い、ＸＡＮＸＵＳを包んでいた氷を溶かした。

沢田綱吉が持っていた大空のリングはベルフェゴールに取られ、ヴァリアー側に、全てのボンゴレリングが渡った。

沢田綱吉側の雲以外の守護者も　その場に来た。

「受け継がれしボンゴレの至宝（しほう）よ。若きブラッド・オブ・ボンゴレに大いなる力を！」

大空のボンゴレリングはＸＡＮＸＵＳの指にはめられた。

大空のボンゴレリングが、そして他の守護者のリングが共鳴するように光り輝く

「こ…これは…!!?　　力だ!!!　とめどなく力があふれやがる!!!　　これがボンゴレ後継者の証!!　　ついに!!ついに叶ったぞ!!　これでオレはボンゴレの１０代目に・・」

そのとき、ドクン！　　という音をＸＡＮＸＵＳは耳にした。

瞬間、

「!!がっ!!」　　！ゴパッ!!?

ＸＡＮＸＵＳの全身から、夥（おびただ）しい量の血が噴き出した。

リングがＸＡＮＸＵＳの血を拒んだ。その結果がこれ。

ＸＡＮＸＵＳは９代目と血が繋がっていない。ブラッド・オブ・ボ

ンゴレなくしては後継者として認められない。
その事実を知ったＸＡＮＸＵＳは、怒(いか)り、決意した。９代目をひきずりおとし、ボンゴレを手に入れると、そのために起こしたクーデター　・・・

「９代目は、血も掟も関係なく、誰よりおまえを認めていたはずだよ。９代目はおまえのことを、本当の子供のように・・」
ＸＡＮＸＵＳは、沢田綱吉から伝えられる、その言葉は欲していない。だから叫ぶ。

「気色の悪い無償の愛など!!　クソの役にも立つか!!オレが欲しいのはボスの座だけだ!!　カスはオレを崇めてりゃいい!!オレを讃(たた)えてりゃいいんだ!!　」
血で滑り、ＸＡＮＸＵＳの指から大空のリングが抜け落ちる。
「ＸＡＮＸＵＳ様！あなたにリングが適正か　協議する必要があります。　」
「だ…だまれ!!?　叶わねーなら道連れだ!!　どいつもぶっ殺してやる!!」
「大さんせーだボス」「当初の予定通りだよ」
ＸＡＮＸＵＳの言葉にヴァリアーが追従(ついじゅう)する　。
「どこまで腐ってやがる。やらせるかよ！」
沢田綱吉側の守護者はそれを止めるために動こうとする。
俺も、よろめきながらもそこに合流する。

この場では２対５、沢田綱吉側が有利に見えた。だが　ヴァリアーは、総勢５０名のヴァリアー隊が到着する、お前たちは死ぬと言った。
外部からの干渉を認めるわけにはと発言したチェルベッロをベルフェゴールが殺した。
その結果、チェルベッロはヴァリアー側を失格と言い、観覧席の赤外線を解除するボタンを押したが、ヴァリアーに細工されてしまっており、観覧席に居た者達は外に出ることが出来なかった。

するとそこに　３人のヴァリアー隊が現れた。
「ナイスタイミーング　　待ってたぜ。」
だが、様子がおかしい
「報告します。我々以外のヴァリアー隊全滅!!」
３人は息を切らし、ヒザをつく者、倒れる者がいる。
「奴は強すぎます!!鬼神のごとき男がまもなく・・」
「暴蛇裂覇(ぼうじゃれつば)!!」
巨大な鉄球が飛んできて、ヴァリアー隊を吹っ飛ばした。

「取り違えるなよボンゴレ。　　オレはおまえを助けにきたのではない、　礼を言いにきた。」
ヴァリアー隊を全滅させたのはランチアという男。かつて、六道骸に操られ沢田綱吉達と戦った事があった者だった。

ランチアが現れたことによって　不利になったと感じたのか、ベルフェゴールが沢田綱吉にナイフを投げた。
そのナイフを山本武が防ぐ。
「おっと、そーはいかねーぜ」
クローム髑髏は幻術を使い、幻覚の火柱でマーモンを攻撃する。
「逃がさない」
俺はトンファーから鎖を出し、攻撃する姿勢をとる。
「　ねえ、決着つけようよ　」
笹川了平も拳を構える。
「いかせんぞ」
獄寺隼人は沢田綱吉の前でダイナマイトを構える。
「１０代目!おケガは!」
守護者達は、ベルフェゴール、マーモン、倒れているＸＡＮＸＵＳを囲む。
それを見て、ベルフェゴールはナイフを捨て、両手を上げる。マーモンも、もう諦めたようだ。
「役立たずのカス共が…　　くそ!　　ちくしょう!　　てめー

ら全員!!!呪い殺してやる!!!」

チェルベッロがＸＡＮＸＵＳに近づき会話をしている。ＸＡＮＸＵＳは気を失い、話し終えたチェルベッロが宣言する。

「お疲れ様でした。それでは、リング争奪戦を終了し、全ての結果を発表します。　ＸＡＮＸＵＳ様の失格により、大空戦の勝者は沢田綱吉氏。　よって、ボンゴレ次期後継者となるのは、沢田綱吉氏とその守護者６名です。」

これにて、大空戦そしてリング争奪戦の幕が閉じた。

皆が勝利の余韻（よいん）に浸（ひた）る中、ただ１人だけは、もうすでに次の戦いに目を向け、ほんの少しだけの期待感、緊張感、恐怖心を心の中に浮かべていた。

未来編？
浮雲　３９

やあ、おはよう
大空のリング戦が、ヴァリアー編が終わり、雲のボンゴレリングは今、俺の指にはまっている。

俺は今、とてつもなく、【何かが違う】と感じていた。
違和感と言えば良いのか…　こうじゃない感をすごく感じている。
そしてその原因は、約一ヶ月後に理解した。
ＶＳヴァリアー編が終わって一ヶ月後と言ったら、原作ではもう未来編に入っている時期で、
並中生、つまり沢田綱吉達２年生組が行方不明になっているはずなんだけど、どういうわけかそんな事は起こらずに、皆（みな）いつも通りの日常を過ごしていた。
ここまでくればもう、薄々勘付ける。
そう、、俺が居るこの世界は、原作の世界軸では無いという事を。
それと同時に俺の勘が働いた。この世界は、原作で沢田綱吉達が行くこととなる、未来世界へ繋がる時間軸だと、
つまり　この世界で俺は、原作雲雀さんより強くなれないのだと！
ｇｏｄｄａｍｎ（ガッデム）!!

・・・まあ、いいか…　　どんな世界だろうと、俺は生きてくだけだし、
ミルフィオーレという、好きに咬み殺しても良い奴らが　わいてくるとわかってるしな。
逆に面白いだろ、この未来世界では一体どんな事が起こるのか、沢田綱吉らはどんな成長をして行くのか…楽しみだ

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

あれから半月(はんつき)も経たないうちに、ボンゴレに敵対しているファミリーが徒党(ととう)を組んで並盛町に攻めて来るという情報を掴んだ。目的は、時期ボンゴレボス沢田綱吉とその守護者の抹殺(まつさつ)。

その情報を事前に掴んだでいたこちら側は、その敵対ファミリー集団を迎え撃つためにそれぞれ鍛えることになった。

守護者には各々(おのおの)家庭教師が付き、守護者達はぐんぐん成長していった。

そして、敵対ファミリー集団襲撃日

沢田綱吉とその守護者達、そして家庭教師をするために並盛に来ていた跳ね馬ディーノとS(スペルビ)・スクアーロ、マーモンも手を貸し、 俺も、敵対ファミリー集団の並盛への攻撃に制裁を加えるという目的で、共に戦った。

並盛在中組には沢田奈々や笹川京子、三浦ハルなどの戦力外の近くに居てもらい守ってもらっていたようだ。沢田家光どこ行った……

敵対ファミリー集団を無事、大なり小なりケガはあるものの倒すことができ、今回の戦いは終わった。

この戦いの後、ちょくちょくとヒットマンが送り込まれてくるが、それを風紀委員会で片づけるはめなるのはまた別の話。

並盛中学卒業後、俺と草壁、笹川了平は 共に並盛高校に入学した。

並高に入った初日に並高の風紀委員会を乗っ取り、俺は風紀委員長の草壁は副委員長の座に就(つ)き、並高の頂点にも、当たり前のように君臨した。

風紀委員会の服装はいつも通り学ラン一択(いったく)。

そして俺の年齢は草壁、笹川了平と同い年という認識になった。

俺ですら自分の年齢がわかってないんだけどな…

あとは久しぶりに、お手伝いさんからの置き手紙を貰って、その内容は、俺が並中を卒業したから雲雀家の当主の座が俺に譲られたということで、その手紙を読んだとき、まず思ったのが「何故に!?」というのと「当主になったら何かしなしなきゃいけないのか?」だった。

まあ、使えるものが増えたと考えることにしたよ。

高校生時は、並盛にちょくちょく来る敵対ヒットマンを片しながら、風紀財団を立ち上げる準備をし、高校卒業後、並盛中学風紀委員を母体とした、秘密財団（まだ地下はつかない）を立ち上げた。

その頃にはもう、死ぬ気の炎を利用する者、匣兵器（ボックスへいき）を使う者も徐々に増えていった。

そいつらに対抗するために俺は、死ぬ気の炎を灯せるリングと、匣兵器（ボックスへいき）を集めることに力を注いだ。

そして、リングと匣（ボックス）を集めるのと並行（へいこう）して、匣（ボックス）の研究と調査も始めた。

持て余している金を使い、日本、そしてイタリアに研究施設を建設した。俺が動くと色々と目立つから、施設の件は他の風紀委員に命じた。

そして俺は、オリジナルのポルコスピーノ（雲）・ヌーヴォ（ハ）（リ）（ネ）（ズ）（ミ）ラの匣と、死ぬ気の炎を灯せるトンファーの匣を見つけ、持ち歩くようになった。

（匣（ボックス）のレプリカを造（つく）る技術は　まだ持っていない）

それから数年後、沢田綱吉は高校を卒業してすぐに、ボンゴレボスの継承式をすることになった。（沢田綱吉らも並盛高校だった）

本当は、沢田綱吉が中学校を卒業したら継承式を行う、という事だったそうだが、それをリボーンと跳ね馬が止め、期間が伸び、高校を卒業までという事になったと聞いた。

沢田家光どこ行った…自分の子供ことだろ、何してんだか…

俺は匣の研究・調査が忙しく、継承式に行くつもりは無かったんだけど、跳ね馬が俺の所（ところ）に来て、好きなだけ、気の済むまで戦ってやるから、その代わりに継承式に出てくれと言ってきたんだ。

その時の俺は、咬みごたえの無い奴らの相手ばかりで、ストレスが溜まっていたから跳ね馬の提案を受け入れた。

沢田綱吉達を狙っていたヒットマンはいくら送り込んでも意味が

ないと理解したのか、その頃には全く来なくなっていた。まあ、今まで来たヒットマンのお陰で風紀委員達にも、ある程度のマフィアの相手も出来るくらいの強さが身についたのは良かった。もちろん、リング無しの相手に限るけどね。

ああ、そういえば、継承式中にボンゴレに敵対しているファミリーが襲撃してきてね、まあ、撃退は出来たんだけど、この襲撃のために力を蓄(たくわ)えていたのか、敵はリングと匣兵器を大量に用意していてね。

まあ、沢田綱吉達や跳ね馬、ヴァリアー達もその頃には、リングの炎と匣兵器を使っていたから、そのせいで力の差が開くということは無かったよ。(ヴァリアーといっても原作の継承式編と違って S(スペルビ)・スクアーロしか来てなかったけど… まあ、友好度が違うからね)

沢田綱吉と跳ね馬が使う匣は、大空属性の匣では無かったんだけどね。大空の匣は珍しくて、世界中を飛び回っている俺ですらまだ手に入れた事がないぐらいだから。

継承式後に一度イタリアのボンゴレ本部へ沢田綱吉と守護者全員で行って、前のボス及び守護者がそれぞれがやっていた仕事の説明と引き継ぎを行(おこな)った。

9代目雲の守護者は白髪でヒゲも生やし頭にサングラスを付けているイカツめのしぶいおっさんだった。

それはどうでもいいんだよ。引き継ぎが終わってすぐ、跳ね馬に戦いのことを念押ししてから俺はすぐに並盛に帰った。

と思わせてイタリアにある匣研究施設に寄ってから日本に行き、日本にある研究施設もいくつか回ってから並盛に帰った。やらないといけないものがいくつもあったんだよ。周りが俺のことをどう思ってるかは興味ないけど、俺も結構多忙なんだよね。

沢田綱吉達はしばらくイタリアに滞在してたみたいだ。まあ、僕には関係ないけどね。

今回の件で蕁麻疹(じんましん)が出たのは予想の範囲内だったよ。

浮雲４０

ここからは展開が早く動いた。
まずは沢田綱吉がボンゴレリングの破棄を実行に移した
僕の耳に入らなかっただけで、だいぶ前から沢田綱吉は、ボンゴレリングを破棄した方が良いんじゃないか、そう口にしていたと後で聞いた。

その次は、黒曜組による六道骸救出作戦
これも原作通り失敗。その後、黒曜組の３人は消息を絶った。

数年が過ぎ、入江正一が沢田綱吉に接触、計画を持ちかけた
僕がその計画を知ったのは、沢田綱吉が僕に協力を頼んできたから。僕としても、マシマロ野郎に好き勝手されるのは気に入らないから協力することにした
過去の自分達に渡すボンゴレ匣（ボックス）は、沢田綱吉自身で用意すると言っていた。超直感（ちょうちょっかん）を使って、それぞれに合う匣（ボックス）でも見つけるのかな。
そして、その計画の一部として、並盛町にボンゴレのアジトを建設することにした
アジトは今の自分達が使うというよりも、過去から来る自分達の拠点としての意味合いの方が強い。だから、医療室や修行場（トレーニングルーム）を多く造ることにしたようだ
過去から来る自分達と関わりやすくなるようにと、風紀財団の施設もそのアジトの隣に建設し、群れるのは今でも嫌いだから、不可侵規定（ふかしんきてい）もたてた

そしてある日、妙（みょう）な噂を耳にした
その噂とは、六道骸が倒された、というものだった
僕はその噂の事を調べた。その結果、噂の発信元と、誰が六道骸を倒したのかはわかったが、それだけだった

原作通り発信元は、ミルフィオーレ、倒したのは第８部隊長　グロ・キシニア
これまで、原作通りにしか世界が動いてないこともあって、六道骸が死んだとは考えられなかった

その後、僕の部下が　イタリアの空港である男と接触しているクローム髑髏をカメラで捉えた
クローム髑髏が接触した男の身元調べは、哲(てつ)に任せた
原作を知っている僕だから、今の段階で考えられる事だけど、六道骸はなんらかの方法で、この計画を知ったんじゃないかと思ってる。それだけ、六道骸の動きはこちらに都合が良すぎる
過去のクローム髑髏がこちらに来た時、霧のボンゴレリングは、マモンチェーンを使った時の様に指輪の力を封印されていた。それを誰がやったんだ、という事になるが、過去から来たばかりのクローム髑髏がそんな事をするとは考えられない、自ずと、六道骸がそうしたと考えられる
だが、何故そんなにもタイミングよくリングを封印出来たのか、と、なり、六道骸が計画を知っていたら出来るんじゃないかという考えに辿り着く
まあ、六道骸は他人の夢に入る事が出来るからね。おおかた、入江正一の夢にでも入り込んで、計画を知ったんじゃないかな。邪魔しないなら、べつにどうでもいいけど・・・

計画開始まで残り数ヶ月、僕は哲を連れ一度並盛を離れた
目的はいくつかあり、表向きの目的は、様々な場所にある風紀財団の研究施設に置いてある、匣(ボックス)や、その資料や研究結果の回収
ミルフィオーレの動きが活発になってきたからその対策、今までの結果を他人に取られたくはないからね。
裏の目的としては、ＣＥＤＥＦ(チェデフ)のバジリコンへの接触
この接触は、沢田綱吉に頼まれたために行(おこな)ったことになる
沢田綱吉はボンゴレのボス、ＣＥＤＥＦ(チェデフ)とさえ、１人で秘密裏に会

うということが難しい立場にある。その点僕は、匣(ボックス)の調査などで世界中を回っている。何処に居ようが僕の勝手、最初は文句を言ってくる奴もいたけど、何年も続けていたら周りは諦めた

まあこれが、雲の守護者だと理解したんだろうね。

バジリコンとの接触は2人きりで行(おこな)った。この接触の事も哲には秘密で、その時は施設の方を任せていた

バジリコンには、今回の計画のほんの一部と、計画のために行って欲しい事を話した。これで助太刀(すけだちのしょ)の書なるものが作られるのか…

そんなこんなで目的を全て終わらせ、キャバッローネに顔出して跳ね馬と戦って、空いた時間で特に目的もなくアメリカ方面に行って、ミルフィオーレが突っかかってきたから咬み殺していたら、ある報告を受けた。

『ボンゴレ本部が陥落(かんらく)した』『ボンゴレボスが死んだ』

本部が陥落してすぐ、ミルフィオーレは交渉の席を用意し、沢田綱吉を呼びだした。だが奴らは、その席で一切交渉などせず、沢田綱吉の命を奪った。

それからは、ボンゴレ側の呼びかけにも一切応じず、次々とボンゴレ側の人間を殺し続けている。

奴らの目的は、ボンゴレ側の人間を1人残らず殲滅することらしく、現在、全世界のボンゴレ側の重要拠点が同時に攻撃を受けている。そう報告を受けた。

僕は哲を連れ飛行機に乗り、並盛へと向かった

ここからが本番、クリアしなければいけない課題は多い・・・な。

番外　　雲と大空

これは、僕が並盛から離れる少し前の出来事。
あの時の僕は離れる前に、まだ静かな　いつも通りの並盛を見ておきたい、そう思い町を回っていた。
ある程度見て回り、最後に並盛山に行き　崖の下で崖の上を見上げていた時、後ろから声をかけられた。

「ヒバリさん!!　奇遇ですね　こんな所で!」
「・・・沢田綱吉…　」
僕に声をかけてきたのは沢田綱吉だった。
多忙な彼が此処に来たことには、少し驚いた。

「何しに来たの。　君、忙しい忙しいっていつも言ってなかった？　」
「あ〜〜　あはは…　」
彼は困ったように笑った
「えーと・・・抜け出してきちゃいました…。　あ!　いや!　ちゃんと一区切りさせてから来ましたよ!　大丈夫です!」
「そんなに焦らなくていいよ。君の仕事の進み具合に　僕は興味がないから　」

「ヒバリさんらしいですね。ですけど!会議!　いつも出て下さいって言ってますよね!!?　ヒバリさん、全然来てくれないじゃないですか!」
「僕は君達と群れるつもりはないよ。」
「ハハッ・・いつも通り、ですね。ヒバリさんは…」
いつもと違う、そう感じた。
いつも、と言える程、彼と会うことは多くはないけれど
「・・・君」「いやーー、懐かしいですね　ここ!」

僕の言葉を遮(さえぎ)るように彼は言葉を紡(つむ)ぐ
「ヒバリさんには言ったことなかったですよね。オレ、昔この崖で修行していたんですよ。
リング争奪戦でヴァリアーが来ることになった時、リボーンに　修行するぞ　って言われて、死ぬ気弾撃(しぬきだん)たれて、気がついたらこの崖登ってて。登りきった後は、崖の上でバジルくんと修行して、そのあとは　死ぬ気の零地点突破の練習。　リング争奪戦のあとも、何かあるとここで修行して。
・・・辛(つら)いことも、悲しいこともあったけど、あの頃が1番楽しかった。」
「・・・・・君」「そういえば　ヴァリアーが来た時、ヒバリさんって確か　ディーノさんに連れられて、いろんな場所で修行してたんですっけ？聞きましたよ。」
「　沢田綱吉　」「？」
「はい、どうしたんですか？」
僕は強い口調で彼の名を呼び、言葉を止めさせた
「　・・どうしたは　こちらのセリフだよ。」

「・・・君……怖いの？」
「・・・え、　」

「　それで隠してるつもりかい？　」
「え、・・・・そんなに、わかりやすいですか、？　・・誰にも指摘されたことは無いんですけど……　」
沢田綱吉は苦笑いをする。

わかりやすいかと問われればわかりやすい。
「　作ったような顔で、多弁になって、違和感しかないよ。　」
「・・・僕は計画を知っている。　だから、君の抱(いだ)きそうな感情に予想がつくだけさ。　」

「ははは…　さすがはヒバリさん。」

「・・・・・そうですね…怖いです。　この計画が失敗してしまったらって考えると。」

「　世界が滅びるから？」

的外れなことを言ってみる。

「いえ…　世界とか、そんな大きなものは　今でもわかりません。・・・ただ、計画が失敗してしまったら、オレの　大切な人たちが　全員殺されてしまう。それだけは　わかります。」

「・・だから、それが…怖い。」

今の彼だと勘のいい誰かが何かに気づいてしまうかもしれない。そう思えるほどの落ち込み具合になってしまった。

余計な事を言ったかもしれない…。　面倒だ、おっと、前の感情が強く出てしまった。

だけど、このままにするのもね。

・・・僕は、彼の家庭教師みたいにうまくはは言えないけども。

「　沢田綱吉、君には何がある？　」

「？どういう」「　君には仲間がいる。君はいつも通り、君の仲間を信じていればいい。」

「‼？」

それだけ言って　僕はその場を離れた。

・・・似合わないことを言ったのは自覚してる。帰ろ…

「・・・そうですね、オレには信じられる人達が沢山います。京子ちゃ

んや守護者のみんな、ビアンキ達やディーノさん達、ＸＡＮＸＵＳ（ザンザス）達も、正一くんも、過去のオレ達も。」

「・・・ありがとうございます　ヒバリさん。もう　大丈夫です！」

＋＋＋

「・・・・・」

ヒバリさんの言った言葉・・・君の、仲間……。

ヒバリさん・・そこには、ちゃんとヒバリさんも入っているんですからね。

それをわかっていますか？

ちゃんと・・わかってくれていますか？……

未来編
浮雲　４１

「　久しぶりだな……。並盛（なみもり）　」

数ヶ月ぶりに並盛に帰って来た
計画がうまくいっていれば、過去の沢田綱吉がこの時代に来てから３日目になる。

並盛に帰って来てすぐ、黒川花（くろかわはな）から　笹川京子に対する救援要請（きゅうえんようせい）の連絡がきた。風紀財団とボンゴレの取り決め通り、ＳＯＳ（エスオーエス）信号を発する機械（発信機）を取り付けたヒバードを飛ばした。
僕自身は今、並盛神社に向かっている。今いる場所から１番近い風紀財団の施設への出入口が、並盛神社にあるためだ。
神社に着いた後に戦う事になるのは、ミルフィオーレ　ブラックスペル　電光のγ（ガンマ）
死ぬ気の炎の属性は雷、匣兵器（ボックスへいき）は、エレットロ（電）・ヴォール（狐）ピ　２匹の狐だそうだ。

僕が今持っているのは、リングが、雲系リング、ランクＣが４つ、ランクＤが９つ、ランクＥの霧系カモフラージュリングが１つ。匣（ボックス）は、トンファー、ポルコスピーノ（雲）・ヌーヴォ（ハリネズミ）ラ（ミ）、レプリカの雲ハリネズミを２つ。
良いリングの殆どは　ミルフィオーレが持っていってしまってね。結局、僕の手持ちは　全て原作通りのものになった。

あと少しで、並盛神社に着く。まだ小さいけど、戦闘音が聞こえる。
今、γ（ガンマ）と戦ってるのは、１０年前の獄寺隼人と山本武のはず…

じゃあ僕も、そろっとγ戦開始といこうかな。

～～～～～～～

γ（ガンマ）side

ボンゴレの嵐と雨の守護者が若返っていたのには驚いたが、実力は聞いてたのより弱い…

それにこいつら、まだまだ甘ちゃんじゃねーか、1発くらわせただけ気を緩ませて…

それにしても、気になることを聞いた。ボンゴレ10代目は生きているのか？

・・・これは、教えてもらわねーとな…

だが、この嵐の守護者、ぜんぜん吐かねーな

それだけ忠誠心が高いってことか…

「そろそろ吐かねーと、とりかえしがつかねーぞ（こんなにボロボロになって…　めんどくせータイプか…）」

「だ…が……」

「何か言ったか？」

「ペッ！」

血を吐きかけられた。

「……（このまま死ぬってか）なるほどそうかい」

持ち上げていた嵐の守護者を投げ捨て、持っていたキューで殴りつける

「なら、ここで死んでいけ。おまえらをうちの白い連中にくれてやるつもりもないんでね」

オレの左右に電狐のコルルとピジェットが浮かび上がり、雷の死ぬ気の炎を発する

「雨の守護者も今楽にしてやる。あばよ」

シュッ　　!!右側から何か来る。　　電狐でその飛んできたものを防ぐ。

!!ドオンッ!!オオ…ズウウ…バチバチ
(このパワー……何者(なにもの)……)

男の声が聞こえてきた
「君の知りたいことのヒントをあげよう。彼らは過去から来たのさ。　僕は愚(おろ)かじゃないから、入れ替わったりはしないけどね」
「(誰だ…)……何やらあんた、詳しそうだな……　だがドンパチに混ぜて欲しけりゃ名乗(なの)るのがスジってもんだぜ」
「その必要はないよ。僕は今、機嫌が悪いんだ・・・・君はここで…　咬み殺す」

浮雲　４２

雲雀恭弥ｓｉｄｅ

１０年前から来た獄寺隼人と山本武にトドメを刺そうとしていた電光のγを匣兵器を使って止めた。
今、彼らを殺されるのは、少し、困る。
彼を倒す役は　沢田綱吉にやってもらおうと考えていたんだけどな…。　やはり、原作通りになるのか…笹川京子の独断行動・・・

ブラックスペルが、今　此処に来る事は　計画の内
入江正一が　上手く彼らを焚きつける事ができた。そういう事だ。

「んん…　　思い出したぜ。　　おまえはボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥だ」
「　だったら？　」

「おまえにはうちの諜報部も手を焼いててね。　ボンゴレの敵か味方か…　行動の真意がつかめないとさ。　だが、最も有力な噂によれば、この世の七不思議にご執心だとか。　匣のことを嗅ぎ回ってるらしいな」
「　どうかな　」
「得体の知れないものに命を預けたくないってのには同感だぜ。で、こいつは、本当には誰がなんのために、どうやって創ったか、真実はつかめたのか？」
「　それにも答えるつもりはないな。　僕は、機嫌が悪いと言ったはずだ　」

「やはり雲雀恭弥は、ボンゴレ側の人間だったというわけだな。いざ仲間が殺られるとなれば、黙って見てはいられない」
「（？　何言ってるの　）それはちがうよ。　僕が怒っているのは、

並盛の風紀が汚されていることだ　」
　雲ハリネズミの匣を用意し、Dランクの雲のリングに炎を灯す
「風紀……？　　まあいいさ、敵の守護者の撃墜記録を更新するのはうれしいかぎりだ。　オレも…男の子なんでね」
　電光のγも、雷のマーレリングに炎を灯し、電狐の匣に注入した
開匣された互いの匣から出た匣アニマルは、死ぬ気の炎を纏いながら空中でぶつかり合う

「ハリネズミとはかわいいが、何てパワーだ・・・　これだけの匣ムーブメントを　よくそんな三流リングで動かせる」
「　僕は　君達とは生き物としての性能が違うのさ　」
パリ…ンッ　　と音を上げ、炎を灯した　Dランクのリングが砕ける
　次は、Dランクよりも　少しだけ石の大きさが大きく　性能も少し上のCランクの雲のリングを指にはめ、炎を灯し、匣を開匣する
「　さあ　僕らも、始めよう　」
匣から出した雲の死ぬ気の炎を纏ったトンファーを構える

　僕と彼はぶつかり合う、空中では匣アニマルが拮抗している。
・・・・つまらないな…　　電光のγ、僕の力量を探る事に意識をさいて、まったく、油断しすぎだよ。これだからロリコンは
〔ロリコン関係ないやん！　　いいやんロリコンでも！　それに相思相愛だから勝手にさせてやって！〕
「くっ　・・・　　ちっ」
　彼はリングの力を使い、雷の炎のシールドをつくった

だけど、そんなもの関係ない。トンファーを使いその炎のシールドを破り、そのまま攻撃をし、殴り飛ばす。

「　立ちなよ。　うまくダメージを逃したね　」

土煙が上がる中、彼が立ち上がる

彼は、攻撃される瞬間に後ろに跳び、攻撃の衝撃を逃していた

「ふ～～　　さすがだ。　もし守護者だったなら最強だって噂も本当らしいな。　　いやー　　まいった。　　楽しくなってきやがったぜ」

彼は、キューで雷の炎を纏ったボールを飛ばし、いくつも連鎖させ、攻撃してくる

顔を目掛けて飛んできたボールを避ける

だが、その避けたボールが他のボールに当たり、連鎖し、いくつものボールが様々な方向から飛んで来た

「あいにく、このショットの軌道には、人が生きられるだけの隙間はないんだ」

「　へぇ、それはどうかな（　あとは追い込むだけ…　）　」

左手に炎を集中して灯し、飛んでくるボールを避けながら、彼の元へ走る

「3番ボール」

左前から飛んできたボールを左手のトンファーで受け止める

「　ぐっ　」　ブシャッ！

トンファーにヒビが入り、受け止めた腕からは血が吹き出る

「ビンゴ」

だけど、そのまま走る

「　たしかに全ては避けきれそうにない。　だから、当たるのはこの一球だけって決めたのさ」

たとえ油断していても、彼の実力は本物だからね。僕は彼と違って

油断はしない
いきなり原作力が働かなくなる可能性もあるからさ。

ボールが飛び回る地帯を抜け、彼のすぐ前までたどり着く
「　もう逃がさないよ　　」
「ふっ、それとこれとは話が別だ」
トンファーを振るうが、Ｆ（フィアンマ）シューズで宙へと飛ばれる
「残念だな」
「　……　（…かかった　）」

（　……！）ガフッ！
彼は口から血を吐き出した
「……な……　なんだぁ…？　　こりゃあ…」
彼の背後には　球体に沢山の針が付いている物体が、その周りには雲のような形をした物体に針が刺さっているものが浮かんでいた。その球体の針に、彼は突き刺さった。電狐も　球体の針に刺さっているのが見える。

「　言ったはずだよ。逃がさないって　」
「あの…　　ハリネズミか…」
「　そう……　　君のキツネの炎を元に　彼がこれだけの針を発生させたんだ。　まるで雲が、大気中のチリを元に発生して拡（ひろ）がるようにね　」
「そーか…　　雲属性の匣（ボックス）の特徴は……　増殖（ぞうしょく）……だったな。だが、こんな量の有機物を増殖させられるなんて、うちの奴からは聞いていない・・・ナンセンスな匣（ボックス）だぜ…　」
「　すばらしい力さ、ゆえに興味深い。　　さあ、終わらせるよ　」
両手のトンファーに炎を灯し、彼にトドメを刺しに走る
そのとき、ガサガサと、近くの茂みから音が聞こえ　そこから沢田綱吉と門外顧問のラル・ミルチが顔を出した

「　遅すぎるよ君達　」
一言(ひとこと)声をかけ、そのまま浮いている雲の形をしているものを足場にアッパーの要領で彼を倒す
着地し、雲ハリネズミを匣(ボックス)に戻した。

「　雷のリングはいらないな（それに、君にはまだ　やってもらうべきことがある　）」

浮雲　４３

電光のγ(ガンマ)を倒した。
途中から来た彼らに振り向き、声をかける。
「　何してたんだい？　沢田綱吉　」
「ヒバリさん!!」
・・・うるさい……
やはり、若いな。　今の彼はこの頃より　大分(だいぶ)落ち着きを持ってる。今との見た目の違いは　身長と声ぐらいか。

「　山本武と獄寺隼人は　その林の中だ　」
「！　　え!?」
過去の沢田綱吉は　林の中へと走っていった
僕と共に来た哲(てつ)が、２人の状態の確認をすませてたようだ。
背後から視線を感じ　目をやると、ラル・ミルチがこちらを見ていた。　・・・・・アジトに入ろうか
「待て、負傷者もいる。今、彼らを抱え　あの距離を引き返し　ハッチに戻るのは危険だ」
「その心配はいりません。我々の出入口を使えば」
ラル・ミルチの言葉に哲が答える

指にはめていたリングを外し、石灯籠(いしとうろう)に向かって歩き、研究施設に入る。
霧系のカモフラージュリング、もっと性能が良いものが欲しかったんだけど、精製度の低いものしか手に入らなかった。
だけど、精製度が低いものをいくつも手に入れて、使うときは　数個同時に使って効果を上げたから、簡単にはバレないように隠すことはできた。
それに　純度の高い僕の炎を使い　その分も上乗せできたから
僕が張ったカモフラージュを見破れる者のは少ないだろうね。

・・・左腕、血はもう止まったけど服が汚れた。着替えて来(こ)よう…

〜〜〜〜〜

研究施設内・ヒバリの部屋

キズを消毒し、包帯を巻いた。

防御用に炎を集中させていたから、キズの深さは　それほどでもなかった

動かしても問題ないね

するとそこに、

「恭さん、今よろしいでしょうか　」

「(その声は哲か、) 開けていいよ　　」

「はい、失礼します」

襖(ふすま)を開けたのは、草壁哲矢

「　彼らは？　」

「山本武、獄寺隼人の両名の治療は終わりました。２人とも命に別状はありません。時期に目を覚ますと思います。沢田綱吉は　その２人の様子を見に行きました。場所は第二医療室(だいにいりょうしつ)です」

「　そう、わかった　」

哲の報告を聞き、立ち上がる

「　行くよ　」

哲にそう告げ、ボンゴレアジトに向かう

〜〜〜

ボンゴレ地下アジト・Ｂ１３Ｆ　第二医療室

声が聞こえてきた。

「だが、今は死ななきゃそれでいいんだ」

「イタイ間違いにぶつかるたびにぐんぐん伸びるのが、おまえ達の最大の武器だからな」

この声、赤ん坊か…

・・・そうだね、今の彼らには　成長力という武器がある。

それをわかっていたからこそ、この時代の沢田綱吉は　過去の自分達を呼び寄せ、白蘭(びゃくらん)を倒す　この計画に協力した。彼には超直感があるから、この計画の成功確率の高さも　わかっていたのかもしれない。

「つーか、赤ん坊のおまえに言われたくないよ!!?　」

「　いいかな。　話(はなし)　」

「ひいっ　　ヒバリさん!!」

「会いたかったぞ、ヒバリ」

「　僕もだ、赤ん坊（　この時代の君はもう居ないから…　　）」

僕的には、その尻尾の生えたスーツが気になるよ。その尻尾、意味ないよね？

「あのー」

ひょこっ　　と、医療室の扉(とびら)から　顔を出すジャンニーニ

「ちょっとよろしいでしょうか？」

「何(なん)だ？」

赤ん坊が問う

「グッドニュースですよ！　　情報収集(じょうほうしゅうしゅう)に出ていた　ビアンキさんとフゥ太さんが帰ってきましたよ」

「！　　フゥ太!!?」「アネキが!!?」

ニッ　　「言っただろ？　ピンチの次にはいいことがあるってな」

「リボーン!!」
医療室に、毒サソリビアンキとフータ・デッレ・ステッレが入ってきた
・・・・・・・。
今この部屋には、僕、赤ん坊、沢田綱吉、獄寺隼人、毒サソリ　ビアンキ、フータ・デッレ・ステッレの6人が集まっている
・・・・・・・・・・・・・。
「ヒバリさんも何か知ってそうだし―「　―これ以上群(む)れれば、咬み殺すよ　」
「ひいいっ!!」
プチッ
バキッ！
「　もういい！　（　＊、ω、）　帰る　」
無理・・・　狭(せま)い部屋に5人も…

情報提供は哲に任せ、僕は研究施設へ帰る。
他の施設から回収してきた匣(ボックス)や書類を仕舞わないと…

浮雲　４４

匣(ボックス)やら書類を仕舞っている途中、沢田綱吉達との会議を終えた哲がが戻ってきた。

哲から会議の内容の要点だけ聞いたあと、休んでくださいと言われてしまい、片付けを任せ休息をとることにした。

にしても、敵アジトの入口をつきとめた、　ね……

入江正一は　上手く情報を流せたようだ。

・・・自分達の力で　情報を得た。そんな言い方のようだったけど、他人が意図的に流した情報を見つけ、持ち帰り、自分達の手柄(てがら)？

・・・笑(わら)えるよ。。

情報がホンモノかどうかは　確かめただろうけど・・・滑稽(こっけい)だね。

まあ　それは置いておこう。どうせ、この事で嗤えるのは僕だけだ。

僕の次の出番は、１３日後

それまでに色々片付けないと。数ヶ月ぶりに帰ってきたから　やることが多い。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

僕が並盛に帰ってきてから１２日後の夜

この施設に赤ん坊がやって来た

話がある、そう言われた。

和室に通し、話を聞く

座布団に座り、向かい合う。

「夜遅くにわりーな、ヒバリ」

「かまわないよ、他ならぬ君からの頼みだからね。　それで、話って何かな」

「ツナの修行についてだぞ。　今のツナは　この時代のツナの足元にも及んでないだろ？　このまま修行したところで短時間でのパワーアップは望めないと　オレもラルも判断してな。　それでだが、明日　ツナにボンゴレの試練をさせようと考えてるんだ。その試練を　お前に任せたいんだぞ」

「ボンゴレの試練、ね。　この時代の沢田綱吉も受けていたよ。・・・・・うん、いいよ。その代わり…」

「ああ、試練が終わった後は　好きにしていいぞ。　それと、・・・生死は　問わねぇ」

「・・・ふうん。それは、彼への信頼からかな」

「・・・・・」　ニッ

その後、少し話をし、赤ん坊はアジトへと帰っていった。

生死は問わない、か・・・そこまでの信頼。それを、少し羨ましいと思っている僕は・・・欲深い…のかな……

・・それよりも明日のことだ。

ボンゴレの試練については、前に少し調べたことがある

この時代の沢田綱吉は、業を引き継ぐことで　その試練を　乗り越えた

その時の彼の力は、試練を受ける前と比べて強くなり、死ぬ気の炎の純度も　一気に高くなっていた。

試練後に初めて戦った時は、驚いたのを覚えている

その時はまだ　ボンゴレリングを砕いていない時で、たしか、継承

式後の仕事の引き継ぎを終えた彼が、並盛に帰ってきた時、だったかな。
帰ってきた彼を見かけたとき、前とは違う感じがしたから　肉弾戦を仕掛けてみた
継承式前にも何度か戦ったことがあったけど、明らかに違っていて・・・強さに、と言うより、心、覚悟の変わりように驚かされた。

１０年前の沢田綱吉・・・君は、この試練を乗り越えることができるかい？
この時代の君に変わって、日常を取り戻すことができるかい？
沢田綱吉の超直感も、僕の勘も、この計画の成功確率は高いと言っているけど、勘に任せられるほど、今の状況は　良くないんだ。
石橋　は叩いて進まないとね。
縛られている僕にはそもそも、叩ける石橋も、迂回できる道も無いから。

浮雲　４５

次の日の朝。沢田綱吉が未来に来てから１５日目

忘れていたけど、そういえば昨日だったね。ＣＥＤＥＦ（チェデフ）の彼がフランスで入れ替わるのは。

まあ　彼の事は今考えても仕方がない、今そこに行ける訳じゃないしね。

１０年前から来る沢田綱吉らと、（時間の差が広がっていないため）コミュニケーションを簡単に取れる様に、過去に戻った時に　彼との力の差が開き過ぎない様に、態々（わざわざ）過去から連れて来ることにした彼。

そして、過去の彼らを未来に送るために動いているのは、過去の入江正一

計画が始まり、沢田綱吉達がその時代で行方不明になり、その彼らを捜（さが）すために日本を数周した笹川了平に十年バズーカを当てた後、漸（ようや）く日本（並盛）に来るであろう、対応の遅いＣＥＤＥＦ（チェデフ）の彼に　十年バズーカを当てるのも、入江正一（彼）の行うべき事。

バジリコン（彼）が早い段階で未来に来ても、その彼を見る家庭教師が居ないため、彼には未来での戦い方を覚えると同時に　強くなってもらうことにした。

戦いの場をもうけるため、入江正一が時間などの計算をし、入れ替わる場所をフランスに決めた

あの頃の彼はもう　基礎が出来ていた筈だから、後は実戦での戦いを身につけてもらう、入江正一はそう言っていたっけ…

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

赤ん坊との約束のため、沢田綱吉達が居るトレーニングルームに向かっている

哲にはやることがあるため、後から来ると言っていた。

エレベーターに乗りトレーニングルームに着いた。僕が来たことに中学生(彼ら)は気づかない。

・・気配も消してないんだ、これぐらい気づいてくれないと…

赤ん坊が銃弾を放った。沢田綱吉は超(ハイパー)モードに変わる。

ふうん、彼の力(ちから)も覚悟もまだこの程度か… さて、これがどこまで伸びるかな。

オリジナルの雲ハリネズミを使う

開匣(かいこう)し、沢田綱吉に向けて放った。

それを飛び上がり避(よ)ける沢田綱吉。だが、避けた先は壁、次の逃げ場はない

!ドオン! と、大きな音を出しながらも、死ぬ気の炎を両手に纏い 雲ハリネズミを受け止めた。

僕は彼に話しかける。

「 気を抜けば死ぬよ 」「おまえは!!?」

「 君の才能を こじあける 」

「赤ん坊から聞いたとおりだ。僕の知るこの時代の君には程遠いね 」

「くっ」

ボ、ボ、ボ、と、彼の額の炎がノッキングしだした

『死ぬ気の零地点突破(ゼロちてんとっぱ)初代(ファースト)エディション』

彼は雲ハリネズミを凍らせる

だけど、それは予想通りの行動

完全に凍らされる前に、雲ハリネズミは増殖(ぞうしょく)していた

増殖した雲は球状に沢田綱吉(彼)を囲む。
彼は増殖した雲を凍らせようとするが、増殖するスピードは早く、追いつくことができてない。

そして出来上がった物は、均等に針が生えている球体
それを作るために多くの炎を灯した雲のリングが1つ、砕け散った。

壁に刺さっていたそれは、徐々に針が壁から抜けていき、音を立て、床に落ちる。

「ッ、ツナ!!?」「10代目!!?」
彼を心配する声。彼らは赤ん坊がどうにかするだろう

彼らには彼らの修行をしてもらうためにも　この球体の説明をする。
「　球針態(きゅうしんたい)。　絶対的遮断力(ぜったいてきしゃだんりょく)を持った雲の炎を混合(こんごう)した密閉球体(みっぺいきゅうたい)。　これを破壊することは、彼の腕力(わんりょく)でも炎でも不可能だ　」

球体の中にいる彼に聞こえるように話す
「　密閉(みっぺい)され、内部(ないぶ)の酸素量(さんそりょう)は限(かぎ)られている。　早く脱出しないと、死ぬよ　」
「ふざけんな!!　てめーら10日ぶりに現れたと思えば　10代目を殺す気か!!　出しやがれ!!　」
忠犬君(ちゅうけんくん)が騒ぐ

・・・分かってないね
「　弱者(じゃくしゃ)が土(つち)に返(かえ)るのは当然のことさ、　第一(だいいち)(この)沢田綱吉を殺す理由があっても生かしておく理由が僕にはない　」
過去の沢田綱吉が死んだのなら、この計画はここまで。僕は僕とし

て動き出すだけだから。

「んじゃあ、オレ達も修行始めるか」

「!!」

「ま、待ってくださいリボーンさん!!?　このままじゃ１０代目が!!?」

「わかってるぞ、だからこそヒバリなんだ。　歴代ボスが超えてきたボンゴレの試練には、混じり気のない本当の殺意が必要だからな」

赤ん坊にたしなめられ、彼らはそれぞれの修行に向かった。

(獄寺隼人は引きずられてだけど…)

さて、彼の試練が終わるまで待とうか。

この彼はどうなるかな…

・・・・・・１００％　原作通りになる気がするのは僕の気のせいかな……いや、そうだったらこれからどうなるかわかるから気が楽になるんだけど……

浮雲　４６

球針態の中から、今まで聞こえていた音が聞こえなくなった。

そして、

「やめろぉぉ!!!」

・・始まったみたいだ。

先ほど来た哲が彼の状態を語る

「酸素量は限界です。精神的にも肉体的にも危険な状態だ」

今まで見守っていたラル・ミルチが怒鳴る

「これでは無駄死に以外の何物でもない！　ただちに修行を中止すべきだ!!」

「　君だろ？　　手にリングをつけて戦うよう沢田綱吉に指示したのは。　　それは正しい、そして、君の求める沢田綱吉になれるかどうか、彼は極限状態の中　器を試されているんだ。　最もこの若さでこの試練を受けた歴代ボンゴレはいないそうだが　」

試練の結果を確かめに赤ん坊も来たようだ。

球針態の中から声が聞こえる

「やめろ‼？　やめてくれ!!」

「いやだ!!　こんなひどいことはできない‼？」

「こんな力なら　オレはいらない!!」

「こんな間違いを引き継がせるなら……オレが…　　オレがボンゴレをぶっ壊してやる!!」

・・やはり、君は君なんだね。

球針態がヒビ割れ、そのヒビから光が溢れ出る

「なんだ⁉？　何が起きている⁉？」

「恭さん　これは⁉？」

「　球針態が……壊れる　」

カッ！　っと、先ほどよりヒビが大きくなった球針態から強い光が一瞬溢れ

!!!ドガッ!!　大きな音を上げ、爆発、爆煙が広がる。

爆煙の中に2つの光が見える。

『Xグローブ Ver・V・R・』

爆煙が晴れたそこには、新しいグローブを手に入れた沢田綱吉が現れた

「ふぅん」「あれは‼？」「超えたな」

「まさか、試練の末の形態だとはな」

「オレも半分自信なかったけどな。　飛躍的なパワーアップと言われて、この試練しか思いつかなかったのが正直なところだ。　あんな答えで試練を乗り越えたのは、歴代ボンゴレでツナだけだろうがな」

「……」

フオ…　ボウッ

沢田綱吉が自身の目の前に構えた拳に　澄んだオレンジ色の死ぬ気の炎が灯った。

「　ワオ（ここまでの変化が…　）」

混じり気の少ない純度の高い炎は澄んだ色になり属性で色が変わる

それぞれ、大空　オレンジ・嵐　レッド・雨　ブルー・　雷　グリーン・　晴　イエロー・雲　バイオレット・霧　インディゴ

そして純粋な炎ほど　属性の持つ特徴をよく引き出してくれる。

「　少しだけ僕の知ってる君に似てきたかな。赤ん坊と同じで、僕をワクワクさせる君にね　」

だけどその彼には、試練を終えてすぐ、これほどの急激な変化はなかったが…

トンファーの匣を取り出す。

「　ここから先は好きにしていいんだろ？　　赤ん坊　　」

「ああ……そういう約束だからな…」

「　じゃあ、　始めようか　」

匣を開匣し、出したトンファーに雲の炎を纏わせる

それと同時に僕は殺気を発する。　その殺気に赤ん坊以外は押されていた。

さて、沢田綱吉。君というものを僕に見せてくれ。

浮雲　４７

さあ、闘(たたか)いを始めよう

「この闘(たたか)いにルールはない。　君が選べるのは僕に勝つか・・・死ぬかだけだ　」

「勝つさ」

「（その意気はよし、）来なよ　」

まずは、沢田綱吉の炎を使った突進を避(よ)ける。

続く、先ほどよりも多くの炎を使っての突進を　逆に近づき、腹部(ふくぶ)をトンファーで叩きつけるというカウンター攻撃をし、空中(くうちゅう)へと叩き飛ばす。

一瞬の内に　吹き飛んでいる彼の背後を取る。

「体が流れてるよ　」

「くっ」

彼が指を動かし、炎を使うのが見えたと思いきや、彼の体は炎に押され、下の方へと飛んで行った。

彼は床に落ち、！ドゴ　ッ!!　と、音と煙を上げている。彼が落ちた場所は、クレーターと呼んでもよいほどへコんでいた。その彼は仰向けに倒れており、落ちた衝撃でダメージを負っている。

「何のマネだい？　」

彼は新しい炎をコントロール出来ていない

彼は立ち上がり拳を構える。

「ねぇ、君。　僕が言ったこと覚えてる？　」

「……　勝つしかないんだろ？」

（・・・来なよ。　君には強くなってもらわないと…　）

沢田綱吉は何かの意図があってか、また同じ動きを繰り返す。炎を使い飛び、高速で突撃して来る。
それを先ほどと同じ様にカウンターを食らわせる。沢田綱吉は数メートル、床を削りながら吹き飛んだ。
ムス…　　原作通り……
僕のポケットから匣を盗る。そんなことをする発想が思い浮かぶなんて……若いってことなのかな。
「君にはガッカリだな。　弱い草食動物には興味ないよ　」
口が勝手に言葉を発する
「直接手をくだす気にもならないよ。匣で…」
盗られたのはレプリカか…
沢田綱吉は「頼む」と言いながら、僕から盗った匣に　炎を注入する。
カチッ　　ド　シュッ!!?
大空属性の炎を纏ったハリネズミは　速いと言える速度で僕に向かって飛び出してきた。
これだよ、沢田綱吉…　今の僕にはない発想・・・やはり君は面白い。　さすがは物語の主人公。
Cランクの雲のリングを指にはめ、もう1つあるレプリカの雲ハリネズミの匣を開匣する。
僕が出したハリネズミは雲属性の炎を纏っている。
双方のハリネズミはぶつかり合い拮抗する。
「気が変わったよ。　もっと強い君と戦いたいな。それまで少し(修行に)付き合おう　」
「・・で、　君達は…　匣がどうやってできたのか　知っているの

？」

ラル・ミルチが答える

「匣は、自然の中にある形から兵器を作れないかと、４世紀前の生物学者　ジェペット・

ロレンツィニが残した３４３編の設計書が元になっている。

だが、そこに描かれていたものは　当時の技術では再現できず、長い間　誰からも相手にされぬまま、ジェペットの死後も設計図は紙キレ同然にそいつの秘密結社の倉庫に、３人の発明家が現れるまで眠っていた。

その３人は同じ秘密結社に所属していた　イノチェンティ、ケーニッヒ、ヴェルデ。

そいつらは匣の動力源にマフィアに伝わるリングから放射される炎が最適であることをつきとめ、数々の技術的問題をクリアし、わずか５年でプロトタイプを完成させ、生物を模したオリジナルの３４３の匣を作るかたわら、新しいタイプの匣を　保存用の匣、道具や武器の匣を発明・開発した。

つい最近まで、やつらは研究資金調達のために今まででは考えられない安価で多くのマフィアに売っていた。

だが、３人の科学者のうち２人が変死。その後　生き残っているケーニッヒは地下に潜り、今も匣の研究を続け　できたものを闇の武器商人に流しているという。

これがオレの知る最も有力と思われる匣の情報の全てだ」

「（それが君の持っている　全て　の情報かは置いておくとして、）

ああ、間違ってはいないよ。　だが、どうして匣ができたかという問いに対する　本質的な答えとは言えないな。

匣を現在に成り立たせた本当の立役者は　ジェペットでも優秀な科学者でもない・・・・偶然だ　」

「ぐーぜん？　それって…何となくできちゃったって…ことですか？」

フータ・デッレ・ステッレの質問に哲が説明する

「こういうことです。　世界的な大発見や大発明には、発明家の身近に起きた偶然のひらめきを誘発してできたものが少なくありません。　ニュートンが万有引力を発見した時のリンゴしかり、ノーベルがダイナマイトを発明した時の珪藻土に染み込んだニトログリセリンしかり、もちろん　それらのミラクルには偶然を必然とする受け手の準備と力も当然必要ですが。しかし、それらも含めてそのような偶然はそう簡単に起こることではありません。」

言葉を引き継ぐ

「　だが、こと匣開発においては、それが尋常でなく　頻繁に起きている　」

「どういうことだ⁉？」

「我々はそれを調査しているのです」

「　知るほどに謎は深まるばかりでね。　沢田綱吉、明日も楽しませてくれよ。・・・　覚えておくといい、大空の炎は全ての匣を開匣できるが、他属性の匣の力を全て引き出すことはできない　」

キイィィ!!

大空のハリネズミは雲ハリネズミに取り込まれ　砕け散る

「　悲観することはないよ。　大空専用の匣も　存在するらしい　」

今日はこれにておしまい。施設に戻る。

ウイーン…

「あ、こ…小僧見なかったっスか？」

「　山本武…　　さーね」

「お！　　小僧!!」

・・・意地悪失敗…

浮雲　４８

あれから　４日目の朝。施設内の一室、広々とした和室にて、僕と哲は会話をする。

「恭さん、マークしていた例の男が動き出したとの連絡がイタリアから」

「　ここへ来るのかい？　」

「まだわかりませんが、油断は禁物(きんもつ)。この情報は沢田側にも提供すべきかと」

「　任せるよ。たしか、あれの写真があったはずだ　」

「へい、ヒバードとの撮影に成功したものが一枚」

＋＋＋＋＋＋＋＋

例の男が動き出した…　ということは今日、黒曜ランドで　クローム髑髏とグロ・キシニアが戦うことになってるはずだ。

（例の男(イコール)＝グロ・キシニアではない）

僕がイタリアに滞在していた時に、眉を寄せてしまうような視線を何度も感じた。

その視線が、何かに憑依している六道骸のものだと気づくのに　それほど時間はかからなかった。

・・・それにしても…彼、　六道骸は　本当に人間なのか疑うよ。

匣(ボックス)アニマルに憑依(ひょうい)するなんて。彼の精神はどうなっているんだろうね。

まあ、それができるということは、匣(ボックス)アニマルにも心があり、普通の動物との違いは、（匣(ボックス)に入るとかを除いて　）その死ぬ気の炎(カ)ぐらいなのかもしれないね。

匣(ボックス)とは、知るほどに面白い物。　それが僕の認識かな。

「うお〟おおい!!」

・・・何処かの鮫が吼えているの声が聞こえた気がした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

沢田綱吉達に情報を提供しに行った哲が戻り、新たに進んだ現状を報告してもらった。

ヴァリアーからの緊急暗号通信が来た事

イタリアから笹川了平が帰って来た事

過去からクローム髑髏が来た事

そして、10代目ファミリーに、5日後にミルフィオーレ日本支部の主要施設を破壊するという指示が与えられた事

「私見ですが、クロームが黒曜ランドにいるという情報は、六道骸からヴァリアーへもたらされたものかと。　笹川了平は、沢田の決断後にここに来ます。その前にクローム髑髏に会っておきますか？」

「いいよ。骸は、そこにはもういないんだろ？」

「へい、おそらく…　それと恭さん、クロームとイタリアで接触していた例の男の身元が割れました。　名はグイド・グレコ　17歳　イタリア人　15人を殺した凶悪犯で、1年前に脱獄したらしいです」

「ふうん、それってまるで」

「へい…かつての骸　そのものです」

＋＋＋＋＋＋＋

この話が出たという事は、彼、もうじき　やられることになるんだろうね…　つまり、クローム髑髏の内臓が無くなる。それと、クローム髑髏の鞄の中に　発信機が仕込まれてるんだったよね。　あとで行くことになるから、その時にでも回収して　利用してあげよ

う。まあ、これらの情報は　前世に得たものなんだけどさ。
前世と今世の情報合わせて1つ言わせてもらうと・・・骸の潜入、計画外なんだよね…

それと、哲が戻って来る前に入江正一から緊急メッセージが送られてきてた。
その内容は『グロ・キシニアがクローム髑髏に何か仕掛けたかもしれないから気をつけて』という人任せなもので、へぇ、って言うところなんだけど・・・・・それ、もう知ってる…

浮雲　４９

「恭さん！　　クローム髑髏が！」
「　！　」

～～～～～～

パリ　ン
「ク……クローム!!「あぁ‼?」
ガラッ
　中が騒がしい部屋の扉を開ける。
「ヒバリさん！」「　邪魔(じゃま)だよ　」
　青い顔をした沢田綱吉を押しのけ、クローム髑髏に近づく
　口もとは吐き出した血が付着し、その腹はべコりとへコんでおり中に何も無いことがわかる。
　彼女に　僕のことを認識させるため、頭を支え　上半身を少し起こさせる。
「　死んでもらっては困る　」
　後ろの方で呆気(あっけ)に取られている沢田綱吉含め、部屋に居た者は外に出た。
　始めよう

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

　クロームをヒバリに任せることになり、綱吉達は　作戦室(ブリーフィングルーム)でそれを待つことになった。
　その部屋に草壁が入って来た。
「クローム髑髏は一命(いちめい)をとりとめました」
「本当!?　　よかったー!!」

その言葉を受けて皆ほっとした。
「どーやってあの状態から持ち直したんだ？」
リボーンが問う
「ボンゴレリングです。雲雀がクロームに促したのは、ボンゴレリングそのものの力を引き出し、己の力で生きること。現在、クロームは自分の幻覚で　失われた内臓を補ってます。」
「そっそんなこと…可能なのかよ⁉？」
「ですが、今の彼女の力では　幻覚は不完全……生命維持がやっとの状態だ…」
「あの…じゃあ…　骸はどーなっちゃったの⁉？」

「・・・　骸の行動については、我々よりも　ヴァリアーにいた笹川氏の方が詳しいのでは？」
「骸からヴァリアーへの指示は一方的なものだったと聞いている。オレはその指示を信じ　行動したが、骸がどこで何をしているのかは　わからんのだ」
「クロームへの力が一切途絶えたのよ。最悪の事態も考えるべきだわ」
「⁉」　ちっ
「そんなぁ⁉？」
「１０代目！　あのしぶとい骸です。まだわかりませんって」
「だが、どっちみち5日後にクロームは戦えそうにないな」
「…痛いな」
「心配するな。クロームの不足分はオレが補う」
　そのラルの言葉にリボーンが口を挟む
「そんなこと任せられるわけねーだろ。お前、今　座ってんのもしんどそうじゃねーか」
「「⁉」」
「リボーンッ」「何を言っている⁉」
　今の体の状態を当てられ、焦る
「無理すんな。顔を見れば、お前の体調ぐらいわかる。お前の体は非・

7▪線(トゥリニセッテ)を浴びすぎてボロボロなんだろ？」
「黙れ！　過去から来たお前に何がわかる！」
「オレだって地上に充満してる非(ノン)・7▪線(トゥリニセッテ)を肌で感じたんだ。お前のやろうとしてることの無謀さぐらいわかるぞ」
「だが、非(ノン)・7▪線(トゥリニセッテ)を放出してるのはミルフィオーレだ!!　奴らを倒さなければこの世界は　正常には戻らない!!」
　その決めつけている言葉にジャンニーニと草壁が現在の情報を口にする
「え～と、それについてなのですが…　どうして非(ノン)・7▪線(トゥリニセッテ)が地上に漂っているのか、まだ原因は特定できていません…　ミルフィオーレとの因果関係は恐らくあると思われるのですが・・決定打がなく…」
「我々も同じく…」

「いや!!　奴らの仕業だ!!」
　少年達は、その強い物言いに気圧される
「コロネロもバイパーもスカルも…　奴らに殺されたんだ!!」
ズキ　ン…
「ぐっ　　う」
　興奮しすぎたラルは倒れてしまう
「ラル・ミルチ!!?」
「大丈夫ですか！」
「さわるな!!　立てるっ」

　駆けつけようとしていた綱吉はラルの言葉で立ち止まってしまう
　その綱吉に了平が近づき、話しかける
「沢田…5日後だが…　これだけ戦力に悪条件がそろっては、おまえが何というか見当がつく…　作戦中止は　オレが上に伝えに行こう」
「ただの貧血だ!!」

「無理するな、ラル…」「いえ、やりましょう」
　その言葉に皆、綱吉に注目する
「敵のアジトに行けば、過去に戻ることだけじゃなくって、骸の手がかりも何かつかめると思うんです。　それに、そのノン・トゥリニセッテのことも　わかるかもしれないし・・・・・でも、どっちもゆっくりしてると手遅れになっちゃう気がして」
「うむ」
「それに・・やっぱりオレ…こんな状況に　1秒でも長くいて欲しくないんだ。」

「並盛の仲間はもちろんだし、クロームやラル・ミルチだって・・・・こんな状況、全然似合わないよ!!?」

　はっ「えと…あのっ　　オレはそんな感じです……けど……」
「よく言ったぞ！男だ沢田!!」
「・・・・ガキが」
「とにかく」
　綱吉は死ぬ気丸を飲み、超モードになる。
「5日しか時間がない。一刻も無駄にはできないぞ」
「はい!!」「だな!!?」

浮雲　５０

幻覚を使い内臓を補うことで落ち着いたクローム髑髏を横目に彼女の鞄の中に入っていた、グリチネの花の形に似た発信機を取り出す。

鞄の中は、砕けた三叉槍(さんさそう)のカケラが散らばっていた。

作戦室(ブリーフイングルーム)に向かうと、中で沢田綱吉が自身の考えを話していた。それを　壁に寄りかかりながら聞く。

原作通りの言葉。これからの事に安心はできるけど、縛られているようでムカつく言葉(もの)。

超(ハイパー)モードの沢田綱吉に頼まれ　トレーニングルームに向かう

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

数時間後

ガ！　ガ　ガガ！　ズガ！　ガガ‼？

僕と沢田綱吉は殴り合っていた。

炎が灯っているトンファーの横薙ぎの攻撃を　身をかがめ避(よ)ける彼、

横薙ぎをした腕を使い、払うように攻撃する

それに当たり、彼は宙(ちゅう)に飛ばされたが、すぐに　柔(じゅう)の炎を使い　飛ぶ体を止める

そこに追撃

だが彼は、剛(ごう)の炎を使い　足から突撃してくる

それを片方のトンファーで受け止め、もう片方で　アッパーをするように攻撃するが、剛(ごう)の炎で　もっと上に飛ばれ　避けられる。

ある程度　距離を離した彼は、また柔(じゅう)の炎で体を止め、まだ空中に

いる僕に向かってくる
それを蹴り飛ばし床に足をつける。
まだ体勢を整えられていない彼に近づき、顎(あご)を狙い下から打ち上げる。
彼が打ち上げられるスピードよりも速い速度で跳び上がり　彼の上にまわる
そして、彼の背(せ)をトンファーで殴り、彼を床に叩きつける。
！ドゴ　オ!!　と彼は落ち、叩きつけられた床は崩れている。

「　いつまで草食動物の戦い方をするつもりだい？　」
「⁉？」
「　君はまだ武器を使っていないよ。沢田綱吉　」
「あっ　　え？」
彼の額から炎が消える
「眠くなってきた、そろそろ帰る　」
「なっ⁉？　　ちょっと待ってください　ヒバリさん⁉？」
僕を引き止める彼をラル・ミルチが止める
「オレの修行から４時間ぶっつづけだぞ。少し休め　沢田」
「・・・は　ぁ…」

僕は哲を連れてトレーニングルームを去る。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ここは財団施設の一室
床は畳(たたみ)、四方(しほう)の壁は全て水墨画のような絵が描かれている襖(ふすま)の広々とした和室になっている。

その部屋には３人の男が居た。
１人は壁際(かべぎわ)（襖(ふすま)の手を掛ける所の前）に座っており、２人は部屋の中心近くで　少し距離を取りながら横並びに立ち、片方は顔ごと、も

う片方は視線だけ向けていた。
立っている2人の間には、燃えるような気と、冷めるような気が流れている。
「ならば、拳と匣を交えるまでだ!!」
「　僕は構わないよ　」
立っている男の1人は、この施設の主である雲雀恭弥、もう1人は晴の守護者である笹川了平
笹川了平はここへ、雲雀とこれからの事を話すために来ていた。
だが、彼が連れてきた5歳児達を雲雀が自分のテリトリーに入れるわけもなく・・それが気にさわった彼が雲雀に意を唱え、不穏な空気になっている。
「極限に止めるもの　何もなし!!」
「いいえ、さっきから私が止めてます！　くだらない理由で守護者同士がバトルなどやめてください」
「どこがくだらぬ理由だ!!　オレは屋敷に入れるのにチビ達は出入り禁止とはどーいうことだ!!!」
草壁哲矢が止めるも止まらない
「　本当は　君だって入れたくないんだ。　君を見てると闘争心が萎える　」
「何を!!　極限にプンスカだぞ!!!」
「わかりました、わかりました。　私が向こうのアジトで　ランボさんとイーピンさんと遊ばせてもらいます。それで勘弁してください」
「しょうがない…　では1ラウンドだけだ」
「　僕は構わないよ　」
「ダメです!!?　話し合いをしてください!!?」
そう言い残し、草壁は部屋を出て行った

浮雲　51

哲が部屋を出た後、諌(いさ)められた彼は　本来の目的を思い出し　戦うことをやめ、僕はここで戦って部屋が壊れることが嫌だったので戦うことをやめた。
話し合った内容としては、彼や僕が持ち帰った情報の事などで、今回の作戦での本部の動きや、過去から来た彼らの事、自分の妻の事などのいらない話も聞かされた。
そして最後に僕から、僕の施設のサーバーに流れ込んでいた敵の情報ファイルの情報を記憶装置にコピーし、それを彼に渡した。
それを渡された彼は焦りながらアジトに戻って行った。
なぜこれを先に言わん!!
とか言われたけど・・・ただの仕返しだよ。僕の前で惚気(のろけ)た、ね…

次に話し合うことになるのは　作戦の前日のはず。
その前に、回収した発信機を他の場所に移(うつ)しておかないと
場所は生活スペースから離れた場所で、数百人は簡単に入れる広さがある所・・・
２km(キロ)ほど離れた場所に、倉庫予定地があるはず、あとで回収するとして今はそこに置いておこう

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

３日後
ここは3日前に笹川了平と話し合いをした部屋と同じ場所

カ…コン
何となく設置した鹿威(ししおどし)しの音が部屋に響く
今　この部屋に居るのは、僕こと雲雀恭弥、草壁哲矢、笹川了平、ラル・ミルチの４人
皆(みな)で　明日(あす)の事を話し合うため集まった。

僕は少し距離を取って座っている

笹川了平が口を開く

「いよいよだな。ヒバリ！　明日(あした)は我ら年長組、いいとこ見せんとな‼？」

「　いやだ　」

！ガチャン‼？

「落ち着いて笹川さん！」

「放せ!!　中坊ん時から成長せん男め!!」

湯飲みを倒しながら　こちらに突っかかってきた彼を　哲が羽交い締めで止めた

君もそれほど成長してないと思うけど。それに

「　僕の目的は、君達と群れるところにはない　」

「くっ」

「ラル・ミルチ。あなたは明日(あす)　どうするのですか？」

「無論、出る。　戦力は多いに越したことはないからな」

「その体調で無理をするな‼？　小僧だってアジトから出るのを断念しているのだぞ‼？」

「　死にたきゃ死ねばいいさ（勝手にしなよ）　」

「ヒバリィ!!　お前には思いやりの心はないのか!!」

「笹川さん！」

またもや吠えた彼を　哲が抑える

するとそこに、

「もりあがってるな」

帽子を取り、着物を着た赤ん坊がやってきた

「どーなんだ、草壁。　明日(あした)の突入作戦のシミュレーション結果ってのは出たのか？　そのためにオレを呼んだんだろ？」

「はい、明日(あした)の作戦の成功率をハイパーコンピュータで試算(しさん)しました。

敵施設の規模から人数を割り出し、ミルフィオーレ構成員の平均

戦闘力を入力し、他の要素をかけ合わせた結果・・・・成功率、わずか０．００２４％　　。これはラル・ミルチの戦力も含めて　高く見積もった数字です…　　他の要因による補正も考えられるが、どれもこちらに旗色の悪いものばかりだ」
「ま、そんなもんだろうな」
「ちなみに、ヴァリアーは成功率が９０％を超えなければミッションを行わないと聞く。もっとも、ヴァリアークオリティを持つ彼らの基準ですがね」
「一流（いちりゅう）のプロってのはそういうもんだ。確実性を最優先とし、無謀な賭けなどしない……」
「ふっ、奇跡でも起きなければ成功しない数字か…　　沢田達には黙っておけ、士気にかかわるぞ」
「今更ショックを与えても、他の選択肢はないのだしな…」
「賛成です……」
「ってより、無意味な数字だな」
　赤ん坊のその言葉に　僕以外の３人が反応する
「完成されたプロなら　戦闘力や可能性を数値化することに意味があるだろう。　だが、伸びざかりのあいつらを計算に当てはめるなんてバカげてると思うぞ。　　数値化できねーところに、あいつらの強さはあるからな」

浮雲　５２

話し合いが終わり彼らは彼らのアジトに戻って行った。

そしてまた、入江正一から緊急メッセージが送られてきた。
急いでいたか、隙を見てたからか知らないけど、メッセージの文字が所々（ところどころ）抜けていたり誤字だと思われる所がいくつかあって、焦る理由は予想できたけど、イラッときた。
読めない部分もあったけど、前世（まえ）の情報と合わせ、読み取ったところ、敵が1人増え、そいつが計画の害になるなら倒してほしいという事と、ボンゴレアジトの位置がミルフィオーレにバレ、攻撃を仕掛ける事になってしまったという内容だった。
増えた敵というのは麻呂眉（まろまゆ）こと幻騎士（げんきし）だろうね。
まあ、僕にとってそれは計算内だったから別にいいけどさ。
アジトバレの攻撃に関しては、敵が来るのは夜明け頃になるだろうから、その前に睡眠をとっておこうか

さて、もうすぐだ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋

夜明け前・風紀施設の自室

カ　カカ　カ
ん…なんだい？
今まで寝ていたのだが、廊下から聞こえる音で目を覚ました。
立ち上がり、襖（ふすま）を開けて廊下を見てみると　1匹の猫がフラつきながら歩いていた。

この猫・・獄寺隼人の匣（ボックス）兵器・・・また逃げ出したのか
この時代の彼も、よく逃げられて　探し歩いていたな

猫に声をかける
「　君、こんな所にまでどうしたんだい？　」
「にゃ　お～ん」ゴロゴロゴロ
猫は僕が出した手に擦り寄り　喉を鳴らす
「　酒臭いよ、君。　酔ってるのかい？」
「にょおん」
ハァ、もう数時間で作戦が開始するのにね。まあ、ちょうどいいか。
猫の後ろ首を掴み上げ、彼らのアジトへ向かう

というかこれ、原作にあったよな…

～～～～～～～～

真っ暗な廊下を歩く、ガリガリガリ　と　猫が壁を引っ掻いて暴れている。
彼らの寝室スペースに近づくと、部屋の中から、赤ん坊、沢田綱吉、山本武が出てきた
「　酔っぱらって僕の所まで来たよ　」
「ヒバリさんと獄寺君の猫ー!?」
うるさいよ
「ああっ‼？　てっきり匣（ボックス）に戻ってっかと」
獄寺隼人も部屋から出てきたのを見て、猫を手放す
「何してやがったんだ…瓜（うり）‼？」

・・・・この時代の君と同じ名を付けたんだ

目の前の彼は猫に引っ掻かれている
「　君達…　風紀を乱すとどうなるか知ってる？」
トンファーを出して脅すと、赤ん坊以外は焦り出す。でも、
「　…眠い　　…今度ね　」

「ま…待てヒバリ‼?」
来た道を引き返していると、獄寺隼人に声をかけられた
「あ…あんがとな…。いずれ、この借りは返す…ぜ」
「　期待せずに待つよ。獄寺隼人　」
「なっ　期待せずだと⁉?」
「あ、ヒバリさん！　明日…　一緒にがんばりましょうね」
「　いやだ　」
沢田綱吉の言葉を一蹴(いっしゅう)する
「　僕は死んでも君達と群れたり、一緒に戦ったりするつもりはない。強いからね　」
「おやすみ」
そう言い今度こそ施設に戻る

そろそろ準備をしようかな

浮雲　５３

太陽が顔を出し、辺りを照らし始めた時間

土竜型の匣（もぐらボックス）兵器で地面を掘っていくと、土の中から鉄板が現れた

「敵アジトの天井部分と思われる防壁を発見!!?」

「Ｂ（ビー）・Ｃ（シー）班も同じく防壁を確認!!?」

「これより、ボンゴレアジトに攻撃をしかける。カウント３（スリー）で防壁を爆破し、一斉に突入せよ!!?」

「了解（ラジャ）」

「カウントを開始する」

「３」

「２」

「１」

「爆破!!」

防壁にしかけた爆弾をカウントに合わせ爆破させる

爆弾による火柱が３つ上がった

「全隊突入!!」

その声と共にブラックスペル、ホワイトスペルの双方が開けた穴へと飛び込んでいく

「ボンゴレリングの回収を優先せよ。守護者は生け捕りだ」

「抵抗する場合はいかがなさいますか」
「・・・・・・・・・殺せ」
「了解(ラジャ)!!?」

だが、爆煙が晴れた時、兵隊達は気づく
「なんだここは…?」
「大広間か……?」
その空間には何も無い、ただの四角い部屋

すると、ガシャン!　　と、入ってきた穴が　穴の周りから伸びてきた棒によって格子状に塞がれた
「なっなんだ!!?」

格子の上に何かがいる
「　弱いばかりに　　群れをなし、咬み殺される　　袋の鼠　　」
「わ!!?　罠だ!!」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

雲ハリネズミとトンファーで、数百はいる敵を咬み殺していく
雑兵と言ってもリングと匣兵器を所持した相手、こちらもリングを消費する。
だが、所詮は草食動物。僕のような肉食動物に　傷を負わせることなどできない

片が付くのに、それほど時間はかからなかった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

敵から送られてきた偵察部隊(ていさつぶたい)を咬み殺す

こいつらの姿を使い　ミルフィオーレ基地に潜入する
基地に向かうのは、僕、草壁哲矢、クローム髑髏、そして　哲の背負うリュックに5歳児達が入ることになる。

潜入できるまでは　おとなしくしてようと思う…

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

入江正一ｓｉｄｅ

「幻騎士と山本武の接触も成功したな。　γ（ガンマ）は相当　負傷しているようだが、晴の守護者　笹川了平を倒し、嵐の守護者　獄寺隼人も満身創痍に追い込んだんだ。充分に役割を果たしたと言える。　やればできるじゃないか。　残りの鼠など、幻騎士さえいればどうとでもなる」
　そんな独り言の多い入江に部下から報告が入る
「入江様、司令室より報告が２つ」
「何だ？」
　目の前の大きな画面に通信映像が映る
『入江様！　ボンゴレアジトから偵察部隊が帰りました』
「帰った？　今まで報告はなかったのか？」
『雲雀に感づかれ　無線を破壊された模様です。ニコラ隊長に代わります』
　画面が移り変わる
　そこには　負傷し、包帯を巻いている男が3人映っている
『入江様、雲雀恭弥との戦闘は継続中‼？　こちらの負傷者は相当な数です。　ですが、現時点ではこちらが優勢‼？　雲雀を倒すのは時間の問題です‼？』
「そうか、相手を考えれば満足すべきなのかもな…　ご苦労…休め」
　その通信を切る

「2つ目の報告は何なんだ？」
『ハッ』
『スパナ氏のモスカの戦闘記録（ブラックボックス）を調べたところ、スパナ氏の言っていた　ボンゴレ10代目が用水路に落下したというデータはありませんでした』
「・・何だと？　　スパナは何と言っているんだ？」
『それが、連絡がつきません！』
「どういうことだ⁉？　　スパナを叩き起こしてでも事情を聞け‼？」
「もうやってるよ、大将。ところが奴（やっこ）さんの部屋はもぬけの殻だよ」
　画面に新たな映像が映る
　そこは酢花（スパナ）。と文字が書かれた絵が飾ってある部屋、その部屋にいる白色の服を着た2人
「アイリス‼？　　ジンジャー・ブレッド‼？」
『しっかし、驚いたよ。この基地がビックリパズル構造になってたなんてさ』
「嫌味なら後にしてくれ‼？　　スパナはどこだ⁉？」
『この基地内のどこかにボンゴレと共にいる可能性が高いです。ボンゴレをかくまっている可能性もある』
「なぁ⁉　　スパナが裏切ったというのか⁉？」
『私達は今から奴とボンゴレを捜索するつもりだよ。了解してくれるね？』
『もし、スパナ氏が寝返っていた場合はどうします♪』
「・・・・・抵抗するようなら殺してもかまわない。白蘭さんには僕か報告しておく」
「やっぱ、この基地の大将はあんたしかいないね♡（chu）」

浮雲　５４

哲達と別れ、ミルフィオーレ基地を　記憶していた地図の通りに歩く。道が無い場所は壁を壊しながら進む

またもや　壁に当たった
雲ハリネズミの匣をＤランクのリングで開匣する
リングは砕ける
巨大な球体になった雲ハリネズミに　壁に体当たりさせる

ビ　キッ！　　ゴゴゴゴ　ゴゴゴ

!!ド　オオッ!!!

空いた穴から隣の部屋に入る
隣の部屋には数本の剣を腰に差している男がいた

「（幻騎士…）ああ、君…　丁度いい。　白く丸い装置はこの先だったかな？」
「ボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥か…。　その問いに答える必要はない。　貴様はここで死ぬのだからな」

雲ハリネズミは匣に戻る。

相手が匣を開匣すると、周りの景色がジャングルのような　植物だらけのものに変わっていく

「ふうん、どうやら君は霧の幻術使いのようだね。　君に個人的な恨みはないけど、僕は術士が嫌いでね。　這いつくばらせたくなる」
Ｃランクの雲のリングを指にはめ、炎を灯す

幻術対策として、炎を薄く広範囲に放射し、反射による炎の揺らぎを感知させる。
ほとんどの術師は　目に見えない攻撃を得意とするからね
幻術は五感や機械を騙せるけど、風や炎、水何(なん)かは、意識せずには術の影響下に置くことができない、そこまで意識する術師はほとんどいない、まあ、一度ネタが割れれば対策されるものではあるけどさ。

「雲雀恭弥…　ボンゴレ最強の守護者だという噂は聞いている。それが真(まこと)かどうか、確かめよう」

放射している炎を切るように動くものを感知
‼?　何かくる
跳び上がりそれを避ける
もといた場所が爆発した
次は左側から
宙(ちゅう)では避けられない、匣(ボックス)を開匣(かいこう)し、増殖させた雲を盾にしてそれを防ぐ

「よく見えぬはずの攻撃を…　まぐれか?」
着地した僕に、幻騎士は霧の炎を全身に纏い、剣を2本構えながら向かってくる

だけど・・・違う…

トンファーの匣(ボックス)を開匣(かいこう)、上からの攻撃を片手で防ぐ
「幻術には詳しいんだ。　嫌いだからこそね」
さきほど開匣(かいこう)した雲ハリネズミが幻騎士に突進し、壁にめり込むリングが砕ける

「行こう」

移動しようと思ったが

キュウウ‼？

！ド　オッ‼？

雲ハリネズミが風船のように割れ、幻騎士が中から出てくる

出てきた幻騎士は足を天井にある蔦(つた)に絡ませ　逆さまになる

「なるほどできる。貴様ならオレの好敵手になりえるかもしれんな」

無傷な幻騎士が話しかけてきた

「それはどうだろうね。　僕の好敵手には　そう簡単にはなれないよ。　君にその資格があるかは、まず、その横行(おうぎょう)　な霧の幻術を解いてからだ　」

一度、雲ハリネズミを匣(ボックス)に戻し、新たにリングをはめ　２つのレプリカ雲ハリネズミの匣(ボックス)を開匣(かいこう)する。

出てきた雲ハリネズミに　幻覚でできた周囲の植物を破壊させる

「君の幻覚は　頭の中の想像を映像化したものだ。映像処理が間に合わない程の負荷を君に与えたら？　」

雲を足場にし、高い位置にいる幻騎士を攻撃する

一撃一撃に力を置くのではなく、手数を増やしての、意識を割かせるため攻撃

雲ハリネズミ達は幻覚の植物をドリルのように削っていく

互いに互いを弾き、距離を取る

「・・・綻(ほころ)びはじめたようだね。　これが君の匣兵器　」

ボトボトと、何かが落ちてくる

「幻海牛(スペットロ・ヌディブランキ)。姿を見たのはおまえが初めてだ。　そして、最後の人間となる」

落ちていた海牛が空中で停止。一斉に僕に向かって霧の炎で姿を隠しながら飛んでくる

新たなリングをはめ、炎を薄く広範囲に放射し、避ける
幻覚を構築する海牛自体が　破壊力を持った誘導兵器…
次の攻撃を2つの雲ハリネズミで防ぐ
雲ハリネズミは匣に戻り、リングは砕ける
「読めたぞ、リングの炎を　レーダーの代わりにしているのだな」
・・・・・残るリングはCランクが2つに　Dランクが1つ…時間もない、あれをやろう
「だが、タネさえわかれば恐くはない、対処すればいいだけの話だ」
「いいや。もう　その必要はないな。　君は　かつて味わったことのない世界で、　噬み殺してあげる」
残りのリングを指にはめ、3つ同時に炎を灯す
その炎を全て、1つの匣(ボックス)に注入する。
無理矢理の注入のため、匣(ボックス)にはヒビが入っていく
「匣(ボックス)を殺してしまわぬように炎を注入するのが難しくてね」
グシャッ　っと、匣(ボックス)は注入口が潰れ、パリンと砕けてしまうが、匣(ボックス)中からは　光を放ちながら　半透明なハリネズミが姿を現す
「裏(うら)　球針態(きゅうしんたい)」
半透明なハリネズミは僕を包みながら大きくなっていく
これから行うことを察したヒバードは胸ポケットから飛び立つ
ハリネズミは、幻海牛、鋼鉄の柱、倒れている山本武を弾きながらどんどん大きくなる
弾かれてないのは、僕と彼のみ

「戦う人間以外は、展開される匣兵器もすべて排除する、絶対遮断空間。それが、裏球針態。密閉度の高い雲の炎で作られたこのドームは頑丈にできていてね。長時間僕に背を向けて破壊のみ集中しなければ脱出はできない」
「なるほど…これで幻海牛の幻覚を封じられたということか……!??うっ」
幻騎士は急な環境の変化にうめく
「球針態をつくる時は雲の炎の燃焼に多大な酸素を消費するんだ。そして、これを維持するためにも酸素は急速に減り続けるよ」
「・・・・・四方を囲む無数のトゲと酸欠状態でのデスマッチか」
「手っ取り早く終わらせたくてね。スケジュールがつまってるんだ」

「うそぶくな。貴様の戦い方を見て気づかぬとでも？　この空間は リング不足を補うためのものだ。リングを使い果たし、匣兵器での戦いに不利になる前に残りのリングを全て使いこの空間をつくり、肉体での戦いに持ち込む魂胆だな。よほど体術に自信があると見える」
嘘はついてないよ。君の考察は４分の３正解
「よかろう…。だが自信があるのが自分だけとは限らんぞ。誤解しているようだが、幻海牛の幻覚は剣技を補うものではない。その強すぎる我が剣を隠すためのものだ」
「ふうん、つまり、これでやっと君の本気が見れるわけだ」
「貴様のもな」

幻騎士が向かってくる
「奥義・四剣」
ビュ！オッ!!?
彼は足で剣を使い攻撃をくり出す

上段の剣をトンファーで防ぐ
両手でもそれぞれ剣を持ち、攻撃してくる

お互い弾かれる
弾かれた勢いそのままに　トゲの先端に頬が触れ、血が垂れる

戦いは続く

打ち合い、斬りつけ、防ぎ、叩き飛ばす
だが　双方とも傷つくことはない

幻騎士は幻術で構築した　鏢（ひょう）のような物を投げつけてくる
ニッ
僕は構築した物を見て　トンファーの仕掛けを使う
トンファーから羽型の刃が立ち上がり　疾風（しっぷう）を起こしトンファーが回転する。一種のシールド
シールドに弾かれ、投げつけられた物は地に落ちる

双方、一旦距離を取る
幻騎士の息は荒い

「　だいぶ息が上がってきたね　」
ハア　　ハア「なぜ、笑っていられる」
「　？　」
「裏　球針態とやらは　匣兵器こそ封じたが、リングの力を封じてはいない。リングを持つ者と持たざる者の力の差は知っていよう。体技がほぼ互角だということは今わかったはず。　　リングを持たぬ貴様に勝機はないのだぞ」
「　確かに君の強さは予想外だったよ。君のおかげでスケジュールに

も狂いが出たしね。　でも、それ以上に久しぶりに　血をしたたらせた姿を見たくなるほどの獲物に出会えてうれしいんだ。これで強力なリングがあれば文句はないんだけどね　」

幻騎士はリングに炎を灯し、こちらに向かって走る
「よかろう、手加減せずに葬ってやる」
僕も距離を詰める
武器を合わせたとき、僕のトンファーの先が焼き切れた
「硬度の低い霧の炎も　一点に集中すれば、鋼鉄を焼きちぎるなど造作もない」
ニッ「　知ってるよ　」
幻騎士は方向転換をし、またこちらに向かってくる
何度も何度も打ち合う
その度にトンファーが焼き切られ　短くなっていく
防ぐ物が無くなっていき、体が斬りつけられていく
「　いいね　」
「貴様…死を望んでいるのか？」
「　どうして僕が？　　咬み殺されることになるのは君なのに　」
「⁉？　　この状況で何を言っている⁉？」
最後のトンファーも弾かれた
「（　こんな獲物を咬み殺せる彼が　）うらやましいな　」
「くっ」
幻騎士は恐怖する
雲雀の目に、雲雀恭弥という男に

「えぇい!!　　死ねい!!!」
トドメを刺すため、左右同時に剣を振り下ろす

まかせたよ…

浮雲　５５

「えぇい‼？　死ねぃ!!!」
雲雀恭弥を斬りつける

ズ　バッ!!

そうすれば、裏　球針態と言った匣兵器でできたドームが崩壊を始めた

ハア　ハア
殺(と)った…
確実に雲雀を殺した
これでボンゴレも終焉だ…

あたりにはドームの残骸が残り、煙が漂っている

そこに　頭上から声が聞こえてきた
「ミードーリー　タナービクー　ナーミーモーリーノー　ダーイナーク　ショウーナク　ナミーガーイイー」

雲雀のトリか…

その鳥を目で追っていると、誰もいないはずの煙の中から出てきたものに　羽を下ろした

「!!」

煙が晴れていく・・・

「　ふぁ～あ。さわがしいなあ…。　君…誰？　僕の眠りを妨げ

るとどうなるか知っているかい？　」

・・・あどけなさの残る顔…　あの姿・・・１０年前の雲雀恭弥‼？

＋＋＋

者もいない、そりゃあ原作と同じになるか…
そのあとあまりにもしつこい跳ね馬を咬み殺して、その日のバトルは終わった

次の日
跳ね馬は用事があるようで　バトルができないと事前に聞いていたから、今日は朝から並中で　風紀委員会の仕事をしていた。

昼頃
仕事が一旦終わり、1人　屋上で昼寝をしていた

しかし、

⁉?……ワオ…
瞬きのように、パッ　と視界が明るくなると　周りの景色は先ほどいた場所と全く違っていた。
つまり、

目を覚ましたら俺は、見たことはある神社の前に立っていた。
既視感(きしかん)…

目の前には、それほど大きくない神社があり、俺が立っているとこの左右には、
俺の背の1．3倍くらいの大きさの石灯籠(いしとうろう)が置いてある。

手を見てみたが、いつも通りの　今世の手だ。
辺りを見渡してみると　多くの木が生えていて、石階段が下の方に

続いている
よく見ている場所、ここは並盛神社だということがわかった。

俺は、自分が何故ここにいるかは　わからない
並中の屋上で昼寝をしていたはずなんだが・・・
夢遊病でも発症したか？　　俺が？笑える

だが、今のこの状況、似たような事は前にもあった。
それに、この状況、前世で読み覚えがある。
そう…今の俺はてんｉ「ただの夢じゃ」

・・ん？「今のおぬしの状況は屋上で昼寝をし、夢、つまり精神世界でワシと再び相(あい)まみえた。という状況じゃな。」
聞き覚えのある幼い声が聞こえ、神社の方に目をやると、賽銭箱の上に　金髪ツインテールのロリっ子が座っていた。

「幼いとは何じゃ、幼いとは。前は可愛いと言ってくれたのにのぉ。おぬし、ちと　冷たくなったんじゃないのかぁ？」
「　あの時から約１０年経ってるんだ。考え方ぐらい変わるさ　」
俺は懐かしむように　ロリっ子を見る
ロリっ子はニヤリと笑いながら俺を見ている
「そうじゃのぉ、人の時の流れは速い。　前あった時、おぬしは一度も口を開かんかった。それが、今はこうしてワシと話ておる。　いや～おもしろいのぉ」
「　それで？　・・・・・・・…何の用があって現れたんだ、もうすぐ未来に飛ばされるはずなんだが　」
「おぬし、今ワシのことを何と呼ぶかで迷ったじゃろ」
「　うるさい、咬み殺すよ　」
賽銭箱の上で、歯を見せながらニヤニヤしだしたロリっ子にイラっとし、トンファーを構える

「まったく、せっかちなのは変わっとらんようじゃの。前もパッパパッパと話を進めてていきおったし」
「・・・よ　う　け　ん　は？（この年寄り、話が長い…）」
「だーれが年寄りじゃ！」「　いや　年寄りだろ（色々と滲み出てるし…）」
「むぅ～！」
　ロリっ子は俺に小走りで近づいて来て、ポカポカと効果音が聞こえて来そうな感じで叩いてくる
　無論、痛みは無い

～しばらくお待ちください～

「それで何じゃが。今回、こうしておぬしの前に現れた理由はな、おぬしと久しぶりに話をしたかったから何じゃよ」「　帰っていい？　」
「いや⁉？待つのじゃ⁉？　それだけでは無い！当たり前じゃ⁉？」
　ロリっ子は涙目になりながら俺を睨みつけてくる
（　見た目だけは可愛い　）
「うぐっ　・・オホン！　！　もうひとつの理由としてはじゃな、おぬしに聞いておきたい事があったから何じゃよ　むしろそれが本命じゃ」
「　聞いておきたい事？　」
「そうじゃ。おぬしがこれから行（ゆ）く未来世界。その世界のおぬし、つまり、パラレルワールドに居る　雲雀恭弥に成り代わった１０年後のおぬしの記憶に関してじゃ」
「　記憶に？　・・・・・それより、未来編の雲雀恭弥は俺何だな　」
「そうじゃ。ぅぁりあーと戦った後から分岐しとる。口調などが雲雀寄りになっとるよ」
「　ふうん。それで？　記憶ってどういう事だい？　」
「お、今のは雲雀ぽかったぞ。　記憶というのはじゃな、原作にあっ

たじゃろ？　未来編終わりに　あるこばれーの　が　一緒に戦った仲間達の未来の記憶を過去の者に伝える、というやつじゃ。ワシの力で、未来のおぬしの記憶を　今のおぬしに与えようかと考えているのじゃよ」
「　未来の記憶を僕に？　」
「そうじゃ。ぅぁりあーとの戦いが終わってから　おぬしと入れ替わるまでの記憶をの」

「　ふぅん…　」
「どうじゃ？　原作では描かれていない視点を楽しめるんじゃぁないかの？　その世界のおぬしは、けっこう楽しんでいたようじゃしのぉ」

「　・・・いらない　」
「？　何と言ったんじゃ？」
「　いらないと言ったんだ。俺にその記憶は必要ない　」
「そ…そうか？　おぬしなら欲しがると思ったのじゃがのぉ？」
「　そうだな・・欲しいとは思うけど、俺の何かが変わってしまう気がしてさ…　やめとくよ。　記憶の範囲もわからんし　」
「そうか・・・わかったのじゃ」
「　いや、欲しいは欲しいんだけどさ・・・ほら、今と戦い方も違うし、抱く感情とかも変わるだろ？　それに経験した事が違うなら、もうそれは俺じゃねーし・・・一言で言えば、何かヤダ　ってことだな　」
「嫌、か…　まあ、ワシもムリにとは言わんよ」
（　ん～もったいない気もするけど、なんかヤなんだよなぁ…　）

「お！　現実世界で　動きがあったようじゃ」
「　動き？　」
「そうじゃ。どんな動きかというとな、おぬしに向かって　１０年バズーカが撃ち込まれたというものじゃ」

「　は⁉？　」
「じゃーのー」
　ロリっ子はこちらに手を振ってくる
「　ま！・　」シュンッ！
　ロリっ子の目の前から雲雀が一瞬にして消え去る
　どうやら未来世界に飛ばされたようだ。

　残されたロリっ子は目を細め、雲雀が居た場所を睨みつけてた
「・・・行ったようじゃの…」
　ハアー
　険しい表情のまま深いため息をつく
「あそこで素直に記憶を欲しがっていればいいものを・・・少しでも拒絶の感情があれば、記憶の統合は出来ん…
　目的の為には、あやつに1分でも、1秒でも長く、人生の記憶を与えねばならん……」

　ハアー
　また、険しい表情のまま深いため息をつく
「・・・・死んだ後にでも、くっ付けておこうかの…」

　ロリっ子は空を見上げる
　空には、小さな雲が1つ、漂っていた
「うむ、あやつが始まったこの場所。　あやつが転生するごとに雲を増やしていこうかのぉ。あやつはいつ気づくじゃろうか？」
　そんな時　テレパシーが届いた
『おば様～？　どこですか～？　おせんべいお持ちしましたよ～』

「ほう！　煎餅か！　」『今行くのじゃ。それと　おば様と呼ぶなといつも言っとるじゃろ！』
『お待ちしております！　おば様！』『おい』

浮雲　５６　　１０年前雲雀来る！

ガラガラガラガラ…

煙に包まれながら聞こえる、何かが崩れる音

あのロリっ子・・・そういう事は先に言えっての…
あと、俺にいじられてする　ああいう反応、ゼッテーわざとやってるよなあれ…

「ミードーリー　タナービクー　ナーミーモーリーノー　ダーイナーク　ショウーナク　ナミーガーイイー」

声が聞こえた方を見上げてみると、黄色い鳥が飛んでいた

！　１０年後のヒバードか？　　少し大きくなった気がする…
同一個体かは判らんが

止まれるように手を出してやると、そこに止まってくれた
うん、ヒバードだ

煙が晴れていく

「　ふぁ～あ。さわがしいなあ…。　　君…誰？　　僕の眠りを妨げるとどうなるか知っているかい？　」
体は今まで寝ていたから　あくびが出た

立ち上がり　瓦礫の上から降りる
目線の先に立っているまろ眉がこちらを見ている

周りには　所々にトゲが付いている瓦礫が散らばっていた
足下や壁には植物が生えている
壁の一部は何故か溶けている所がある

まろ眉こと幻騎士に近づき話しかける

「ねぇ、君。　並中なら　その眉毛は校則違反だ　」
「‼?」
「こ…これは…」
「　まあ　いいさ。　しかし、なぜうちの行方不明だった生徒が倒れているんだい？　」
「！」

「・・・・・山本武はオレが屠った」
「　ふぅん　　君が…。　　じゃあ話は早いね　。君の行為を並中への攻撃とみなし、僕が制裁を加えよう　」
トンファーを構える。雲のボンゴレリングは指にはまっている

「　いくよ　」

幻騎士に向かって走り出し、トンファーをくり出す
だが、ガツッ！　と、幻騎士の霧の炎を纏わせた柄での攻撃をカウンターにくらい後ろに吹き飛ばされた
吹き飛ばされた俺は、ドオンッ！　と、背後にあった瓦礫にぶつかる

ガラ　ガラ…

ムッ　ス～
眉間にシワが寄る
野郎……

「刃(やいば)ではなく柄で倒そうなんて、ずいぶんふざけてるね　」

立ち上がり、出てきた鼻血を拭う

あいつが油断して　攻撃時の踏み込みが浅くてなって助かった…
大人雲雀さんと同等の体術＋死ぬ気の炎を使った攻撃を鼻血程度で済ませるこの肉体スゲー。たしか頭蓋を割るつもりの攻撃だったんだよなこれ…

幻騎士が話しかけてくる
「貴様、この時代の戦い方を知っているか？」
「　？　」
「では、これを見たことはあるか？」
そう言い、匣(ボックス)を見せてくる
だが、今世でそれを見たのは初めてだ
「　・・・・・オルゴールかい？　」
まだ匣を知らない雲雀が言うには正しい答え

「ならば、圧倒的に倒すのみ」
幻騎士が匣を開匣(かいこう)すると、新たに幻覚が作られた
上にパイプやホースなどが多く現れ、そこから複数のミサイルのようなものが出て、浮かびながら俺を囲む

「これは、貴様の置かれた状況をわかりやすく視覚化したものだ…。貴様は何百という誘導弾に囲まれている。更に…」
幻騎士がそう言うと、俺を囲んでいた誘導弾は全て消える
「我が匣兵器は姿を消し、霧の中の幻(まぼろし)となる。　成長したおまえは経験によりこれを退けたが、貴様にそれはない。オレと戦うには１０年早い」

「さらばだ、雲雀恭弥」

ヒュォォォォォォォォォォ

風を切る音がだんだんと迫ってくる

だが…今の俺では　まだそれを対処できない

（ご、ごっきゅん！　はよ来い‼？　来るよな！　原作通りだよな、原作通りだよなぁ‼　）

‼ドド　ウッ‼‼

誘導弾が何かに、いや、ＳＩＳＴＥＭＡ（スィステーマ）　Ｃ・Ａ・Ｉ（シー・エー・アイ）によって阻まれた。

多少の爆風は届いたが、俺にダメージが入ることはなかった。

「へ…　借りは返したぜ…。　つっても、てめーじゃわかんねーか…」

「恭さん‼‼」

声がした方には、髪型が少し変わったような草壁副委員長と　５人と１羽の群れがあった

（言葉からも察せるが、原作通り俺を助けたのは獄寺隼人か……だが、）

「草壁哲矢。　いつ群れていいと言った？　君には風紀委員を退会してもらう」

俺は草壁に向けてそう言い放った

浮雲　５７

眉間にしわを寄せながら草壁が叫ぶ
「恭さん、リングの炎です!!　　匣(ボックス)で応戦を!!」

「　リングの炎…？　　ボックス…？　」
「そうです‼？」
必死な言葉だが、雲雀(僕)は　まだ　それらを聞き慣れていない

「　ボックスが何かは知らないけど・・・リングの炎…、跳ね馬みたいな口ぶりがイラつくな。　　あの男も、これからの戦いに重要になるのは、リングの炎だとうるさくてね　」
リングに炎を・・・ムカツキを炎に・・・・・
(雲雀の心も言っている。
昼寝をしてたのに　いきなりこんな訳の分からないことになって・・・敵が現れたのはいいけど、ずいぶんとふざけたやつ　　で・・・獄寺隼人にも借りを作ってしまうし、草壁は群れてる…)

ボ　オッ！
「　君達なんて来なくてもよかったのに　」
リングには炎が灯った。それも、ヒト1人　軽く越すほどの大きな炎が

その炎を見た草壁は
「恭さん、匣(ボックス)です‼？　　足元(あしもと)の匣(ハコ)に炎を注入してください!!」
ム　スッ　「　いつから命令するようになったんだい？　　草壁哲矢。　　やはり君から咬み殺そう　」
「なっ　　お待ちください委員長‼？」

そんなことをしていると、フクロウが　クローム髑髏に何かを教えるように動いた

「…あっ　！　雲の人…後ろ!!」

彼女に言われたのもあるが、原作を知っていた俺はリングの炎を盾にしながら振り向く

！ドオ!!

（　っ！　）

幻騎士の匣（ボックス）による見えない攻撃を炎を使い防いだ。

雲の炎には絶対遮断力があるため、今の俺でも攻撃を防ぐことができたのだろう

そして、クローム髑髏は体力の限界で倒れた。

俺は幻騎士と向かい合う

「二度も仲間に救われるとは　つきがあるな。だが、もう次は…」「仲間？　誰、それ？（そんなもの知らない　）」

ボ！ウッ！

幻騎士の言葉に反応し、リングに灯る炎がさらに大きく、一気に膨れ上がる

「　跳ね馬が言ってた通りだ・・・・リングの炎を大きくするのは・・・ムカツキ　」

（ツッコミが入ってるだろうが気にせず行こう。どうせ何もできないし…）

「　副委員長…　やはり先に剣士の彼を倒すよ。　君の言うことを信じよう　」

匣（ボックス）を拾い上げ　炎を注入する

「　やり方は見ていたからわかるさ　」

匣（ボックス）が開匣（かいこう）された、だが・・・

ど　しゃっ

「　？　」

出てきたものは足元に落ちた

「キュ…　ウプ　キュゥゥ…」

出てきたのは　酔っているような様子の、針が銀色をしているハリネズミ。伸び縮みしている針が目立つ

俺はそのハリネズミ、雲ハリネズミの横に片膝をつき　手を差し伸べた

「キュッ♪」

それに雲ハリネズミは反応し振り向く

グサッ！

雲ハリネズミの伸びた針が　差し出していた掌に刺さり　ポタポタと血が垂れる

（こんぐらい平気だからな、暴走すんなよ。　マジで暴走すんなよ？　大丈夫！　傷は浅いぞ‼？　貫通してっけど！）

そんな俺の思いとは裏腹に　雲ハリネズミの目は揺れていき、涙が溜まっていった。そして・・・

「キュウゥゥ…　！キュアアアア！」ボ　ボ　ボ　ボ　ボッ！

グ　オオ!!

「　くっ　」　ガキイッ！

一瞬だった。ハリネズミが分裂したと思ったら　トゲが付いた球体がどんどん増え、巨大化していった。

その時に俺に迫ってきたトゲをトンファーで防いだ

増殖は止まらない

球体群は壁や天井を壊しながらもまだまだ増えていく。

～～～～

（匣（ボックス）兵器ってのは、兵器って付くだけあってスゲーよなー　）

直に　匣（ボックス）兵器というのを目にし　そんなことを考えながら、天井が崩れる中　球体を駆け上がって行く

そこを草壁に見つかる

「恭さん!!　どちらへ!!」

「　妙な技を使う　丸い眉毛の彼にやられっぱなしだからね　」

だが、球体のトゲが伸び出し　移動を阻まれ　球体から落ちる

ダッ　「　・・・・・・　」

「この状況では無理です‼?」

「＊＊＊＊‼?」「あっちに道あるよ！」

少し離れた所にいた弁髪（べんぱつ）の子と仔牛が、まだ残っている道を見つけた

「よし！　とりあえずそこへ‼?」

草壁は、気を失っている４人を担ぎながら移動する。

しかし、さすがの草壁でも人数が多く　１人落としそうになった

それに肩を貸す。

「　この男には借りがあるからね。　それに君にここで死なれたら咬み殺せない　」

「きょ…恭さん…」

そして、１０年後笹川了平にも肩を貸す。草壁の移動速度を少しでも上げるためだ。

（　デけーんだよテメーら…。　フン、俺だっていずれ１８０ｃｍ

位には・・・・前世の記憶によると、跳ね馬ですら１８０以上あったはずだ。だったら俺だって！　　・・・ん？　　人種が違う？・・・・・・知らんな　）〔獄寺の身長は雲雀より少し低い〕

そんな理想を考えながら、草壁の言葉を聞き流し　移動をする。
これは閉まるだろうなー、と思うような所を過ぎると、案の定。
ガシャン！　と、シャッターのようなものが降りて　来た道が塞がれ、ゴゴゴゴゴ　と音を立てながら左右の壁がすごいスピードで迫ってきた

「このままでは押しつぶされる!!　　恭さん!!？　他に匣兵器（ボックスへいき）は!!」
「　もうないよ　」
肩を貸していた２人を落とし、トンファーを取り出す
取り出したトンファーにリングに灯した死ぬ気の炎を纏わせ、迫ってきている壁を殴る
メ　キャッ！

炎を纏わせたのにも関わらず、壁は少しへこむだけ
（　！　　・・確か…対炎性…だったか・・・これ程とは…。　　一般人なら殺せる力だぜ？　　）

壁の進みは止まらないだが・・・潰される！　とも思っていない。
そして、壁がいきなり　ピタっと止まり、プシュー　っという音が聞こえたと思ったときにはもう、意識が闇へと落ちていった…

浮雲　５８

幻騎士を倒し、白くて丸い装置の元へたどり着いた沢田綱吉
そこに現れた入江正一とチェルベッロ
倒すため拳を構えた沢田綱吉だが守護者達を盾にされ手が出せない
捕まった守護者達のリングと匣（ボックス）は全て没収されていた
仲間には装置を壊せと言われたが、装置の中にはなんとこの時代の自分達がいた
この装置はこの時代の彼らを１０年前に行かせないための物だと言う
やつらの目的はボンゴレリング
沢田綱吉は大空のリングを渡すことを迫られた
チェルベッロに銃を向けられる
カウントダウン

３……２……１……

!!ズガ　ガン!!!

……ドサッ！

しかし、倒れたのはチェルベッロ
撃ったのは入江正一

「悪く思わないでくれ、少し眠ってもらうだけだ…」

入江正一は髪型を崩し隊服を脱ぎ捨てた

「沢田綱吉君と仲間（ファミリー）のみなさん・・・よくここまで来たね。君達を待ってたんだ…僕は君達の味方だよ」

入江正一がとった行動に　言い出した言葉に、皆(みな)が　驚く

今の状況が設定したゴール？
入江正一が秘密で仕組んだ計画？
自分達を鍛えるため　この時代に連れてきた？

その言葉を簡単に信じることはできない

だが、この計画にはこの時代の沢田綱吉と雲雀恭弥も関わっており、本当の敵は白蘭(びゃくらん)だと言う
入江正一は今を第一段階と、そして、クリアすべき第二段階、イタリアの主戦力の勝利が必要だと言った

～～～～～～～

イタリアでの結果を待っている間に怪我人の手当てをする
捕らえられていた仲間達は解放された

リボーンが入江に白蘭の能力について質問した
入江は、白蘭の能力は一言で説明するのは難しいが、この時代に起きているありえないことの多くが　その能力に起因していると言った

～～～～

イタリアからの情報が入った
ザンザスが敵の大将を倒したらしい
そして　イタリアの敵は撤退をはじめたそうだ
あとは白蘭を倒すだけ

そう思っていた
だが・・・

「いいや、ただの小休止(しょうきゅうし)だよ」

きゅうに現れた立体映像(ホログラム)と聞こえてきた音声
それはミルフィオーレのボス　白蘭のものだった
白蘭はイタリアの戦いを前哨戦(ぜんしょうせん)と言い
入江が白蘭を裏切っていたことも最初から分かっていたと言った

白蘭はボンゴレファミリーに7・(トゥリニセッテ)　をかけた正式な力比べを挑んできた
そして告げられた
今まで6弔花(ちょうか)と名乗っていた者が所持していたマーレリングは偽物
真(リアル)6弔花(ちょうか)という者が真のマーレリング保持者(ホルダー)
白蘭の本当の守護者達
彼らの異常な力も見せられた
戦いは10日後　チョイスと言うものを行うそうだ

そして白蘭は　今いるこのメローネ基地がもうすぐ消えると言う
立体映像(ホログラム)は消え、辺りが光に包まれていく
視界が白く染まったと思ったら地が揺れた

光と揺れが収まり辺りを見る
そこにはもうメローネ基地は無く、底の見えない大きな穴が空いていた

「どうしてオレ達だけ残れたんだろう?」
「彼が晴のボンゴレリングと共に来たからさ」

綱吉の問いに入江が答えた
「極限にここはどこだー!!?」
彼とはお兄さん。10年前の笹川了平
自分達が移動しなかったのは7つのボンゴレリングがそろい、結界ができたから
入江は白蘭の行いそうなことの何割かは読んでいたと言う

だが、了平が来たところで相手との戦力に差が開き過ぎている
どう考えてても無謀な戦いだということがわかる

しかし!
入江は、成長した自分達なら奴らと渡り合えると言った
そして、この時代のボンゴレボスからの贈り物を渡される
装置の中心が開き、そこから出てきたのはボンゴレの紋章が施されている　守護者それぞれの死ぬ気の炎の色をした匣(ボックス)
ボンゴレ10代目により託された、ボンゴレ匣(ボックス)を

浮雲　５９

メローネ基地での戦いが終わってから1日が経った

あの後は　ヴァリアーから連絡がきて、六道骸が生存している可能性が高いことを教えられ、入江正一とスパナが一応だけどボンゴレ所属となり、全員ではないけどもボンゴレアジトに帰った

そして俺は今、並中の屋上で寝そべっている。

～～～～ーーー～～～～～

・・・１０年経っても並中は変わってなかったな…　ここに来る前、昨日と今日で回って見てみた並盛町は少し変化があったけどさ

まあそうだよな、雲雀が並中に手を出させるわけないか、俺も手出しさせるつもりもないしな

それにしても・・・やっとここまで来たか…

ボンゴレ匣（ボックス）も手に入れた。あとは負け戦を見て、晴の敵を倒して、最終戦か

まるまる原作通りでつまらん・・・・次は自由を所望する。次があるかは知らんけど…

そんなことを考えていると、今いる所とは別にある屋上が騒がしくなった

沢田綱吉達が来たようだ

そして、俺の近くから声が聞こえた

「あいつら、いい顔してんな……しばらくほっといても大丈夫そうだ」

急に聞こえた声に　体勢を立て直しトンファーを構える。だがそれは聞こえ慣れた声だった

「まあ待て、恭弥。そうあわてなくても　みっちり鍛えてやっから」
「　ヤダ　」
「まってっての!!」
　声の主は跳ね馬ディーノ。俺は今までキッチリ戦えなかった鬱憤を晴らすように　彼との戦闘を始める
　だが、今の彼には部下が付いておらずヘナチョコになっていた
　戦闘の［せ］の字にもならず、俺は草壁に案内され　風紀財団の施設に向かい、食事をし、その日はそこで寝た

　そして、次の日からチョイス開催時まで、俺は跳ね馬との修行に明け暮れた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

１１時５０分　　並盛神社付近

　ドス黒い雲が並盛神社の空を覆っていき、その雲から人の顔が　地上に光を放ちながら現われ出たのが見えた。その顔は　ミルフィオーレのボス白蘭のものだった
　それは下を向いて話をし始める。その声は俺のところまで届いていた
　しばらく話をした後　その目が光ったと思ったら　光線のようなものが発射され
!!ドオンッ!!!
　それが着弾した並盛の北山が大爆発した
（　俺の並盛～!!　　いや俺のじゃなく未来の俺のか…）
　そんな事を考えながら神社に向かって俺は走る、走る、爆走する・・・・飛び上がる!

「何してんの君達？」
「よっ　待たせたな」
俺が神社に到着したと同時、山本武も反対側から現れる
そして俺達は、ボンゴレ匣（ボックス）を開匣（かいこう）した

浮雲　６０

俺達が灯した炎が　転移装置へと吸収される
俺達の炎の量は白蘭の予想を上回り　必要な炎の２倍もの数値に達していた。

獄寺隼人が話しかけ、それに山本武と俺が答える
「てめーら　おせーぞ！」
「わりーわりー」
「　僕は個人としてきてるんだ。　君達とは関係ないよ　」
「ちっ」

「だが沢田。よく来るとわかったな‼？」
「・・・いや。わかっていたのは　全員揃わなくては白蘭には勝てないということだけだ」
超（ハイパー）モードの沢田綱吉が笹川了平に答える

「うん　いいねぇ。　見事５００万　Ｆ（フィアンマボルテージ）　Ｖを超えて合格だよ。じゃあさっそく、チョイスをはじめよう」
頭上の白蘭がそう言うと、装置から複数枚のカードが　不自然な形で宙に浮かびながら出てきた
それを沢田綱吉が１枚選ぶと、俺達は装置によって転移させられた。

たどり着いたのは　雷のフィールド・超雷炎硬層高層（ちょうらいえんこうそうこうそう）ビル
目の前には白蘭と真６弔花
白蘭はジャイロルーレットを取り出し、沢田綱吉と共にそれを回す
出たものは原作通り
ボンゴレファミリー・大空１　、雨１　、嵐１　、無属性２の計５人　ターゲットは無属性
ミルフィオーレファミリー・晴１　、霧２　、雲１の計４人　ター

ゲットは晴

だけども雲雀(僕)にはそんなもの関係ない

「そんな理由で納得すると思ってるの？　僕は出るよ　」

「ひっ　ヒバリさん」

「ちょっ、そんなこと言われても」

雲雀(僕)の言葉に沢田綱吉と入江正一が焦るが、それを止める者もいる

「待てって恭弥。ったく、しょーがねー奴だなぁ」

「ディーノさん！　いつのまに⁉？」

「転移(ワープ)の時にまぎれこんだんだ。ずっといたぜ。おまえらの家庭教師なんだ、こないわけにはいかねーだろ？」

ディーノが雲雀(僕)に言う

「考えてみろよ。ツナ達がミルフィオーレに勝てば、その後は　どいつとでも好きなだけ戦えるぜ。　少しの辛抱じゃねーか。　なっ」

「・・・・・急いでよ　」

「ああ　わかった」

【　ひばり　は　まるめこまれた　】

そして、　チョイスバトルがスタートする。

！カッッットオオオ!!!

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

主人公のチョイスの感想・・・「原作通りで暇でした」

入江正一の告白後

「うお〝ぉいっ!!　てめーの相手はオレだぁ！　暴れたくてウズウズしてんだぁ!!」
「　じゃまだよ　」ぐいっ

チョイスが終わりアルコバレーノの大空　ユニが来て　沢田綱吉に助けを求めた、ユニは白蘭に迫られ、桔梗が攻撃してきたのをS・スクアーロが防いだ。

「スクアーロに…ヒバリさん‼?」
「んだてめえーは!?　つつくなっ」
「　僕の獲物だ　」

「ちょっ…みんな!!　どうする気〜!?」

沢田綱吉は戸惑い困惑していたが、ユニの覚悟を宿した瞳を見て、彼女を守ることを決意した
スクアーロと獄寺隼人と俺以外のボンゴレ側は転移装置に向かって走った

〜〜〜〜

スクアーロと獄寺隼人が匣(ボックス)を使いながらミルフィオーレに攻撃を仕掛けている
それをいつにも増して不機嫌そうな顔で見ている
（　ムス・・・・こんな状況での乱戦なんて望んでないよ　）

獄寺隼人が地上から弾を撃ち、スクアーロは匣(ボックス)兵器の鮫を使いながら宙を舞う

（・・・めんどくさい…まとめていっちまえ）
俺は　ボンゴレ　匣を開匣する
（ロール！　スクアーロ諸共敵にダイレクトアタック！）
匣から飛び出たロールが　宙にいる敵3人とスクアーロに向かって突っ込んで行く

！ドシュウッ!!
「おっと」「あぶねっ！」「・・・・・」
（ロール、そのまま増殖）
突撃自体は避けられたが、ロールは増殖し、浮遊機雷の様に敵の動きを制限した
「うおぉぉい!!てめーら！　乗れ!!?」
スクアーロが　鮫の匣兵器に乗りながら、俺と獄寺隼人の前を通るように進む
俺達はその鮫に乗り、沢田綱吉達を追う

浮雲　６１

「よぉし!!　出せぇ!!」
　俺達は沢田綱吉達と合流した
「やったんだね！獄寺君‼？」
「オレじゃねーっす。　ヒバリのバリネズミのトゲが増殖して足止めしてるんス」
　その後、オレ達を追いかけて来た白蘭を　１０年後六道骸の有幻覚が現れ足止めした
「絶対に　大空のアルコバレーノ　ユニを　白蘭に渡してはいけない」
　彼はそう言った
　俺達は沢田綱吉の掛け声と共に　リングに炎を灯し、転移装置を動かした。

＋＋＋＋＋＋＋

並盛町・並盛神社

　並盛に転移したのち、獄寺隼人がボンゴレ匣（ボックス）の新兵器の実弾を使い転移装置を攻撃した
　だが、転移装置は破壊できておらず　白蘭の元へ行き、敵を乗せて戻って来た。その際に四方に何かが飛び散っていった。
（　！　並中方向に・・晴属性の敵だったはず　）
「恭さん‼？　どちらへ‼？」
「　一つ並中の方に落ちた。見てくる　」
「私も行きます‼？」

「恭弥っ　オレも行くぜ‼?」
並中に向かう俺に草壁と跳ね馬も付いてくる。

＋＋＋＋＋＋

並盛中学校

並中に落ちたのは真6弔花の1人　デイジーで、俺達は戦闘を開始した。

!ドオン!!

跳ね馬の攻撃が決まった
「どうだ?　勝ち目がねーのはわかったろ?　降参しとくか?」
「ぼっ…ぼぼっ…僕チンはユニ様の居場所を知りたいんだ…　居場所を吐けば許してあげてもいいよ・・・・・吐いちゃいなよ!」
そう言い、デイジーは匣(ボックス)を開匣(かいこう)する
「駆けろ　スクーデリア‼?」
デイジーの匣兵器(ボックスへいき)、太陽サイ(リノチェロンテ・デル・セレーノ)と、跳ね馬の匣兵器(ボックスへいき)、天馬(カヴァッロ・アラート)がぶつかる
天馬が　大空属性の炎を纏った蹄(ひづめ)で太陽サイの額を踏みつける
炎の特性により　太陽サイは石化し、それを俺の匣兵器、雲ハリネズミＶｅｒ．Ｖ　が体当たりし破壊する。
「ぼぼっ　僕チンの太陽サイ(リノチェロンテ・デル・セレーノ)が」

「　僕のエモノに手を出さないでくれる?　」
俺は跳ね馬にそう言いつける
「オレに向かってきたんだからしょーがねーだろ?　正当防衛だ」
（　過剰防衛だよ…　）〔お前が破壊したんだろうが〕

跳ね馬はデイジーに話しかける
「さあ、もう匣兵器(ボックスへいき)はないはずだ。リングを地面において手を頭の上にあげろ」
その言葉を聞かずに　デイジーはフラフラと立ち上がる
「・・・・ぼっ…僕チンは　ユニ様の居場所を知りたいんだ…。　ワープしてすぐにお前達を見つけて嬉しかったから手加減してたけど…
居場所を教えてくれないなら　僕チンだって怒るよ」
そう言ったデイジーは自身の服を破り　左胸に埋まっている匣(ボックス)に炎を注入した。
修羅開匣(しゅらかいこう)・・・それをしたデイジーの姿が変わった
両肩付近からはそれぞれ晴の炎が羽のように常時噴射され、髪は浮かび上がり、腕、脇腹、足にはウロコが現れた。

デイジーは跳ね馬に向かって突撃する。それを跳ね馬は跳び上がることで避け、匣を開匣する
「こうなりゃ全力でいくぜ‼?　スクーデリア!!」
匣から出てきたのは先ほどの天馬と違い炎の翼がはえていた
天馬超翔(ペガソ・スーペル・サルト・ヴォランテ)

それはデイジーを攻撃するが全く効いていない。逆に攻撃によって千切れたデイジーの腕が天馬に巻きつき動きを止める
デイジーは腕を再生させ　跳ね馬に向かって飛んでいく
跳ね馬は鞭による連続攻撃を使うが　デイジーにかすることもなく距離を詰められ脇腹を刺された。

浮雲　６２

（・・・ハァー……仕方ない…）

バキ！

俺はトンファーでデイジーを殴り飛ばした

「ねぇ　君達。並中で暴れるのやめてくれる？　君達には制裁を与えなきゃね」

跳ね馬を蹴り飛ばし端に寄せる。

「いくよロール。形態変化（カンピオ・フォルマ）」

「クピィイイイ!!」

ロールの姿が変わる

なにものにも囚われず　我が道をいく浮雲と謳われた　アラウディの手錠

ガシャン

「覚悟はいいかい？」

手錠の輪の片方から雲の炎をおびたトゲが出る

俺と彼は互いに距離を詰め　戦闘を始めた

手錠のトゲで彼の皮膚を傷つけるが、それは一瞬の内に再生される

彼の拳を避け、その腕を手錠で捉える

「もう逃がさないよ」

片手に持っていたトンファーで殴りつけようとするが、彼は手錠がはめられていた腕の　一部だけ　を切り離し、すぐさま再生させ、俺の顔面を殴り　吹き飛ばす。俺は勢いよく校舎に叩きつけられた。

「修羅開匣（しゅらかいこう）は能力の掛け算なんだよ。　匣（ボックス）アニマルの持つ特殊能力

と　人間の能力が掛け合わされて　あらゆる生命体のリミッターを超えた能力を生み出すことができるんだ。　だから、トカゲのしっぽでは考えられないことも」
先ほど切り離された腕が再生していき　俺の首を締めつける
再生し始めのそれはまだ脆く、殴ることで簡単に崩れた
（ウェ…　グチャだって…気持ち悪　）
内心の感情をおくびも出さず　俺は立ち上がった
「残念だけど、君のボンゴレ匣（ボックス）は　僕チンと相性最悪さ。もう諦めてユニ様の居場所を吐いちゃいなよ」
「いらないな。　その程度なら武器（トンファー）はいらない。　校舎を壊した罪で、君を逮捕する　」
手錠を２つ…４つと増殖させる
「面白い手品だね。　でも、手錠をいくつ増やしたところで・・同じだよ!!」
彼は前かがみになりながら飛んで来た
「僕も同感さ。　１０や　２０ならね　」
腕を突き出しての攻撃をしてきた彼の腕に２つの手錠をはめ、それを雲の炎で増殖させていく
手錠は凄まじい勢いで増殖し、いくつもの手錠が拘束具のように彼の全身を捕えた。
「こんなの……聞いてない!!」
「君……死にたがってたみたいだけど、そんな甘えは許さないよ。・・・しめあげよう　」
俺が持っている方の手錠をひねると　彼を捕らえている手錠がギリギリと音を上げながら締め付けられ、彼の全身からどんどん血が噴き出る
彼は血を吐きながら叫ぶ

「聞いてない!!　白蘭様に聞いてないよ!!手錠がこんな風になるなんて!!!　苦(くる)チィー!!!」

「ぼ・・・ばふっ」

彼は泡を吹き、仰向きに倒れた

「　思ったより情けないね。　君が死にたくても死ねないのは、晴の活性の炎が体内を巡っているからだろ?　これは風紀委員が没収する　」

俺は倒れている彼に近づき、晴のマーレリングを抜き取った。

（　・・・さて……次は明日の夜明け、未来編最後の戦いか…　）

浮雲　６３

夜が明けとともに、最後の戦いが始まった。

森の中にある湖。ここには　真６弔花　雲の守護者　桔梗(ききょう)が居た
最初の不意打ちが失敗し、桔梗に匣(ボックス)を開匣(かいこう)されてしまう
雲(ヌーヴォラ)・ヴェロキラプトル
尾の先に雲の炎が灯っている　複数匹の小型肉食恐竜だ。この匣アニマルは　１匹１匹が強く、攻撃されるが、こちらの攻撃を当てることができなかった。
しかし、ランボの持つボンゴレ匣のお陰でそいつらを殲滅することができた。

それを見た桔梗は　修羅開匣(しゅらかいこう)を行った
それに対抗すべく、了平は匣(ボックス)アニマルの我流(ガリュウ)を形態変化(カンビオ・フォルマ)させ戦った
だが、激しいっラッシュで傷が開き、桔梗を倒すまではいくことができなかった。

桔梗が誰かに話しかけた。そこにいたのは雲雀恭弥
手を出さないと言った雲雀の言葉に構わず　桔梗は地中からの攻撃を仕掛けた
その攻撃により　雲雀の左腕は噛みちぎられた。
そして、次の　フェイントを入れた攻撃により雲雀は倒れた。

そのあと、次々とボンゴレ側の守備が倒され、全滅した

（　わけねーだろ　）

それらは六道骸による幻覚だった。戦いの最中　幻覚と切り替わっていたのだ。

ボンゴレ守護者、ヴァリアー、真6弔花が集まり、戦いが始まる。

〜〜〜〜〜〜

乱戦の最中　弾けるような光とともに雷のマーレリングをはめている、白蘭に似た巨大な人型が現れた

それは幻覚ではなく、そこに実在している。しかし、それには攻撃が通じなかった。

それが1つの大きな光球に包まれたと思ったら、その光球から幾つもの光が伸びてきた

その巨人、GHOST（ゴースト）は、敵味方関係なしに死ぬ気の炎を吸収していった。

〜〜〜〜

山本武や跳ね馬、スクアーロ達も合流した後、ここにいる敵味方の殆どの炎を吸収したゴーストに　手も足も出せずにいた時、沢田綱吉が救援に駆けつけた。

彼は死ぬ気の零地点突破改を使い、ゴーストと炎の吸収勝負を行った。

沢田綱吉の手に、炎ごとゴーストが吸い込まれた。だが、死ぬ気の

炎を吸収し　巨大化するはずの沢田綱吉の炎に　ほとんど変化が見られないことで　皆が警戒を始めた。

そこに、白蘭が現れた。白蘭は炎を発さずに空中に浮かんでいた。
ザンザスと六道骸が白蘭に攻撃するが、ゴーストに死ぬ気の炎をほとんど吸われた彼等の攻撃は　全くと言っていいほど通用しなかった。

沢田綱吉が攻撃を始めた。
だが、白蘭にダメージが入っているようには見えない。逆に、たった一度の攻撃で沢田綱吉は地に落とされた
白蘭の背に翼がはえる。その翼からは火の粉のようなものが飛び散っている
彼の体内にはゴーストが吸収した炎が蓄えられていると言う。

そんなことは関係ないと、沢田綱吉は白蘭に立ち向かう
しかし、沢田綱吉の攻撃が白蘭に効くことはなく、白蘭の攻撃で沢田綱吉はボロボロになる。

沢田綱吉は白蘭の挑発を受け、炎圧を上げる。白蘭もそれに合わせて炎圧を上げていく。
どんどん上がる　２人の炎圧

カァァアン　カァアン　と　音が聞こえ始めた。リングから出る　２人の炎の形状も変わる
大空のリングが共鳴しているようだ。

半円形の炎が大きくなっていく。広がるそれには攻撃が通用しない。
空から同じような炎の球体に包まれたユニが飛んで来た
それは沢田綱吉と白蘭の炎と融合し、１つの大きな結界となった。

ユニのマントの内側から、５つの　アルコバレーノのおしゃぶりが落ちた
それらのおしゃぶりからは、メガネやバンダナなど　赤ん坊達の一部がとびだしていた
アルコバレーノの肉体の再構成が始まろうとしている、アルコバレーノが復活（リ・ボーン）しようとしていると　リボーンは言う。
だが、アルコバレーノの復活には時間がかかる。それを見抜いた白蘭は沢田綱吉の首をゴ　キャ！　と捻った
沢田綱吉は倒れ、超モードも解けた。

そんな沢田綱吉にリボーンは言う。
お前は白蘭を倒さなくてはならない。ユニもお前達を平和な過去に帰すために命を捧げるつもりなんだと。

沢田綱吉は　リボーンのその言葉で目を覚ました。
だが、超モードが解けた彼は恐怖により　ガタガタと震えており、戦える精神状態ではなくなっていた。
そんな彼に、自分の運命を呪っちゃうだろ？　と、白蘭が言った
しかし彼は、それはちがう気がする。未来（ここ）でのことは、全部　大事なオレの時間なんだ　と返した。

そう返した彼にトドメをさすため、白蘭は、心臓目掛けて　ダーツのように尖ったものを投げつけたが、それは彼がランチアから貰い、首から下げていたリングによって阻まれた。
それにより、沢田綱吉は改めて思い知った
自分は全てに支えられている。皆がいたから　自分はここにいる。技も武器も　皆がいなくては完成しなかった。ここでの時間は自分の宝物だと。
沢田綱吉は自らの意志で超モードになった
その心に応えるように、皆のボンゴレリングから　光が放たれ、そ

れと共に、どこからか声が聞こえてきた。

『どうだろうな』
『あの子、言ってることがボスと同じだ』
『血は争えないでござるな』
『究極にいい奴ではないか』
『残念です…。ボンゴレには不要な　軟弱な思考ですよ』
『興味ないな』
『・・・・てめえの好きにすりゃあいいさ。　いつものようにな』
『そうだな・・・G(ジー)』
『X(デーチモ)よ…　お前の考えにオレも賛成だ。　オレの真の後継者に力を貸してやりたいが、あいにく　それはできない。　そのかわり・・・・枷を　はずしてやろう　』

ボンゴレリングを持つ者達の前に、それぞれの初代が現れた
白蘭はそれを悪趣味だと言うが、ユニはそれらは本人だと言った。
ユニには、生まれた時から記憶に焼きついている詩(うた)があると言う。

海はその広がりに限りを知らず
貝は代を重ね　その姿受け継ぎ
虹は時折現れはかなく消える

マーレとは［海］　ボンゴレとは［あさり貝］　アルコバレーノとは［虹］
この詩(うた)は、7(トゥリニセッテ)・　のそれぞれの大空の在り方を示している。

どこまでも広がる［海（マーレ）］は、横の時空軸。すなわち、平行に広がる平行世界（パラレルワールド）に生き
代を重ねる「あさり貝（ボンゴレ）」は、縦の時空軸。すなわち、過去から未来への継承に生き
「虹（アルコバレーノ）」は、どこにもとどまらず。その両方に、線ではなく点として存在するもの
そう、ユニは語った。

プリーモは言った。沢田綱吉の枷をはずすと。
『今のボンゴレリングは仮の姿だ。　ボンゴレリングは、ある時より　厳格な継承をするために２つに分割し、ボスと門外顧問の２人が保管することとなった。　だが、分割できる構造を保つために、同じ７・トゥリニセッテ　のマーレリングやアルコバレーノのおしゃぶりに比べ、炎の最高出力を抑える必要があった。
しかしもう、その必要もない。おまえになら、このリングの本当の意味と、オレの意志をわかってもらえそうだからな』

大空のリングから炎が溢れ出し、守護者のリングも光に包まれた。
それはすぐに収まった、そして収まったとき、ボンゴレリングの形が変わっていた。

『Ｘ（デーチモ）。　マーレの小僧に一泡吹かせてこい』
そう言ってプリーモは消えた。

ここから沢田綱吉の反撃が始まった
彼のパワーもスピードもケタ違いに上がっていた。
沢田綱吉は白蘭の白い翼をもぎ取った。
「どうした白蘭。翼がなければただの人か？」

だが、落ちた白蘭は狂ったように笑った。そして白蘭の背からは噴き出た血のようにも見える黒い翼がはえた。
２人は、それぞれの［こころ］のために戦う。

白蘭の攻撃がユニに落ちた
だがそれは、ユニの全身から発されている大空の炎によって弾かれた。
ユニは、おしゃぶりに命の炎を灯す
おしゃぶりに命を捧げ、アルコバレーノを復活させることが自分の運命（さだめ）だと言った。

それを止めようとする白蘭を沢田綱吉が止めている。

死への恐怖により、一度は炎が小さくなったが、再び、先ほどよりも大きな炎が灯る。
そんな時、結界の外に居た者達が、結界に攻撃し、ひと1人入れるだけの隙間が開き、その隙間から γ（ガンマ）が　結界の中に入った。
γ（ガンマ）は、自分の炎も使ってくれと、ユニを抱きしめる。

２人は微笑みながら肉体を消滅させた。

＋＋＋

沢田綱吉と白蘭は怒りに身を任せ　本気の技を撃ち合った
その結果　リングを残し消滅したのは白蘭だった
最期（さいご）の表情・・・・彼の　すがりつくような目とあの笑顔…　あれを見た者は、原作を知っている俺以外、誰も居ないだろう

白蘭が消滅したことに喜んだ者、悲鳴のような声を上げた者。ユニとγ(ガンマ)が消えたことを悲しみ、涙を流す者。残った敵にトドメをさそうとした者。そんな彼等を　俺は　一歩後ろから観ていた。

そして、アルコバレーノ達が復活し、俺達は過去へと帰った。

終わる世界
浮雲　６４

俺の人生は続き、原作通りに進んでいった・・・・・・原作通りにしか進まなかった。『継承式編』『虹の呪い編』と　そのままに…
原作終了後も、人前では『俺』の意思を微塵も出すことができないまま、俺は…いや　僕は、雲雀恭弥としての人生を終えた…。

＋＋＋

ここは並盛神社だということがわかった。

自分が何故ここにいるかは、ある程度予想がつくけど…

原作終了後も、一応　１０代目雲の守護者として、大空の彼にたまに手を貸しながら、できる範囲で好きに動きながら生きたのは覚えてる。

年をとるにつれ　体が思うように動かなくなっていき、最期(さいご)は……

ハァ…　　まあいいさ、動かなくなった肉体に執着はない。

それに、ここに来たと言うことは、

「　ねぇ、君。出てきなよ　」

そう言うと、賽銭箱の上に　小さな光がいくつも集まり、それが人の形をとったと思った時、一瞬にして、その光の集合体が見たことのある　金髪ツインテールのロリっ子へと姿を変えた。それは賽銭箱の上に座る。

そのロリっ子は、慈(いつく)しむような目で　僕のことを見つめながら、ゆっくりと声を発した

「久しぶりじゃのぉ。元気にしておったか？」

「　その目、跳ね馬みたいで気持ち悪いから潰してもいいかい？　」

「はぁ⁉？　　ぅぉ！　　…い、いきなり何を言っとるんじゃおぬしは‼？」

僕の突拍子(とっぴょうし)もない言葉に、ロリっ子は賽銭箱からずり落ち　目を見開きながら怒鳴ってきた

「　大袈裟な反応だね。　　冗談だよ。　　…１０％ほどは…　」

「聞こえとるからの！　ボソッと言っても聞こえとるからの!!」

ロリっ子のツッコミはスルーし、僕は彼女に問う
「それで？　何故、僕はまた此処に来る事になったんだい？
僕は　自分が死んだという記憶があるけど、それは確かかな？
」
「確かじゃよ。　おぬしは確かに死んだ。死んだ後に此処に来た。ほれ、姿も原作時のものに変わっとるじゃろう」
指を指され、自身の体を見てみると、確かに若返っていた。だが、今
それは関係ない

「ちゃんと答えてくれないかな？　」
「わかっとるわかっとる。（たく、相変わらずじゃのぉ）そうじゃなぁ…　まああれじゃ。おぬしには　また転生してもらおうと思っとるんじゃよ。だから、此処に呼んだのじゃ」
「・・転生…またかい？　一体何のまねだい？」
「うむ…　理由はまだ話せんのじゃ・・・まあ…こちらの不手際としか言いようがないのぅ」
「へぇ…　雲雀恭弥としての転生も含めてかい？　」
「そうじゃ。・・・理由は話せんが、これだけは言っておく・・・・おぬしには…しばらくの間、転生を繰り返してもらわんといかんのじゃ」

その言葉に　雲雀は不機嫌になりながらも返答する

「・・・・ふぅん……。　何故？　君は。僕に。また。あんな窮屈な生(せい)をおくれというのかい　」
「いや！　違(ちが)！　大丈夫じゃ！　一応　それ用に世界を整えておいたのでな、前よか自由に動けるじゃろう！
・・次の世界は、おぬしの言う　原作力は少しは抑えられとるはずじゃ。　それに、次は成り代わりではなく、新たにおぬしという人間を追加する予定じゃから、だいぶマシになるじゃろう」

ロリっ子の言い分を黙って聞いていたヒバリは口を開く

「君・・・〝だろう〟とか〝はずだ〟とか…バカにしてるのかい？
理由も聞かされず、そんな言葉を並べられて、僕が納得するとでも？　だいたい君は」パチンッ！
ロリっ子が　ヒバリの言葉を遮るようにフィンガースナップ指パッチンをすると、彼は次の言葉を発する間も無く、一瞬にして光に包まれ、この場から消え去った。

「・・・・あ～……　面ｄｏではなく、まだ理由を話せないからと言って、急に飛ばすのは気が早かったかのぉ…」
ロリっ子は腕を組みながら空を見上げた。空には浮き雲が２つ浮かんでいる。

「うむ…　今回、あやつには　ワシが手を加えた世界に飛んでもらったが・・・一体、どうなることやら…」
ハァー
うつむき、ため息を零す
「憂鬱じゃ。今のあやつを飛ばす前に、別世界に呑み込まれてしまった、未来編のあやつの監視もある・・・おっと、監視と言ってしもうた…見守りじゃ見守り」

ロリっ子は　片手を顎に当てながら考える
今飛ばした、もとい送ったあやつは　記憶が戻るまでかんｓ、ではなく見守っとけば良いじゃろ？　あやつを入れるため、新たに創った世界じゃから、少し不安定じゃが、その世界に造ったあやつの肉体に、統合された記憶が定着し、所謂記憶が戻った状態になれば、ある程度目を離しても大丈夫になるじゃろう。始まりの時みたく、前世の記憶が戻る前の記憶が消えてしまったら、その時はその時じゃな。
それと未来編のあやつの説明は、まあ　その時したからいいじゃろ。どうせ別世界だしの。

・・・ハァー
あやつを繰り返し転生させる原因となったあの若造共には、もっとキツ～イお仕置きが必要じゃのぉ。　はてさて、何をさせようかの

そんな事を考えている時　テレパシーが届く
『おば様～　おせんべいをお持ちしました～』
『お、　わかったのじゃ。今行くぞ～』
「よし、考え事は煎餅を食べながらでいいじゃろ。・・・あやつには…いずれ謝らないといかんのぉ」
ロリっ子がそう零した次の瞬間にはすでに、彼女の姿は何処にも見当たらなかった。
此処にあるのは、並盛神社とその周辺に似た場所と、空に浮かんでいる2つの雲だけだった。

番外編
雲は漂う　（１０年後　大人雲雀）

白蘭を倒した事によりマーレリングの力が無効化された。それにより白蘭がマーレリングを使い引き起こした出来事は全て、全パラレルワールドのあらゆる過去に遡り抹消された。

抹消とは、（ぬりつぶして）消してしまうこと

僕達の世界は、マーレリングが封じられているという過去が存在する世界に塗り潰された。

＋＋＋＋＋＋＋＋ーーー

置の前に居たんだけど・・・
僕は今、並盛神社の前に立っている。
（幻術…ではないようだね。転移装置、とも違うかな…あれは多くの炎が必要なはず。誰も炎を使ってなかった。炎が貯めてあったのなら別だが。そもそも此処に僕しか居ないから、転移装置という可能性は除外していい。あれは白蘭でも、まだ縮小化に到ってないだろう。
復讐者の夜の炎？　復讐者が僕に接触する理由が分からない。可能せは低いけど、復讐者だったら厄介だな、今の僕は　彼らに手も足もでないだろう。　他の可能性は・・・・　）
現状把握をしながら、敵が居る可能性も考え　周囲の気配を探りつつ、持っている武器を思い出す（この間０．２秒ほど）
（雲のリングを切らしてるから匣兵器は使えない。炎を灯せないトンファーは有るにはあるが・・・!!　）
仕込みトンファーを取り出そうとしたものの、トンファーが無いことに気付いた
（・・いつの間に…どこかに落とした？　・・なら、現状使えるものは身体(からだ)が１番か…　）
だが、人の気配どころか、動物の気配でさえも全く感じない。これは異状だ
危険だが、目を閉じて気配を探ることに集中する。
此処には生き物１匹存在してない。。。。。。あれ…？

僕の気配もない

バッ　と勢いよく目を開けて自分の体を確認する

（有る。有る。有る。　いつも通りの僕の体　）

だが無かった。正確には無くなっていた

（？　　幻騎士に付けられた傷が無い　）

そして　傷を確認するために体に触れていて気が付いた

（あ……れ…??　　・・・・・脈が、無い・・心臓が動いてない。あ……いつから・・・・呼吸をしていない……っ！　）

視界が揺れる。意識が朦朧としていく。何も考えられない。

「

「…」

「……」

「……！」

「…っ……！」

「！しっかりせい!!」

「　っ！　・・・・あ…　」

いつのまにか閉じていた瞼を開けると、鮮やかな赤がこちらを覗いていた
「・・・・・」
僕は何も考えずにそれを見ていたが、次第に赤色が離れていき、僕はそれが人の目だということに気づいた。その目の持ち主は金色の髪のしょう、、いや幼女だった。

「ハァー・・・・正直すまん…ワシの配慮不足じゃった。　まさかおぬしがＳＡＮチェックに失敗するとは思わなんだ。　創ったばかりで設定が甘い、早急に設定の見直しをせんとな…。あやつが大丈夫だったんで　少し油断しとった　」
早口でボソっと言った言葉は聞き取れなかったけど、どうにか正気を取り戻すことができた。そして僕の腰ほどの背もない彼女と　この場所のことも思い出した。
僕はまだ少し違和感の残る頭を片手で押さえながら、彼女との会話を進める
「・・・随分と久しぶりだけど、、今の事も含めて説明してくれるよね　」
「疑問形じゃないのぉ。　まあ、説明するがの…。　まずは今おぬしに起こったものについてじゃが、簡単に言うと、おぬしが気づかなくてもよいことを　連続で気づいてしまったために起こってしまった現象じゃな。一時的狂気とも言う」
「　ああ。ニャルや黄衣とか出てくる系にあるあれかな　」
「そうじゃ。じゃがもう起こらないようしとく、じゃからこれへの詮索はなしにしとくれ。
それでおぬしが今此処に居ることに関してじゃが。まず、おぬしが今までいた世界は消えてしまったのじゃ。少し違うが　例えは、、２つのセーブデータのがあるとするじゃろ。その２つには別々のデータが保存されておった。じゃが、片方のデータがもう片方より良いルートに入ったため、良いデータを悪いデータの方にも上書き保存

し、悪いデータは良いデータに消された。・・・という感じかのぉ。上書き保存した理由は、良いルートを進めてる時に　選択肢を間違え、悪い方に行った時に少し前からやり直しするため。保存できる場所は2つしかなく、交互に保存するために悪いルートをを消した。

その悪いルートがおぬしが居た世界じゃったと考えてくれ」

「　何それムカつく　」

「例え話じゃよ。おぬしが居た世界がそうじゃっただけで、消えずに進む未来世界だってあるはずじゃ」

「次に、この場所が繋がっとる世界は、おぬしが元いた世界とは異なる世界なんじゃよ」